

CONTENTS

I. はじめに	1
1. 本論の目的	2. 先行研究
3. 新疆とグレイトゲーム	
II. スタイン探検人生	13
1. 生い立ちと留学	2. インド生活
3. 第一次新疆探検	4. 第二次新疆（を含む中央アジア）探検
5. 第三次新疆（を含む中央アジア）探検	
III. アメリカの憧れ	38
1. ハーバード大学の思惑	2. ヘディンと中国との西北科学考察団
3. スタインの決断	
IV. 第四次新疆探検	52
1. 新疆への「遊歴」ビザ取得	2. 厳重に監視せよ
3. スリナガル出発	4. 入国許可待ち
5. 中国入国	6. カシュガルで待機
7. カシュガル出発許可	8. カシュガル出発
9. ホータン到着	10. ホータン出発
11. ケリヤで療養	12. ニヤ遺跡「発掘」
13. エンデレ遺跡調査	14. チェルチェン到着
15. チャルクリクへ向かう	16. ビザ取り消し出国命令を知る
17. コルラへ向かう	18. クチャへ向かう
19. アクスへ向かう	20. カシュガルへ向かう
21. カシュガル帰着	
22. 収集文物整理・調査継続認められず	
23. さらば中国	24. 失意の出国
25. スリナガル帰着	26. 文物は何処に
V. カブールに死す	127
1. 新天地をもとめて	2. カブールに死す
VI. おわりに	129
1. それぞれのグレイトゲーム	2. スタインの評価
注	139
参考文献	160
図版出典一覧	i
英文サマリー	iv

スタイン第四次新疆探検とその顛末

小島 康誉

I. はじめに

1. 本論の目的

筆者は1982年以来、中国新疆ウイグル自治区を140回以上訪問し、世界的文化遺産保護研究・人材育成・日中間相互理解促進に微力を捧げてきた⁽¹⁾。文部科学省の科学研究費助成をはじめとして、日中両国の多くの方々のご指導ご協力のおかげであり深く感謝している⁽²⁾。世界的文化財保護研究では、キジル千仏洞保護・ニヤ遺跡調査研究・ダンダンウイリク遺跡調査研究・同壁画保護研究・歴史档案史料出版・中国文化遺産保護網運営などを日中共同で展開し大きな成果をあげた⁽³⁾。

これらの中で、1986年参観時に人類共通の世界的文化遺産と直感し修復保存協力を開始したキジル千仏洞をふくむ「シルクロード・天山回廊」(略称)は、2014年6月「世界文化遺産」登録に向けて中国・カザフスタン・キルギスタン3ヵ国政府が鋭意推進中である⁽⁴⁾。ニヤ遺跡もこの当初計画に含まれていたが、さらに多くの国をふくめた巨大項目であったため計画が縮小され次段階へ繰り延べされた⁽⁵⁾。これらのことから筆者が日中共同で取り組んできた保護研究事業の価値が確認いただけよう。

前述の遺跡調査研究過程で、スタインの報告書などが参考資料として大いに役立った。それらを読めば読むほど、スタインの人生に興味を持つようになった。筆者自身が新疆の遺跡を調査・発掘・保護してきたので、その興味は中央アジア史研究者、あるいは「シルクロードファン」といった方々が彼にもつ興味とは趣を異にしている。彼の生き様に迫りたいと思ったのが、この本論のきっかけである。スタインが活躍したニヤ遺跡やダン

ダンウイリク遺跡での永年の調査を通じて熟知したタクラマカン沙漠関連の知見などからも、伝説的存在のスタインの行動を読み解きたいと思う。

ハンガリー生まれのユダヤ人でのちにイギリスに帰化した探検家で考古学者のマーク・オーレル・スタイン卿（1862～1943・Sir Marc Aurel Stein、スタインと略す）は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、沸騰したシルクロード探検の象徴的人物である。スタインは強い意思と研究力・交渉力、さらには栄華を誇った大英帝国をバックに、現在の新疆ウイグル自治区のニヤ遺跡を主舞台として、ダンダンウイリク遺跡・楼蘭遺跡・アスターナ古墳・敦煌莫高窟・カラホト遺跡はじめ、ガンダーラ地方・イラン・パキスタンなどで遺跡を調査・発掘し、卓越した研究成果をもたらした⁶⁾。一方で大量の文化財を持ち出した⁷⁾。そのため日本や欧米で高く評価されている反面、中国では「盗掘者」の代表のような位置づけがなされている。

スタインの新疆探検に関して、第一次（1900～01）・第二次（1906～08）・第三次（1913～16）は、大々的成果をあげたことによる彼本人の大部の報告書が刊行され世に知られているが、第四次探検（1930～31）は屈辱的敗北となったためか報告書を出しておらず、近年までその新疆探検は3回とされ、4回目については詳しく知られていなかった。最近になって研究が少しずつすすみ、第四次探検に関する史料も刊行されつつあるが、いまだ不明な点も多い。

例えば、スタインほど情報収集力に長け、中国の事情を熟知していた者が、何故、時代を読み違えたのか。ハーバード大学は無理を承知のうえ、何故、スタインに探検資金を提供したのか。イギリス（インド帝国を含めて）は何故、スタインの新疆探検を支援しつづけたのか。中国内の中央・新新疆・現地の対応はどうであったのか。彼本人は調査や発掘が禁止されたにも関わらず、何



図1. マーク・オーレル・スタイン卿（1929年）第二次新新疆探検報告書（復刻版）より転載



図2. スタインがニヤ遺跡に残した「鍋蓋」(部分)
「N.X V49」とある(日中共同隊1996年収集)

故、ニヤ遺跡を「発掘」したのか。持ち出しを禁止され彼が残した収集遺物や写真は今どこにあるのか。持ち出し禁止遺物の一部が大英博物館に収蔵されているという「風説」は正しいの

か。またスタインはじめ諸外国探検家の文化財持ち出しをどう捉えたら良いのか。このような素朴な疑問に少しでも迫りたいと思う。さらには新疆でのイギリスやロシアなどの外交戦にも触れたいと思う。

なお本論では「第四次探検」と称しているが、その規模と成果は第三次までと比して大きく劣るものであり、むしろ「踏査」とすべきかもしれない。しかし、スタイン本人やパトロンであるハーバード大学・大英博物館が本格的発掘を目的としたことに疑問の余地はなく、現にニヤ遺跡で「発掘」しているので、「探検」としたことを付記しておく。また二次と三次は新疆以外も探検しているが、本論の主題から二次三次は新疆（を含む中央アジア）探検とした。

2. 先行研究

ジャネット・ミルスキー『考古学探検家スタイン伝』(杉山二郎・伊吹寛子・瀧梢訳・全2巻・六興出版1984)はJeannette Mirsky., *SIR AUREL STEIN: ARCHAEOLOGICAL EXPLORER* (The University of Chicago Press 1977・英文)の全訳である。インド・ハンガリー・イギリスなどでのおよそ12年に及ぶ調査研究の成果である。スタインの書簡や報告書あるいはその他の関係書簡などを大量に引用し、その生涯を克明に記録している。B6版上下2巻約76万字が二段組みされ、さらに難解な文脈で一読するのさえ一苦勞す

る伝記である。杉山二郎による長い解説「スタインとその時代」が収録されている。

張力・于江「斯坦因第四次入新簡述（スタイン第四次新疆入り概要）」（新疆文物考古研究所『新疆文物』1992第4期・中文）がある。両者とも新疆ウイグル自治区档案館の所属であり、新疆档案館収蔵史料からスタイン第四次探検の概要が記されている。なお本論は内陸アジア史学会『内陸アジア史研究』第12号（1997）に孫躍新（佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構）による邦訳が掲載されている。

Annabel Walker（アナベル・ウォーカー）„*AUREL STEIN-PIONEER OF THE SILK ROAD*（University of Washington Press1998オーレル・スタイン—シルクロードのパイオニア・英文・初版London1995）はミルスキー本に刺激されたかのようにはあるが、スタインの人生を淡々と記録している。スタインが新疆探検で幾度となく越えた峠（Kilik・Mintaka）略位置図が添付されている。

Shareen Blair Brysac（シャリーン・ブレア・ブライザック）„*Last of the Foreign Devils*（Archaeology1997.11～12・英文）はタイトル「外国人悪魔たちの最後」が示すように、スタインの文化財収集過程を批判的に紹介し、第四次の失敗の背景にハーバード大学と関係がある燕京大学の学生部長ウィリアム・フンの画策があったとしている。

金子民雄「考古学的芸術破壊—スタイン第四次中央アジア探検失敗の背景」（丸善『學鐙』1998）がある。上記「外国人悪魔たちの最後」を紹介しつつ、一中国人が情報を中国側へ流し反対運動を煽ったことは、フェアなことだったのか、悪いことだったのかについては歴史が判断を下すだろうとしている。

新疆ウイグル自治区档案館・佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構編『近代外国探検家新疆考古档案史料』（新疆美術摄影出版社2001・中文・目次日英文）・『斯坦因第四次新疆探検档案史料（スタイン第四次新疆探検档案史料）』（新疆美術摄影出版社2007・中文・目次日英文）には新疆档案館など収蔵の関係史料が豊富に収録（後者にはCD添付）されている。

王冀青『斯坦因第四次中国考古日記考釋（スタイン第四次中国考古日記

校注)』(甘肅教育出版社2004・中文)はオックスフォード大学ボドリアン図書館収蔵のスタイン日記を閲覧し10年にわたって研究し、その難解な筆致と表現をあますところなく中国語訳し、詳細な注釈を付した労作であり、東洋文庫講演録「奥莱尔・斯坦因第四次中央亜細亜考察(オーレル・スタイン第四次中央アジア調査)『敦煌輯刊』(敦煌輯刊雑誌社1993第1期・中文)もある。これらの関係諸氏に感謝したい。

3. 新疆とグレートゲーム

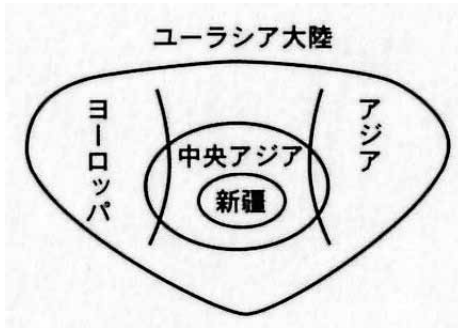


図3. 中国新疆の地理的概念図
(中央アジアの範囲はユネスコによる)



図4. 1930年頃の中・英印・露の勢力略図
○印が新疆省カシュガル

この一帯の歴史は非常に複雑である。その要因の第一は、中央アジアあるいは東トルキスタンとも西域とも呼ばれるその位置に起因する。ユーラシア大陸のほぼ中央にあって、東は中国文明圏、西は西アジア文明圏に接するとともに、北は遊牧民族が群雄割拠した北アジアに接し、南は巨大ないくつかの山脈をへだてて、仏教をはじめとする宗教的文明を生んだインド亜大陸に接している。東西南北よりたえず大きな影響を受けざるをえなかったのである⁸⁾。第二は、上記により多くの民族が行きかい(その結果、現在の新疆にはウイグル・漢・カザフなど47もの民族が居住している)、支配者が度々入れ替わっ

たからである。第三は、厳しい自然環境がある。新疆の疆の略字「疆」は新疆の地形に通じるともいわれる。三本の「一」はアルタイ山脈・天山山脈・崑崙山脈、その間の二つの「田」はジュンガル盆地クルバントングド沙漠とタリム盆地タクラマカン沙漠。この一帯はこのように巨大山脈（その巨大さは天山山脈が2013年「世界自然遺産」に登録されたことから理解いただける）と超乾燥地帯で生活には適しにくい過酷な土地が殆どであり、人々はより豊かな土地を目指した。以上のようなことからその歴史が複雑化したといえよう。

スタインの四次にわたる新疆探検は1900年から31年に行われたが、それにはその複雑で特殊な時代背景が深く関わっている。欧米で「グレートゲーム^⑨」と称された諸外国による「領土争奪」を意図した諜報戦が展開された時期である。この諜報戦と同時進行的に活動した主な探検家や地理学者らはロシアのプルジェワルスキーやコズロフ、フィンランドのマンネルヘイム、イギリスのヤングハズバンド、スウェーデンのヘディン、ハンガリーのスタイン、ドイツのグリュンヴェーデルやルコック、フランスのペリオ、アメリカのハンティントン、そして日本の西徳二郎や大谷光瑞などである。

彼ら自身の認識の有無にかかわらず、その活動は「グレートゲーム」と密接な関係にあった。彼らの探検はある意味「グレートゲーム」の先兵であったとも言えよう。

遠く離れた外国での大規模探検、その費用は個人では手に負えない多額なものとなる。例えば、スタインの探検費用はイギリス・インド両政府やその関係機関から提供されている。ペリオは探検資金提供をロシアに期待し、その参加要請に沿いロシア軍参謀本部から参加を命じられたマンネルヘイム（後にフィンランド軍最高司令官をへてフィンランド第六代大統領となった）はロシア軍大佐としてペリオの探検に同行した。ルコックの費用もドイツ政府が出している。

このように探検費用をその政府や政府関係機関が負担したのは学問的調査を支援すると同時に国益の拡大という側面があったことは明白である。それは彼らのシルクロード探検に限らず、21世紀の今日における多分野で

の各種助成などでも同様であろう。

杉山二郎も「スタインとその時代」で記述している。

流砂に埋もれた都市がある、寺院址がある、未解の古文書が伏在する、というように、まだだれも踏破しない未知の国を求めてだけの動機だけで、あの列国の発掘競争が熾烈に行われたのだろうか。わたくしは夥しい消費を伴うこうした踏査調査が、政府や国家機関から派遣される限り、単なる学術研究にのみ資金資材を給与するものなのだろうか、といった単純な疑惑を懐いている。そして吾が大谷探検隊も仏教調査団でありながら、何らかの形で軍機密にあずかっていたとみたいのである。…政商久原房之助氏を媒体とした、軍部とくに参謀本部からのかなりの機密費が捻出転用されていたのではないかとわたくしは推測している⁽¹⁰⁾。

金子民雄も『西域探検の世紀』に記している。

この微妙な時期がまた西域探検の最盛期にも当たっていたのである。一般に情報・外交戦と探検調査とはまったく無関係に見えるが、実はお互い密接な関わりを持っていた。探検は純粋な学問的研究であった半面、高度な情報収集作戦でもあったのである。だからこそ各国は莫大な探検資金を惜しみなく出したのだった⁽¹¹⁾。

また同「タクラマカン、ロプ沙漠に入った日本人たち」には「大谷探検隊にかかったスパイ容疑」に関する1903年外務省文書と容疑に対する1913年大谷光瑞の外務省総務長官あて弁明書（ともにハンガリー科学アカデミー蔵）が掲載されている⁽¹²⁾。

「グレートゲーム」を生み出した時代背景を清朝と中華民国初期に絞って略記する。

1636年中国東北部瀋陽でマンジュ人・モンゴル人・高麗系漢人からホンタイジが共通の皇帝に選ばれ清国が建国された。翌年には朝鮮に侵攻し属

国とした。1644年に明朝が滅び清の二代目皇帝が北京に入り中国支配が始まった。清は1751年チベットの動乱を鎮圧し事実上の保護国化、1755年には現在の新疆一帯のジュンガル王国を倒し、1759年にはその一帯を制覇し、新しい国境地帯を意味する「新辟の疆土」と呼んで統治し始め、清の領土は最大となった。

その後の清は次第に弱体化し、1840年にはイギリスとのアヘン戦争が始まり、1842年に香港をイギリスに割譲。1851年には太平天国の乱が起き、1857年英仏連合軍が広州を占領し第二次アヘン戦争、翌年天津条約を結ぶも1860年には英仏連合軍が北京の円明園を焼き打ち。またロシアに1858年黒龍江左岸を、1860年沿海州を奪われた。こうした中、1865年コーカンドのヤークーブ・ベクに新疆の実権を奪われるも、1875年軍閥左宗棠が私兵を率いて新疆平定を開始。1878年に清軍が新疆を再び平定し、1884年には新疆省を設置したが、清による実質支配は脆弱でロシアの強い影響力がおよんでいた。

一方で同年ベトナムを巡りフランスと清仏戦争。1894年には日本との日清戦争（中国では甲午中日戦争と呼称）が始まり、翌年清は敗北、台湾などを日本へ割譲。1898年には義和団が山東省で蜂起、1898年ロシアに旅順・大連を租借に出し、1900年にはロシアに満州を占領され、同年義和団が北京に入った。1904年にはイギリス・インド連合軍にチベットラサを占領され、1905年朝鮮半島とロシア主権下の東北部（満州）を主戦場とした日露戦争に勝利した日本が影響力を強めた。

1911年辛亥革命、翌年には清朝が崩壊し中華民国が誕生した。1918年第一次世界大戦が終結し連合国側で前年に参戦していた中国は諸外国との不平等条約改正の足がかりを得た。1919年に中国国民党が結成され、1921年中国共産党が結成された。1924年には第一次国共合作が決議されるも、1926年国民党が北伐を開始し、翌年には第一次国共合作は決裂し、国共内戦に突入。1928年蒋介石が北京入城し、南京に国民政府が成立し、1930年国民党が共産党大規模討伐を開始した。1931年には満州事変（中国では九一八事変と呼称）が勃発した。

新疆に絞って簡記する。1905年日露戦争で敗北したロシアは中央アジア

でのこれまでの利権を固守すべく、1907年永年のライバル英国と「英露協商条約」（イラン・アフガニスタン・チベットに関する）を締結した。これにより英露の新疆「領土争奪」戦は終了したかにみえたが、両国は虎視眈々と狙っていた。1917年ロシアでは2月革命、10月革命とつづく内戦状態となり、「英露協商条約」は反故となった。1922年ソビエト社会主義共和国連邦（本論では第一次～三次新疆探検との連続性などによりこれ以降もロシアあるいは露と表記）が誕生した。

1928年に楊增新が国民政府から新疆省長に任命された。当時の中国は軍閥による内乱状態で、楊は独裁的に新疆を治めた。英露両国に対しても独自の外交を展開したが、同年、楊は部下に暗殺された（金樹仁黒幕説やロシア黒幕説も）。犯人を逮捕した金樹仁が実権を握り、同年新疆省長に任命された。金の統治は腐敗と圧政がつづき民族間の紛争が多発した。1931年にはムスリム農民蜂起が発生。その支援要請に応じた回族馬仲英が甘肅から新疆へ進撃、金樹仁軍と交戦したが敗れ河西へ撤退した。

1931年ロシアは南京政府ぬきで新疆省と「ソ連新疆密約」（ロシアは新疆省民を優遇、新疆は発展のためにロシアへ産業分野での特権を付与、新疆はロシアの自由通行を許可）を結んだ⁽¹³⁾。英国も同年スタインとは別の調査隊で、空港建設のため新疆省約6割を空中偵察すべく企てたとの新疆側史料や報道もある⁽¹⁴⁾。

また大国ロシアを破った日本はその高揚感と目指す満州経営のため新疆「赤化」（ロシアの影響力増大）防止へ着手しはじめた⁽¹⁵⁾。1931年以降も「東トルキスタン共和国」（中国では「三区革命」と呼称）の成立と滅亡（第一次1933～34・第二次1944～49）や盛世才を支持したロシアの進出など混乱は続いた。グレートゲームは続いていたのである。

スタインの四次にわたる探検は、以上のような清朝衰退・滅亡期から中華民国創成期・国民党と共産党結成から国共内戦といった混乱期にあって、弱体化した中国に対して列強によって繰り広げられた領土侵略戦、そしてその一環としての英露を主とした新疆「領土争奪」諜報戦と密接な関連をもって行われた探検を代表するものである。

「領土争奪」諜報戦、例えば長い植民地支配をへてインド帝国を建てた



図5. 旧英国駐カシュガル領事館
現在は其尼瓦克（チニバグ）ホテル



図6. 旧ロシア駐カシュガル領事館
現在は色満（セマン）ホテル

(1877) イギリスは北上戦略をとり、19世紀中頃から周辺王候国を併合してきた中央アジア制圧強化と不凍港を求めるロシアは南下戦略をとり、その衝突地帯が新疆であり、両国はカシュガル（喀什噶爾・現在の喀什・カシュ。本論では当時の呼称訳カシュガルと表記）に領事館を置き激しい

諜報戦を繰り広げた。その進出ぶりを紹介する。

国民政府湖南の軍署在職中に中央財政部の命により新疆を調査した第87師長・謝彬の『新疆事情』には、1916年当時の状況として、次のように記録されている。

庫車（クチャ）…英商四十余戸・露商六十余戸、英露ハ各々商官ア

リ、相互間ノ交渉ニハ時々困難ヲ来スコトアリ。温宿（アクス北）…漢人四十余戸、回民（ウイグル）百二十余戸、露商四十余戸、英商十余戸、英露ハ皆商官アリテ貨物通過ノ『パス』ヲ発行シ以テ税金ヲ免レ税局ニ於テ之ニ対スル交渉ニ頗ル困難ヲ来ス、南疆ノ各城ハ多ク之ニ類ス。喀什（カシュガル）政情…英露両国籍ノ商人雑居シテ…租界ニ同シ。英露ハ各領事アリテ移民ヲ統治ス。露国領事ハ清ノ光緒七年（1881年）三月ニ設ケラレシ…領事一、事務官一、翻訳官一、医官一、衛隊武官一（騎兵隊四十七名ヲ統率ス）アリ。英領事ハ清ノ光緒二十一年（1895年）ニ始マル…領事一、医官一、書記生一アリ。…知ラス夫レ何ヲナサントスルカ。英国ハ之（20余棟からなる堅固な館）ヲ利

用シテ以テ露人ノ印度ニ南下スルヲ制セント欲ス。英使…清廷ニ喀什噶爾（カシュガル）ヲ割キ立テ藩封ト為サンコトヲ請フ、左宗棠力説シテ不可トナシ乃チ其ノ事終ル。葉城（カルガリク）…英国籍ノ商民百四戸男女合計四百六人。露国籍ノ商民百四十三戸男女合計七百三十人ナリ。和闐（ホータン）…英国籍人四百余人露国籍人三百人、英露ハ各々商官アリテ常に困難ナル交渉多シ⁽¹⁶⁾。

などとロシアは軍を駐屯させ、英国はロシアの南下を阻止するための館を企て、両国人が多数居住し、罅迫り合いがつづき、貨物パスを発行し新疆政府の税金逃れを行い、英国は清朝にカシュガルの分割を要求した、ことなどが記されまさに「租界ニ同シ」状況であった。

スタインはその英国領事館（現：其尼瓦克賓館・チニバグホテル）をベースとして活動した。中国入国ビザを得るのに武器輸出を「交換条件」（後述）としているほどである。旧英国領事館の屋上に今も残るスタインが練習したものといわれる多数の拳銃弾丸跡を筆者は実見している。

「グレートゲーム」には日本も参戦している。日英同盟（1902）を結んだ日本の大谷探検隊（1902～14にかけて三次）も英国領事館の各種協力を得ている。上記『新疆事情』も日本の外務省調査部第三課が情報収集の一環で、「調第14号」として謝彬著『新疆遊記』を全訳したものである（昭9・1934）。該書にウルムチでの宴会の記述に「同席ニ日本人佐田繁治アリ、国際探偵ナリ」とある⁽¹⁷⁾。

1905～07年にかけては林出賢次郎・波多野養作・草政吉・三浦稔・肥田（桜井）好孝が外務省から新疆・甘肅・蒙古などの視察に派遣されている⁽¹⁸⁾。「諜報戦」を示す発言が残されている。「実は英国政府とわが外務省と商議の結果、英国はインド国境から新疆省西南端カシュガルまで調査員を出し、日本からは新疆省の伊犁（イーニン）より蒙古の科布多（コブト）…方面に調査員を出して外蒙、新疆の国境地方を調査することになり、外務省からこれら方面へ派遣する青年を同文書院から推薦せよとのことで、引き受けた次第であるが、従軍する意気をもって、行ってくれないか…」と林出らに語ったのは東亜同文書院（上海）の根津一院長である⁽¹⁹⁾。東亜

同文書院「中国大調査旅行」は1901年から始まり林出・波多野らの新疆調査で本格化した⁽²⁰⁾。根津院長は参謀本部福島安正少将（1892年シベリヤ単騎横断）経由で外務省「清国調査旅行補助金」を得て、卒業論文のための調査旅行を制度化した⁽²¹⁾。戦火激化の1942年までに約700コースの調査旅行が実施され、毎年70名（1935年からは約100名）ほどが参加した稀有な活動である⁽²²⁾。愛知大学がその後身校である。

また日野強陸軍少佐も「その筋より新疆視察の内命を受け」、1906年9月7日東京を出発し翌年12月25日「帰京復命」するまで、北京・洛陽・西安・蘭州を経て新疆に至り、ハミ・トルファン・ウルムチ・イリ・カラシャール・クチャ・アクス・カシュガル・ヤルカンドからインドへ入り、各地で詳細な調査をしている⁽²³⁾。日野は多賀宗之（袁世凱の軍事顧問）・大谷光瑞一行・林出賢次郎・上原多市（清軍武備学堂教職）・呉禄貞（清軍騎兵科監督）らの協力も得て、一部行程を共にしている。カシュガルでは英国領事館マカートニーよりインド行きなどの世話を受けている。その収集情報は『伊犁紀行』に細かく記録されている。第一部のクチャ部分には「二名の仏人、数十名の土民を役し、古物の発掘採集に従事せる山を開けり⁽²⁴⁾」とあり、カシュガル部分には英（印）露両国の進出ぶりが記されている。

露国領事、英国印度貿易事務官駐在し、露清銀行支店ならびに露国の郵便局等あり…市中に往来するの状は、東西人種の博覧会を見るの如く…最も多きは露人にてすべて商売とし、その在住者約五百名あり、次は印度商人約三百名とす…通貨は露、清、印度の各貨幣流通す…露国領事館には、六十騎の護衛兵を置く、その他露国の国境配兵大略左の如し…カシミールとカシュガル間の通信は毎月三回…⁽²⁵⁾。

第二部には新疆各地の地勢・風土・住民・風俗・宗教・教育・産業・商業・交通・行政・兵備・歴史・露人の現状・新疆所感が詳細に報告されている。まさに参謀本部の「内命を受けた」特務少佐らしい地図・写真・スケッチも含んだ詳細な「諜報戦」情報であり、帰国後速やかに公開（しかも陸軍大将奥保章の序を得て・初版1909）されたのは英露両国への「牽制」

であろうか。

さらにはロシア革命の裏舞台で過激派に働きかけ内部から崩壊を謀った明石元二郎陸軍大佐も新疆以外ではあったが中央アジアのグレートゲーム参戦者といえる。

II. スタイン探検人生

1. 生い立ちと留学

スタインは1862年11月26日、現在のハンガリーのブダペストでユダヤ人家庭に生まれた。父はナタン・スタイン、母はアンナ・ヒルシラー・スタイン。姉にテレザ、兄にエルンストがいる。母45歳（推定・父親は生年不明）での子であり、姉とは21歳、兄とは19歳も離れている。一家にとって思わぬことであったであろうスタインの誕生、愛情が注がれた。親子ほど離れた兄エルンストは生涯にわたってスタインを支えた。また母の弟で著名眼科医であったイグナツ・ヒルシラーも39歳下の甥の「出世」に気を配った。

両親は自分たちや姉はユダヤ教であるのに兄弟二人にはユダヤ教でなく、キリスト教（プロテスタント）の洗礼を受けさせた。将来ユダヤ教徒として差別されるのを少しでも避けるためにと親が考えたからといわれている⁽²⁶⁾。

居住地区・学校・職業なども制限された当時のキリスト教ヨーロッパ社会での反ユダヤ主義（たとえばオーストリア・ハンガリー系ユダヤ人は参政権が持てなかった。法的に認められたのは1896年⁽²⁷⁾）のなか、ユダヤ人への「いわれなき差別への劣等感と反骨心」がスタインの「異郷での生涯探検」を決定づける最大要因であったのであろう。スタインがハンガリー市民権を捨てイギリスに帰化したのもこのような差別から逃れるためでもあったと思われる。残念ながら差別は今も世界中で存在している。

スタインは地元の小学校へ入り⁽²⁸⁾、母語ハンガリー語のほかラテン語や古代ギリシャ語も学んだ。そして、10歳から15歳までドイツ・ドレスデン

のルッター派の全寮制中学クロイツシュレーで勉学に励んだ。兄エルンストと叔父イグナツがユダヤ差別から逃れ出るためにもドイツ語とドイツ文化を身につける必要があるとの決断による。多感期に家族のもとを離れて過ごしたことは、彼の人生に大きな影響を与えた。異国での探検人生で孤独に耐えられたのは、この5年間に負うところである。孤独に耐えられたというより、彼の場合は孤独を愛したと表現したほうが的確であろう。

彼はここで、教師ハウスマンが読むようにと貸した『アレクサンダー大王遠征史』に熱中した。大王と兵士たちは中央アジアをへて西北インドへ押し入った。その一部の子孫が今なお遠征地に残っているのか、スタインは大きな興味をもった。生まれ育ったハンガリーも複雑な興亡を繰り返してきた。このことも複雑な歴史をもつシルクロードに興味をもつ一因であった。アレクサンダー大王のほかでは玄奘三蔵とマルコポーロの中央アジア踏査の物語がスタインに影響を与えた。

ブダペストにもどりルッター派のルーテル・グラマースクールで東洋学を学び始め、バルシア・中央アジア・インドの収集品や敦煌についての報告書に親しんだ。いつかは大学で東洋学の教授になりたいという夢がこうして生まれた。その後、ウィーン大学に入学し、ライプツィヒ大学をへてチュービンゲン大学へ。ここでスタインは二人の恩師に出会う。ウィーン大学考古学教授でインド古文書学の権威ゲオルグ・ビューラーとチュービンゲン大学インドヨーロッパ語・宗教史教授でサンスクリット写本の権威ドルフ・フォン・ロスである。スタインは1883年21歳でビューラーとロスの称賛を得て、チュービンゲン大学より博士号を取得した。このビューラーがインドでの教授職をへてヨーロッパで著名な学者として成功していた姿は、スタインに人生設計「ヨーロッパで活躍する準備をインドでする」を描かせた。

スタインはハンガリー政府からオックスフォード大学とケンブリッジ大学で東洋言語と考古学を二年間（1884～86）学ぶ奨学金を得て、イギリスでの研究生生活を開始した。彼はロンドンでハンガリー科学アカデミーのテオドル・デュガ博士（元インド軍医大佐）の知遇を得た。奨学金獲得もデュガを紹介したのも叔父イグナツの尽力であった。

スタインはデュガ宅を頻繁に訪れた。異国で同国人に会うことは嬉しいことである。ましてデュガはインド軍大佐という経歴があり、叔父の紹介であり、スタイン同様に愛国者であった。デュガも優秀で東洋学を学ぶスタイン青年を可愛がった。デュガ宅のある一帯はインドなどイギリス植民地から退役した高級官吏が住む地域で「小アジア」と呼ばれていて、デュガ宅にはその様な人々が出入りしていた。そこでスタインは人生を決定づけることになる二人の知遇を受けた。ヘンリー・ローリンソン(元インド議会議員・ペルシア帝国のベヒストゥン碑文を解説)とヘンリー・ユール(元インド議会議員・マルコポーロの『東方見聞録』の研究家)である。二人とも爵位をもつことから分かるように一定の影響力を有する人生の成功者で、スタインより42歳と52歳上の元軍人であった。

スタインはデュガやこの二人のような年長者(前述した兄エルンスト・叔父イグナツ・ビューラー教授・ロス教授などをふくめて)から支援をえる社交力を身につけていた。このような能力は被差別民族として、幼少期から全寮制学校そして大学時代の社会生活の中で自然に身につけたと考えられる。

ミルスキーはスタインの社交能力について評している。

スタインは組織の術語を学んだ。その構造は簡単である。どんなに組織が大きく、どんなに形態が非人格的で、どんなに政治や伝統によって統治されていても、その支配は個人の手中にある…有意義な企画には、貢献を許されたいという態度をとったため、役人は彼の申し出に注意を払った。彼らは、計画が成功すれば、自分たちも信用が増し、また、スタインがいつも、協力者を公にして感謝してくれることを知っていた⁽²⁹⁾とし、後日の一例を紹介している。敬愛するハンガリーの文部大臣の死亡記事を読みました。心の中はそのニュースで一杯です。あの方の援助なくしては、私は勉学を簡単に終了できなかったでしょうし、私の現在の地位もあり得なかったでしょう。…生きている限り、私はこの価値あることに責任を持ち、いつも心に響く親しさで僕に会ってくださった教養高き氏を偲んで感謝し続けるであります。

う⁽³⁰⁾。

これはスタインが兄エルンストへカシミールのスリナガルで書いた手紙の一部で、長い旅の記録「スリナガルへの休暇旅行」として、ミュンヘンの新聞に当時掲載された⁽³¹⁾。スタインの提案でエルンストが記事にする準備をした。「彼は世間に名を知られることの意義を知っていた⁽³²⁾」とミルスキーは続けている。亡くなった文部大臣への感謝を通じて、自己の存在を控えめではあるが確実に示している。

1885年スタイン23歳の時、一年間の徴兵訓練でブタペストへ戻った。ハンガリー陸軍地図作成学校ルドヴィガ・アカデミーでの軍事訓練は彼が選んだものでなく、たまたまであった。これが後のシルクロード探検での測量図作成の貴重なスキルとなった。スタインは努力家であると同時に運の強い人と言えよう。徴兵訓練からもどったスタインは大英博物館やオックスフォード大学で古代貨幣の研究に取り組んだ。

2. インド生活

奨学金期間が終了した25歳のスタインは、1887年11月16日インドへ旅立ち、英領インド帝国のパンジャブ大学の記録事務官とラホール東洋学校の校長になった。前述したローリンソンのインド局への提議とユールの推薦によるものである。彼の社交能力が見て取れる一例であろう。アジアへの憧れとともに恩人といえるビューラーやデュガ・ローリンソン・ユールらがインドでの活躍によりヨーロッパでの評価を得たことが「自分もインドで」と赴任を決断させたに違いない。スタインは母語ハンガリー語・マジャール語はもとより、古代ギリシャ語・ラテン語・ドイツ語・サンスクリット語・英語・ペルシア語に通じていた。

スタインのインド赴任を「シルクロード探検を目指して、距離的に近いインドでの仕事を選んだ」と考えがちだが、当時の彼には「中央アジア探検」といった目標はなかった。

任地ラホールはインド帝国北西部（現在はパキスタン北東部）に位置し、

北はサンスクリット古写本の宝庫として知られるカシミール地方に接している。ラホールはイギリスでは重要で活気ある都市、偉大な歴史を有する美しい街と捉えられていたが、実際は気候の厳しい、複雑な事情を内在する大英帝国の前線都市であった。

スタインは職務に追われながらも、遠くないカシミール地方を度々訪れた。恩師ビューラーが入手できなかった「カシミール王統史」(カルハナ著・神話時代から12世紀中葉までのカシミールの歴史書)の写本を入手するためであった。スリナガルでの知人を通じてカシミール王家の人達と交流を始めた。1892年30歳時にはカシミール王統史『ラージャタランギニ』(サンスクリット語版)を出版した(1900年には同書英語版を注釈付きで出版)。基となった写本の借り出しには、ラホール東洋学校生徒の父親の助力があった。ここにも彼の社交能力を見ることができる。

それらはスタインにとって楽しい活動であったが、一方で「ヨーロッパでの教授職という人生目標」に対して悶々たる日々を過ごしていた。彼がインド生活中、兄や支持者たちへ毎日のように手紙を書いたのは、支持をつなぎとめるためとともにそのむなしさを紛らわすためでもあった。兄への手紙には「もしインド以外のどこかで教師の定職を得る機会でもあれば、これ以上ラホールに滞在するのは健康上許されない、というような理由をいつでもでっち上げることが可能です⁽³³⁾」、「1898年にはヨーロッパへの移転を遂げたいものです⁽³⁴⁾」、「以前にもまして、どこかに落ち着く必要を感じます。このままでは根無し草の悲哀ばかりを味わうことになりましょう。…インドに別れを告げることは困難でしょう。⁽³⁵⁾」などと。母が1888年(推定)、父が89年、叔父イグナツが91年に亡くなった(姉はインド赴任前の82年に死亡)こともスタインに望郷の念を募らせたのであろう。

ミルスキーは「この当時の手紙は、インドからの脱出—この言葉が強すぎることはない—して、ヨーロッパに帰る方法の計画ばかりで埋まっている⁽³⁶⁾」と書いている。「1888年彼がラホールで経済的保障も、学者としてのチャンスもない不安定な生活の中で焦燥感にさいなまれた時…仕事のために囚われの身になったと感じた流刑の地インド…⁽³⁷⁾」とさえ記している。

スタインは休暇を利用して、1893年と97年ヨーロッパへ帰った。故郷ブダ

ベストのほかウィーンやロンドン・パリ・ボンなども訪れた。それは父親のような兄エルンストに会うためでもあり、どこかの大学に教授職を得る運動のためでもあった。例えばブダペスト大学東洋言語学教授バンベリーと長時間話しあった結果、教授職を探してくれることになったと、兄へ報告している。ほかにも官僚の機嫌をとるためにあらゆる努力をし、連日講演を行い、アカデミーの会合に出席し、元国務大臣に会うなどの獵官活動をおこなっている。兄へ手紙で「できることをすべて行ったつもりです。…バンベリーも他の人びとも、大学における僕の件は、承認されたも同然だと言ってくれます⁽³⁸⁾」と報告しているほどである。

「ヨーロッパでの教授職という人生目標」が実現しないまま悶々たる日々を送っていたスタインに心の変化が訪れる。

変化を促した決定打はミルスキーも指摘している文化財の発見情報である。1890年、殺人事件の捜査で新疆クチャへ来ていたインド陸軍の諜報将校バウワー中尉は51枚の樺皮でつくられた古写本を購入した。それは前年に現地「宝搜し屋」（シルクロードに限らず歴史ある地帯での伝統的商売）が入手していたもので、一部はすでに「販売済み」であった。バウワー中尉はそれをベンカル・アジア協会へ送った。カルカッタ神学校長A・F・ヘルンレ（インドアーリア言語の第一人者）がこの重要性に着目したことにより、関係地の役人に発見された写本はすべて入手しヘルンレへ送るよう指示が出された。彼はこれらを研究し、『ベンカル・アジア協会誌』（1897）などで発表し、東トルキスタンの考古学探検の現代潮流が始まった。

これらの情報は1899年ローマで開催された第12回「国際東洋学会議」にもたらされ、シルクロード探検熱が沸き起こった。

これより以前にもロシアのブルジェワルスキーは、モンゴル・チベット・新疆などを1870年から1885年にかけ4回にわたって調査している。動植物学者として大量の標本を待ち帰った。中央アジア探検の先駆者であったが、動植物の標本が主であったためかヨーロッパ社会でそれほどの注目は集めなかった。彼はロシア陸軍参謀本部軍人として1867～69年イルクーツク周辺の探検を行っている。またイギリスのヤングハズバンドは1886年から90年にかけ2回カラコルム・パミール・新疆などを探検し、ロシアのコズロフ

も1883年から翌年にかけて新疆各地を探検している。

ヘディンは「シルクロード」の提唱者で知られるリヒトホーフェンの指導を受け中央アジア探検の夢をいただき、1885～86年ペルシアやメソポタミアを旅行、1890～91年にはスウェーデン国王が派遣した使節団員として、サマルカンドやカシュガルなどを巡った。1893～97年パミール高原をへてタクラマカン沙漠を縦断し、チベットなどを探検した。

ヘディンはこの探検途中の1896年1月24日、タクラマカン沙漠でダンダンウイリク遺跡を発見した⁽³⁹⁾。スタインがこの重要遺跡発見を知っていたことは、1897年12月9日ラホールからの兄への手紙で分かる。「ヘディンに関する切り抜きを感謝します。クギアルは、ヘルンレが編集した古文書が発見された地で、ヘディンが遺跡（ダンダンウイリク）を見たと言うケリヤ河から遥か遠く離れています⁽⁴⁰⁾」。そしてヘディンのスウェーデン語の報告書や圧縮英語版“*Through Asia*”（1898）でも確認したのである。

スタインに変化をもたらしたもう一つの要因は親友を得たことにある。1897年にトーマス・ウォーカー・アーノルド（ラホール大学哲学教授、後にロンドン大学東洋アフリカ学院教授）、パーシー・スタフォード・アレン（ラホール大学歴史学教授、後にオックスフォード大学キリスト教会学院長）。それ以前にもフレッド・ヘンリー・アンドリュース（マヨ美術学校副校長、後にスタイン収集壁画の報告書出版）と出会っていた。何でも相談できる同年代の三人の友に巡りあえたことがスタインに心の平安をもたらした。この三人は終生の友となった。

筆者はスタインが「ヨーロッパでの教授職という人生目標」を断ち切ったもうひとつの要因に、大英帝国の巨大パワーを自ら実見したことを付け加えたい。

それは彼が兄への1898年1月3日（ラホールから）と9日（ブナーから）の手紙に書かれている。

昨夏のスワート峡谷における反乱以来、スワートを支持した人びとが住むブナーへ、辺境警備隊を派遣する案が出されています。…ヨーロッパ人未踏の地で…僕の『派遣』により生じる出費は、政府から大

学に補助金を支払うという形で、まかなわれることになりました。…師団に同行して山麓のサンガオに行って来ました。隊はタング峠を占拠し、それによってブナーへの道が開けました。こちらの陣地は非常に有利です。ヨーロッパ流に言うと、彼らはライフル銃を所有していません。第20連隊がブナーに隣接する嶺に立つと、ブナーの人びとは2,000フィートもあるその山をあきらめねばなりませんでした。それに先だって三列の大砲が岩に向かって5時間発砲し続けました。砲列の中であって安全の保証がされた場所での見物は、なかなかおもしろいものでした。…夕刻三連隊が村を占拠しましたので、今僕はその村で書いています。ディーン少佐が予言したように、人びとは直ちに降伏しました。気分爽快です。山やまを登り、古代の建造物を発見するのは、まさに何ものにも代えがたい喜びです⁽⁴¹⁾。

ディーン陸軍少佐からの招待に応じての軍事攻撃への同行調査であったが、インド軍の戦力を実見して、大英帝国の力を再確認したことは、スタインにとって大きな「自信」につながったと推測できる。

スタインはついに決意した。「(ブダベスト大学教授の)バンベリーから、僕の職に関する教授会の投票が28対4であった旨、連絡がありました。3ヵ月以内にすべて順調に進むことを確信しています。大臣が指名するとの意思を表明しています⁽⁴²⁾」と期待に胸躍らせていたのが1898年1月16日、しかし約3ヵ月後の4月7日、「ブダベストから、いまだに何の知らせも参りません。僕のファイルは部屋から部屋へ、ゆっくり回覧されているのでしょうか⁽⁴³⁾」と事態暗転の絶望感の中、「ヨーロッパ帰還」をあきらめ、中央アジア探検を決意した。

ここでスタインの特徴的ことがらをまとめておく。パスポートに記された身長は5フィート4インチ⁽⁴⁴⁾ (163cm) と小柄であった。一時期髭を蓄えていた。生涯結婚しなかった。異性との何らかの関わりを示す手掛かりはない。一生住居を持たなかった。長時間歩くことは苦にできなかったが消化不良には生涯悩まされた。前立腺肥大の手術をしている。非常に几帳面な性格で、私信・校正刷・雑誌・作業記録・地図データ・計算書・写真など

とラベルに記して分類していた。儉約家であった。船でも汽車でも、贅沢な一等車より二等車を好んだ。蓄えに気を配った。その書簡には給与・印税のことなどが頻繁に登場する。規則正しく暮らした。言語の達人であったが、中国語は初級程度であった。書くことを異常なほど好んだ。インド赴任中は毎日のように兄や友人らに手紙を書いた。探検中も度々書いている。地形や植生の観察を異常なほど記録し、日記の大半はこれで占められている。相手を喜ばす表現方法を知っていた。人を操るのが上手かった⁽⁴⁵⁾。人間嫌いなところもあった。孤独を愛した。辺境の人たちとの交流を好んだ。収集品の研究は専門研究者の協力を得たが、探検自体は従者らを除くと何時も一人で西欧の研究者とチームを組む事はなかった（第四次探検に参加した研究者もカシュガルで離脱）。孤独を紛らわすためか犬を可愛がった。その名前は「ダッシュ」で統一された。

3. 第一次新疆探検

新疆探検を決意したスタインは他国の探検隊に先を越されることを恐れた。パスポート取得や資金調達そして中国での順調行動のためにも英領インド帝国政府の正式活動項目に採用されることが必要であり、申請書作成を急いだ。

1898年9月10日付けで「東トルキスタン・ホータン考古学探検旅行」申請書を書きあげた。スタイン35歳であった。目的は「中国領トルキスタンのホータンおよびその周辺の古代史上貴重な地への旅行に備えて、政府当局ならびに各地域からの援助をお願いすること…歴史に光明を投げかける史料ならびに信頼性の高い古遺物を入手すること…⁽⁴⁶⁾」であり、他国の計画を「すでにロシア帝国科学アカデミーにより文書が発見されたトルファンの探検が計画されており、三人の偉大な研究家が派遣される予定であると発表されていることも申し添えたく存じます。付記にヘディンの探検を記していますが、それも近いうちに再開の見通しであると聞いております⁽⁴⁷⁾」と記入し、競争心をあおっている。

スタインは「申請書」に自身の「中央アジアの古物に関する覚書」を添

付した。

インド古物研究において砂漠地域のホータンの重要性をさらに印象づけるものとして、最近貴重な報告が、有名なスウェーデンの旅行家ヘディンによって提出されています。…ホータンの東部、ケリヤ附近の、現在は砂中に埋没している遺跡に関するものです。そこから出土した壁画の調査から、ケリヤ遺跡が非常に古いものであり、仏教の影響を受けていたことが明らかにされています⁽⁴⁸⁾。

とヘディンが発見したケリヤ（ダンドンウイリク）遺跡の重要性にふれるとともに、「インド古物研究」とインド当局者の関心をひく工夫をしている。

スタインは「申請書」で「…探検に要する費用の総額は6,800ルピー…インド史研究上の重要な意味を考慮して、パンジャープ・インド両政府に、費用全額負担のご快諾をお願いするものであります⁽⁴⁹⁾」と資金提供も要請している。その内訳も往復費用・装備費・その他で4,000ルピー、発掘費と売り出された古物購入費が2,000ルピーなどに見積もられている。古物購入費が計上されていることは「古物市場」の存在を示すものとして注目する必要がある。前述の謝彬『新疆事情』にも「先年土人ノ其ノ地ニ於テ金條、銀器及ヒ其ノ他ノ古物ヲ発掘セルモノ甚タ多ク、其ノ多クハ英国人司德訥（スタイン）ノ買ヒ取りテ持ち去ル所トナレリ⁽⁵⁰⁾」とある。

スタインは「資金面のご援助が得られましたら、探検による収集品のすべてを大英博物館に納める⁽⁵¹⁾」と続けている。

「申請書」提出の1ヵ月後、パンジャープの副総督がこの書類をインド政府へ提出するとの情報を入手したスタインは前述のヘルンレに農業予算局への手紙を依頼した。申請承認を確実にし、合わせてヘルンレに役割を提供し喜んでもらおうというスタインの高等作戦である。

ヘルンレの手紙にはインド帝国の高級官吏イギリス人をくすぐるような一節がある。

興味深い事柄の裏付け史料、また細部を埋めるために必要な事柄がヨーロッパ人の探検により発見されるものと考えます。…ホータンと中国領トルキスタン南部は、明らかにイギリスの探検家が入るべき地であると考えます。当世風に言えば、そこはイギリスの『勢力範囲』に当たり、当然われわれの掌中にあるべき権力を他の人びとに取られてはなりません。…この点にインド政府がご配慮を示されることをお願いいたしますとともに、それにより生ずる榮譽はすべてインド政府に帰すべきものであると考えます⁽⁵²⁾。

スタインがこれ以外にもインドやブダペストあるいはロンドンの「パトロン」たちを通して、働きかけをおこなったことは彼のそれまでの手法から容易に想像できる。彼にとっては人生を決する「超重要申請」であったから。

このような努力を経て、その年12月最後の日にインド内務省と大蔵省から認可の連絡を受けた。暫くして外務省からは中国と折衝するとの連絡も。この段階でも親友アンドリュースへの喜びの手紙にさえ「相変わらず、内密にしておきたいと考えております。ロシアが同方面に探検隊を派遣する可能性が高く、時期尚早の公表は、彼らを有利な立場に導く危険性をはらんでおります⁽⁵³⁾」と書き、兄エルンストへの手紙にも「まだ公表の段階に至っておりません。…ヘディンの美しい本でご承知のように、ホータン河流域のルートは非常に快適です。性急な公表により僕の作業予定地をロシア人に先取りされることをおそれております。とは申せ、ホータンは『イギリスの勢力権内』にあり、…僕の方が優位にあります⁽⁵⁴⁾」と、探検への高なる鼓動と「ライバル」たちとの競争心をおさえつつ書いている。

スタインが言う「優位」以外に彼にはヨーロッパで習得した研究能力と多言語能力を有し、インド赴任後のカシミール地方で調査能力（それは探検的と形容詞をつけることも出来る辺境の地での）を取得していた。そして彼らより遺跡に近い「地元」にいる、といった「優位性」があった。

ヘルンレの「イギリスの勢力範囲」、スタインの「イギリスの勢力権内」だからこその承認であった。その一帯がイギリス・ロシア両国の「領土争

奪謀報戦の最前線」ならばこそその許可（「派遣」と言った方が正確であろう）であったといえる。

スタインは1899年5月には許可文書を受け取り、政府からの資金提供も14,000ルピーに増額された（これ以外に給与）。パスポート（これについては後述する）も獲得した。考古学研究に理解をもつインド総督カーゾン卿がイギリス駐中国公使に依頼したものである。この年、彼は回教学院の院長になりカルカッタ（現コルカタ）へ移っている。具体的計画にとりかかった。

第一次新疆探検の行程を略記すれば以下のようである。37歳の1900年4月カルカッタからカシミール地方のスリナガルへ前進、諸準備。5月31日スリナガル出発。タシュクルガンを経てムスターグ・アタ峰登山。7月29日カシュガル到着。イギリス領事館を前線基地として最終準備と周辺遺跡を調査。9月21日カシュガルを出発し、ユルンカシュ河上流を調査。12月18日ダナンウイリク遺跡に到着し、大規模発掘。1901年1月28日からニヤ遺跡を大規模発掘。エンデレ遺跡・ドモコ（ダマゴウ）遺跡・ラワック遺跡を発掘。5月12日カシュガル帰着。29日カシュガル出発。汽車でロシア経由大陸横断。7月2日ロンドン到着。

当時の探検の困難さを知り、スタインの探検人生に触れるため若干の説明を記したい。

現在であればバスでも2日程度で行けるスリナガル～カシュガル間に約2ヵ月を要したのは、何故か。21世紀の文明社会に住む者からは想像すらできない断崖の「道」などを通過しなければならないからである。スタイン隊カラコルムの雪の峠越えでは人夫と荷駄運びのポニーが激流に落ち危うく命を落とすところだった。大量の装備・食料などを運搬しなければならない探検で、運搬にラクダや馬・ロバ・ポニーなどの動物を活用しても、長期間の移動であり、人間の歩行速度が基本であったからである。

沙漠にはその道さえない。無人の地であるから訊ねることもできない。目印になるような建物もない。宿泊する設備もない。水もない。大量の水・食糧・装備などを運びこまねばならない。さらに気候は厳しい。夏は暑く冬は寒く春は砂嵐が吹く。例えばスタインはニヤ遺跡で零下41度を記録し

たと記している⁽⁵⁵⁾。これらの困難はスタインに限らずヘディン隊や大谷隊などでも同様である。

そのような過酷な条件下であったが、前述したようにスタインにはカシミール地方での研究を通して蓄積した探検・調査能力があった。スリナガル・カシュガル、さらにはホータンなど遺跡近くの小さな町で、そこで出来る準備を順次整えた。スタインを手助けする従者（輸送員・遺跡案内人・料理人・通訳など）もそれぞれ適地で雇用した。スタインが現地人を「手懐ける」ために多用した土産や装備・食料の調達も同様である。これらは書けば簡単なことだが、探検「素人」には出来ない。測量技師はインド政府に働きかけ同行させた。遺跡測量図とともに、正確な地図（図45参照）も作成された。もっともこれこそが英領インド帝国がスタインの探検を許可し資金提供した真の目的であった。「領土争奪」情報収集の一環として。

スタインのロシア隊やヘディンへの競争心については前述したが、ムスターグ・アタ峰(7,546m)登山に関してミルスキーは書いている。「彼には、かねて望んでいた作業があった。巨峰ムスターグ・アタの調査であった。それは地形学上の興味からというよりもわずか6年前、三度目の登攀の試みにも敗れたヘディンに対抗して、快挙を狙うものであった⁽⁵⁶⁾」。結局スタインは海拔約6,100mで中止している（ヘディンもほぼ同高度約6,300mで断念⁽⁵⁷⁾）。

イギリス領事館に到着したスタインは拳銃と弾丸を届けている。当時領事は不在であった。領事職務を執行していたジョージ・マカートニー(George Macartney)⁽⁵⁸⁾は「カシミールにおける中国問題処理のためのイギリス総督代表の特別補佐官」であり、領事になるのは1909年である。

英領インド帝国を離れた外国である新疆にあって荷駄隊や物資の調達、その先の町への連絡、調査への手助けなどが不可欠であった。すでに弱体化していた清朝にあって新疆はさらに混乱していたので、現地政府からの支持と協力は一層重要だった。スタインはカシュガルはじめ各地役人から協力を得るのも巧みであった。ここでスタインは玄奘三蔵を活用した。「役人が玄奘について知識のあることを有効に利用しようという目算であった⁽⁵⁹⁾」とミルスキーは書き、スタインを代弁するかのように「教養ある中国

の役人の方がたはどなたも西方の仏教王国を数多く歴訪した巡礼の伝説的な物語について読まれたり、お聞きになられたりしたことがおありだと存じます。…気高い旅人玄奘は、常に私の特別の支持者であった⁽⁶⁰⁾」と続けている。以降、どの町でも出会う役人などに同様の接近方法を採用した。その最たるものが第二次探検での敦煌で大量の仏典などを入手するくだりである。この有名な故事は後述する。スタインの社交術の一端を見ることが出来る。

第一次新疆探検の華は「ダンダンウイリク遺跡発掘」であろう。前述したようにヘディン1896年同遺跡発見の情報をラホールで把握していたスタインにとって、この遺跡発掘が今回の最大の目的であった。

地理学者ヘディンは遺跡自体にはあまり興味を持っていなかったのも、同遺跡を発見しても本格的発掘をしなかった、そして度々出入りしたであろう「宝捜し屋」たちも金や玉製品などが目当てで、仏教壁画や木簡などに興味を示さなかったことも、スタインにとって幸いした。

スタインはホータンで「宝捜し屋」トゥルディからヘディン発見のダンダンウイリク遺跡から持ち帰った小仏像などを入手し、同遺跡調査を最終決定した。まずヘディンを同遺跡へ案内したアーマド・メルゲンとカシム・アフンを探し出した。ユルンカシュ河沿いの集落タワックケルの獵師である。スタインはカシムらを遺跡位置確認と野営予定地での井戸掘りを任務として先行させた。遺跡の所在を知る人物を探し出し雇う、そして先発隊を出す。これもスタインがカシミールでの調査から取得した探検能力の一部である。

ダンダンウイリク遺跡ではトゥルディらの「宝捜し」地点などを参考にしつつ寺院など14の遺構を発掘した。大量の仏像・壁画・板絵・各種文書などを収集した。その中には、インドの象頭の神ガネーシャ像もある。西域南道の「宝捜し屋」たちの間で、同遺跡を「象牙の家」（ダンダンウイリク）と呼んでいたのはこのためである。「桑種西漸伝説」の板絵もあり、『大唐西域記』記載の伝説が確認された。漢文文書の中には「大歴十六年（781）二月傑謝…」、「建中七年（786）十月五日傑謝…」と記されたものもあり、唐代には「傑謝」と称されたことが明らかになった⁽⁶¹⁾。



図7. ダンダンウイリク遺跡収集「桑種西漸伝説」
板絵 中央アジア踏査記より転載

ruined shrines and dwellings of
M. Chavannes, in his first
name 傑謝 *Li-hsieh* is rendered
in dictionaries⁸. The doubt as to
local name in a printed Chinese
documents from Dandān-Uiliq.

図8. 第一次新疆探検報告書で「傑謝」に言及
ダンダンウイリクの唐代の呼称

ら支給された豊富な探検資金あればこそであったが、彼の現地人掌握術あればこそでもある。

同遺跡の発掘を終えたスタインはラワック仏塔⁽⁶⁴⁾を観察ののち、ケリヤ(克里雅・現在の于田・ユテン)へ到着。西域南道の小オアシスである。そこにも幸運が待ち構えていた。「到着した翌日には、品のいい年老いた部落民が尋ねてきて、砂に埋もれかかった古代家屋の跡があることを知らせてくれた。10年ほど前に、ニヤの北のイマーム・ジャファル・サデックという有名な巡礼地の先で見たことがあるという。ほかにもこの古都の噂を聞いた者が何人もいた⁽⁶⁵⁾」。



図9. ダンダンウイリク遺跡
収集「騎馬駱駝」板絵(大英
博物館・特別収蔵庫蔵)

吉報に喜び勇んだスタインはニヤ(尼雅・現在の民豊・ミンフン・ニヤ遺跡との混同をさけるため以下ニヤオアシスと称す)へ急いだ。ニヤオアシスも西域南道の集落である。駱駝使いハッサン・アフンがカローシュティー木簡2点を持ってきた。「西欧人が遺跡で金の詰まった箱をいくつも発見した」という噂でもながれていたのである

尚、スタイン時代の発掘は現代の考古学的発掘とは大いに異なり、「文物を得るために掘る」といったものであった(図48参照)。

スタインはタワックケル集落からいよいよ遺跡を目指して沙漠へ入る時、人夫たちに通常の2倍の賃金を前払いした⁽⁶²⁾。さらに遺跡では「一番に文書を発見した者に報奨金を与える⁽⁶³⁾」と人夫たちを競わせた。インド政府から



図10. 大規模発掘したダンダンウイリク遺跡
悠久の歴史のなかに（佛大ニヤ機構提供）

う。買い上げてもらうための来訪だった。スタインはすぐに木簡の発見者イブラヒムを探し出した。一年ほど前に「古都の家」で宝捜した時に見つけたと聞き、「わたしは即刻イブラヒムを一行の案内者に雇うことにした。このさい先よさそうな発見物を調べて過ごす一夜は、実に心楽しいものだった⁽⁶⁶⁾」とスタインは書いている。彼は本

当に運の強い男である。いや運をつかむ能力がある人と言えよう。

「ダンダンウイリク遺跡発掘」を第一次新疆探検の華とすれば、スタインをシルクロード探検史に輝かせることになるのは「ニヤ遺跡発見と発掘⁽⁶⁷⁾」である。宝捜し屋イブラヒムらの記憶（彼ら沙漠の民の沙漠地形記憶力は並外れている。筆者もニヤ遺跡やダンダンウイリク遺跡での調査時に度々驚かされた）をたどりながら寺院・役所・住居など多数の遺構を発掘し、大量の木簡などを収集した。「（初日の収穫物は）インドの内外を問わず、これまでカラーシュティー研究に役立ってきたすべての資料の総体を凌駕するものではないにしても、決してそれに劣るものではない⁽⁶⁸⁾」。遺跡が大規模であることを知ったスタインは約30km南のイマーム・ジャファル・サデックへさらに多くの

人夫を派遣するよう使いを出したほどである。

スタインがダンダンウイリクを発掘したのは第一次探検時のみである。それに比べて、ニヤ遺跡は第二次・第三次・第四次でも発掘している。ニヤ遺跡の重要性を示すものであると同時に、彼の戦



図11. ニヤ遺跡収集椅子 一般公開されている（大英博物館蔵）

略力が発揮されたといえる。

ダングンウイリク・ニヤ両遺跡での大規模発掘、エンデレ・ドモコ・ラワック各遺跡での発掘を終えたスタインはホータンで刑事まがいのことをしている。偽造写本作りの究明である。これまでにインド帝国の軍人や官吏らが入手した古写本のかなりは自分が偽造したと認めさせた。

インドアーリア言語の第一人者と目されていたヘルンレさえ見抜けなかった偽造である。



図12. 大規模発掘したニヤ遺跡
今も残る世界的文化遺産（佛大ニヤ機構提供）

探検がすべて順調に進んだわけではない。人夫間で争いが起き、解決するためにスタインはそのひとりに「鞭打ち刑」を科している。あるいは歯痛薬を飲む水を造るために「氷」を溶かす苦勞をしている。ダングンウイリク遺跡へ入る前のタワックケル集落ではその虫歯を散髪屋に抜いてもらおうとしたほどである。結局抜けず「手術」は中止された⁽⁶⁹⁾。

スタインはカシュガルにもどり約2週間、収集遺物整理にあたった。「敵側」ロシア総領事ペトロフスキー（スタインをスパイと見ていた）と面会し自身と収集遺物のロシア通過の許可をもとめた。大箱12箱はロシア領事館で検閲を受け、鷲印のシールで封印された。人夫たちとの別れは辛いものだった、十分すぎるほどの追加報酬を与え、スタインはロンドンへ向かった。発送した大箱も乱されることなく大英博物館へ到着していた。收穫を12箱も携えたスタインのロンドン到着は凱旋將軍の帰国のようであった⁽⁷⁰⁾。

スタインのロンドン滞在は多忙を極めた。講演、押し寄せる新聞記者らへの対応、大量の文化財の初歩的整理、高級官吏などへの「内覧会」、第一次新疆探検の『考古学と地勢学からの中国領トルキスタン探検旅行予備報告書』出版（1901）など…。この間、パンジャブ地方教育視学に任命され11月にはインドへ戻った。翌02年にはハンブルグで開催された第13回

「国際東洋学会議」で第一次探検を発表した。

これらのことが当時ロンドンに遊学中であった大谷光瑞を刺激し中央アジア探検（第一次1902～04）を実施せしめたひとつの要因になったと容易に考えられる。大谷光瑞はスタインと面談したことがあり、手紙も書いている⁽⁷¹⁾。日本は英国と日英同盟を締結し（1902.01.30）、大谷光瑞の妻籌子の妹節子が後の大正天皇に嫁ぎ（1900）、光瑞と皇室は縁つづきとなったことも英国やスタインから手助けを得やすくした。

ダンダンウイリク遺跡とニヤ遺跡での大規模発掘による大量の文化財の持ち帰り、これがスタイン探検人生を決定づけた。列強侵略文化によりアフリカなどから大量の文化財を収奪していたイギリスに中央アジアの貴重文化財を豊富にもたらしたことは高く評価された。1904年9月のイギリス帰化実現を後押しした。

帰化についてミルスキーは興味ある推測を書いている。「インド政府はスタインが市民権を持ったイギリス国民であるか否かについて正確な情報を持っていなかった」ので「パスポートの代用として『身分証明書』を発行していた⁽⁷²⁾」。これに対してスタインは「ハンガリーの市民権放棄申請が認められるまで2年要した。直ちに帰化申請をなすべきでしたが、失念していた。深く反省しインド帰国後、直ちに必要なすべての手続きを行う所存です」と外務省へ連絡している⁽⁷³⁾。ミルスキーは「一体何ゆえに、およそ些細とは言いがたい事柄の申請を忘れたのか、不可解である。むしろ、充分考えることは、ヨーロッパの大学に、職を得たいと考えていた彼が、職を得た先の国の国籍を得ようと。事態を見守っていたのでなかろうか⁽⁷⁴⁾」と推測している。

1904年にはインド北西州バルチスタン教育視学兼考古学調査官となった。

4. 第二次新疆（を含む中央アジア）探検

1904年10月第二次探検を申請、翌年4月許可（最終連絡は12月）を取得した。



図13. 「道教僧、ワン道士」
(スタイン撮影) 第二次新疆探
検報告書より転載

第二次新疆探検の行程を略記すれば以下のようである。1906年4月20日ペシャワール出発、時にスタイン43歳。6月8日カシュガル着。23日カシュガル出発。10月20日からニヤ遺跡を再び大規模発掘。エンデレ・楼蘭両遺跡発掘。1907年1月ミーラン遺跡発掘。3月12日敦煌着、莫高窟・玉門関などを調査。5月15日敦煌に戻り莫高窟を再調査し大量の仏典などを獲得。6月13日敦煌出発。安西・酒泉・甘州・トルファン・コルラなどを踏査。1908年1月クチャ着。タクラマカン沙漠を南下しドモコ着。ホータンから再び沙漠を北上しアクス着、ヤルカンド河ぞいに南下しホータン着。8月ホータン出発。ケリヤ

から崑崙山脈へ分け入る。踏査中に凍傷にかかり、急遽カラコルム峠を下り10月12日レー着。右足指二本を切断。11月13日スリナガル帰着し療養。

第二次探検ではニヤ遺跡を再び大規模発掘し大量の遺物を収集したが、「スタイン探検人生」でのハイライトは敦煌莫高窟で「管理人」王圓籙道士(1850頃～1931)からの大量の仏典などの「買い付け」持ち出しである。スタイン「偉大な《掘り出し物》⁽⁷⁵⁾」の「購入交渉術」は紙幅をさくに値する。

この時の王道士を「まるめこむ⁽⁷⁶⁾」(加藤九祚)いきさつは、スタイン自ら『中央アジア踏査記』に詳しく記している。

それによると、1879年にセチェニ伯爵探検隊員として莫高窟を実見していたデ・ロシ(ハンガリア地質測量局主任)から聞いていたと記している。

今回は是非シナの北西辺



FIG. 14. CELLS AND PORCH OF CAVE TEMPLE NO. 1, PARTIALLY RESTORED, CH'EN-FO-TUNG, TUNG-SHI

図14. 仏典類秘蔵窟(右手前扉奥・スタイン撮影) 第二次新疆探検報告書より転載

境地方の甘肅省にまで足を踏み入れたいというのが、わたしの願いだった…敦煌の善男善女は、現に今日でもなお、異様な情熱でこの礼拝を続けている。…わたしは、これらの洞窟寺院が依然として真の《生きている》礼拝所であることに気づいていた。…年一回の祭日のことだった。…敦煌オアシスの町民、村民らは何千人となくこの聖跡に集まってきたのだ。したがって、この遺跡での考古学上の活動も－とにかくはじめのうちは－慎重な配慮をして制限を加えておくのが望ましい、と見てとった。仏教美術の研究にも、完全に入出入り自由な廢墟で与えられる機会だけにとどめておくのだ。…このような作業ならば、起こりうる損傷を恐れて、一般民衆が敵意をいだくことも、まずありえないと思われたからだ。…信仰心による、またその他の理由による、王道士の反対に対して、われわれ（スタインと交渉係兼通訳の蔣孝琬）が時間をかけていかに戦ったか、ここに一部始終述べる必要はあるまい。伝統的なシナ人の教養のいっさいに無知であった彼には、たとえわたしの学問的な関心を語って聞かせたとしても、無意味だっただろう。さいわいなことに、打つべき手がほかにあった－偉大なシナの巡礼僧玄奘に対する思慕の念がそれだった。…道士は私がおぼつかないシナ語をあやつりながら、この偉大な巡礼僧に対する傾倒の念を述べ、その足跡を慕いながら、インドからはるばる山岳と砂漠の難路を越えて来た事情を伝えると、明らかに、強い感動を受けたようだった⁽⁷⁷⁾。

スタインの巧みな交渉術を伺わせる逸話である。

手元の原本には“The priest was obviously impressed by what in my poor Chinese I could tell him of my own devotion to the great pilgrim, and how I had followed his footsteps from India across inhospitable mountains and deserts.”⁽⁷⁸⁾とあり、スタインが玄奘三蔵を“great pilgrim”（偉大な巡礼者）と表現したのは宗教者への崇拜というよりその語源がラテン語の「野を通っていく人」であることから探検家としてその旅行記『大唐西域記』を旅行ガイド本として「活用」するためであったのであろう。

スタインの記述はつづく。

道士は、その翌朝、勇気を奮い起こし、岩窟内の密室への入口を閉ざした粗末な扉を、目の前で開けてくれたのだった。偉大な宝物は、そこに隠されていた。道士の捧げ持つ小さなカンテラのおぼろげな光に照らされた光景は、思わず目を見張らせるものがあった。雑然とではあるが、幾重にも積み重ねられて、ぎっしりと固まった書巻の山は、床面から3メートルの高さに達し、あとで測ったところによれば、推積は14立方メートル近くあった。3平方メートルほどしかないこの小さな部屋では、2人の人間が立つ余地もないくらいだった。…この段階では、あまり熱狂ぶりを露わにしないのが、得策だった。…ここ当分なおざりに出来ない仕事は、王道士が敵意あるうわさなどに恐れたりひるんだりしないようにしておくことだった。わたしは、気を配って、あらかじめ、彼の守る寺院に多額の寄付をする約束をしておいたのだが、それでも、彼は、自分の高潔な名声を傷つけることを恐れる気持と、宿願（石窟修復資金入手）を成就する好機を抜け目なくものにしたいという気持との板ばさみで、たえずぐらついているもようだった。が、ついにわれわれの努力は成功を収めることになった⁽⁷⁹⁾。

スタインの自慢げな記述はつづく。

蔣四爺（孝琬）が、用心深く真夜中近くになってわたしのテントを訪れ、第一日目の《精選品》を入れた大きな包みを運び込んで来たときには、さすがにその満足は大きかった。道士は、わたしが漢土にいるあいだ、われわれ3人以外には、何人にも、この《出土品》の出所をいっさい秘匿しておくことを、条件として要求したのだ。その後さらに七晩、蔣四爺は、一人で荷物を運ばねばならないはめになった。荷物は毎回重くなるばかりで、しまいには何度にも分けて運ばねばならなくなった。…彼（王道士）が気弱になるのを中和させるためには、慎重な処置と、銀貨という薬の適切な投与が必要だった…あとは道士に差し出す補償についての交渉を進める段取りになった。…彼はつい

にわれわれの公正な取引のずっしりとした証拠を受け取ることとなった⁽⁸⁰⁾。

その代金は「馬蹄銀貨4枚、500ルピー相当⁽⁸¹⁾」とスタインは記録し、「…千仏洞からの品々に政府が支払うべき費用は、わずか130ポンドほどです。棕櫚の葉に記されたサンスクリット語文書と二、三の古物だけでも、それぐらい支払う価値を有するものと思われます⁽⁸²⁾」と親友パブリウスへ気を許して現地から手紙を出している。130ポンドがどれほどの現在額に相当するかは未調査であるが、スタイン自身が「わずか」と書いているので、大金でないことは明らかである。

このような経過（半ば秘密持ち出し）からスタインも心配していたことは上記の続きで分かる。「何といっても心から安堵の胸をなで下ろしたのは、それからおよそ16ヵ月後、古文書をぎっしり詰めた24箱、絵画、刺繍、その他同様の美術品遺物を入念に梱包した5箱が、無事、ロンドンの大英博物館に搬入されたときだった⁽⁸³⁾」。

列強収奪文化により大量の文化財を収集していたイギリスに第一次とは異なる仏典・仏画・古文書類（いわゆる敦煌文献）を他国の探検隊に先駆

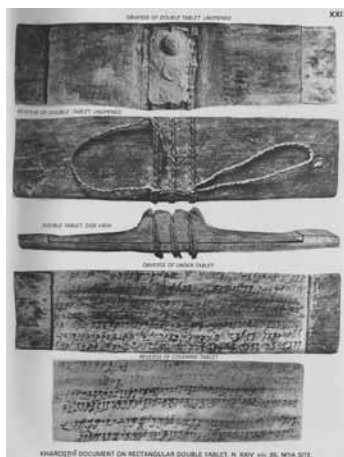


図15. ニヤ遺跡収集カローシュティール木簡第二次新疆探検報告書より転載

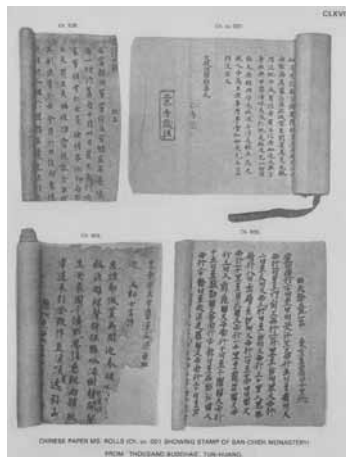


図16. 王道士から購入した大般涅槃経など第二次新疆探検報告書より転載

け、大量にもたらしたことから、凍傷で右足指2本を切断したことが重なり、スタインは英雄となった。

1910年インド帝国の名誉称号「C.I.E.」(Companion of the Indian Empire・インド帝国最下級勲爵士)、そして1912年「K.C.I.E.」(Knight Commander of the Order of Indian Empire・インド帝国ナイト爵位)獲得につながった。これ以降スタインは出版物の肩書を“Sir Aurel Stein”としている。報告書の執筆や収集品の整理を共同で行ったり、内覧会を開いたり、時の人ならではの多忙な日々をおくった。

5. 第三次新疆（を含む中央アジア）探検

1912年11月第三次探検を申請、翌年5月許可（出発許可は7月）を取得した。第三次新疆探検の行程を略記すれば以下のようである。

1913年8月1日スリナガル出発。9月21日カシュガル到着。マザール・ター遺跡調査、12月ニヤ遺跡を再び大規模発掘。1914年3月24日敦煌着。莫高窟王道士よりさらに仏典などを入手。酒泉・甘州をへてカラホト調査。10月トルファン周辺の遺跡調査。翌15年2月末までアスターナ古墳発掘。コルラ・クチャと西進しキジル千仏洞観察。5月31日カシュガル着。収集品荷造り。ロシア領バミールへ分け入り8月26日ヴィクトリア湖着。イランのメシェドへ入り、フワジャ遺跡など調査。1916年3月16日スリナガル帰着。53歳。第三次の申請費用は44,500ルピーにまで膨らんでいた。

前述の「偉大な掘出し物」の後日談をスタインは『中央アジア踏査記』に、約一年後にフランスのペリオが訪れたくだりを記している。

道士は、明らかに以前のわたしとの取引で自信がついたらしく、ペリオ教授に、15,000余点の草稿文書、断簡類の相当量をゆずり渡したのだった。1909年、このフランスの偉大な学者が、パリへ帰ろうとして北京に滞在中、重要なシナの文書が彼の手で海外に待ちだされるという報道で、首都在住のシナ人学者のあいだに異常な関心をかきたててにいった。その結果、ほどなくして、中央政府から命令が出され、

問題の図書いっさいがただちに首都に移管されることとなった⁽⁸⁴⁾。

なお王道士は大谷隊やオルデンプルグ隊などにも売り渡している。

この一件をスタインがペリオの実名をあげて紹介しているのは、自分自身は「秘密裏」持ち出しに成功した自負によるものであろうか。彼はつづけている。

1914年、第三回の探検旅行で敦煌を再訪したときに耳にした情報によれば、この中央政府からの命令が、いかに特徴的な、しかし悲しむべき形で実施されたことについては、不幸にして、疑う余地がほとんどなかった。…王道士の話では、彼の寺院への補償として下付された大金は、種々の役所をへて送られてくるあいだにたっぷり吸い取られて、途中で完全に消えてしまった、ということだった。古文書の収蔵品いっさいは、ひどくなおざりな包装のしかたで、荷馬車に積んで運ばれていったという。しかも、この荷馬車がまだ敦煌の門を出ないうちに、かなりの荷抜きが続発したのだった。事実、1914年には、唐代のみごとな仏典の巻物がまるまる完全な包みのまま、《売物》としてわたしのもとに持ち込まれてきたくらいである。同じように、その秘蔵宝庫に納まっていたはずの遺物を買戻す機会は、シナ・トルキスタン地方ばかりでなく、甘州へ行く途中の各地であった。したがって、こうした荷馬車で運ばれていった資料が、最終的にどの程度実際に北京に達したのか、わかったものではない⁽⁸⁵⁾。

と文化財の散逸を嘆いている。王圓籙道士の名誉のためにも踏査記から引用をつづける。

王道士は公開の明細書を見せてくれたが、それには、わたしから受け取った寄金がすべて正式に寺院のために使用されたことを明らかにしていた。彼は、誇らしげに、新しい礼拝堂や巡礼宿舍の建築群をさし示した。例の《馬蹄銀》の力で、あれ以後、彼の洞窟寺院の前に建



図17. 大英博物館（1759年開館）の正面
古今東西の文化財約800万点を所蔵

立することができたものだった⁽⁸⁶⁾。

そしてこうも記している。

大事に蔵していたシナ文字の巻物が役人どもにひどい扱いを受けたことについては大いに口惜しがり、そうなる

のであったならば、あの当時（第二次探検）、もっと決断力と才覚をはたらかして、「収獲物全部と引き換えに」と、蔣四爺を通じて提案してくれた莫大なつけ値に応じておけばよかった、と言うのだった⁽⁸⁷⁾。

スタインにとってはこのような政府の対応や人々の抜き取り、それに対する王道士の「義憤」が幸いした。

役人どものこの強奪に直面したとき、王道士は、とりわけ重要と考えていたシナ語文書の、いわば中核とでもいうべきものを、安全な場所に移し換えておくだけの鋭敏さはあった。それは、量にしてかなりのものだったにちがいない。というのは、この聖跡再訪の収獲として、運び去るのを許してくれた分だけでも、仏教經典の写本約600巻5箱におよんだからだ－相当な寄進を増額したことはいうまでもなかった⁽⁸⁸⁾。

図18. スタインの署名
大英博物館ケニヨン卿あて書簡より

とつづけている。

カシュガルへ戻ったスタインは収集品（ニヤ遺跡再発掘分なども含め）182箱分の荷造りに1ヵ月を要している、第三次探検の成

果の「凄さ」が分かりえよう。ここで先に述べた先行研究『近代外国探検家新疆考古档案史料』収録史料により、成果の「凄さ」を確認しておきたい。楊增新（新疆各地の地方長官などをへて1928年新疆省長の時に暗殺された）から張紹伯（新疆外交署長）へ提出された1915年9月3日付公文書である。

カシュガル帰着時のスタイン一行は「荷車3台・ラクダ88頭・馬2頭と毛拉（イスラーム聖職者）・通訳・人夫の計28人⁽⁸⁹⁾」、パミールへ向かう時の一行は「4人の従者と馬5頭・駄馬16頭⁽⁹⁰⁾」と記録されている。スタインが荷造りに1ヵ月を要した収集文物については「190箱で17,000斤（8.5トン）は16台の車で別の従者に護送させて、運び出された⁽⁹¹⁾」とある。箱数についてはスタイン記録と8箱の差がある。

同史料には「スタインたちに行きとどいた保護を行うとともに、警官を差し向け入境から出境まで、秘密裏に見張った。測量や製図は行わなかった⁽⁹²⁾」とも記されている。スタインは測量などを各地で実施しているが、史料では実施を見つけられなかったのか、立場上からか「行わなかった」としている。

スタインは探検終了後、第一次世界大戦中であつたが、海路イギリスへ向かった。その後はイギリス・インドで収集品の整理や報告書の執筆・校正に追われながらも、インド・エジプト・イランなどの遺跡調査旅行をつづけた。

Ⅲ. アメリカの憧れ

1. ハーバード大学の思惑

新疆を中心に中央アジアを舞台として縦横無尽の活躍をしてきたスタインに思わぬドラマが待ち受けていた。1929年11月末67歳時、ハーバード大学は「無職」となっていたスタインをローウェル（Lowell）研究所での連続講演の名目で招聘した。インド帝国考古局の職務からは一年前に引退し

ていた。当時のアメリカは「永遠の繁栄」と呼ばれたバブル的好況を経て、やがて世界大恐慌を呼び起こすニューヨーク証券取引所で大暴落が起きた(1929.10.24)直後であった。ハーバード大学はフォッグ(Fogg)美術館を中央アジアの発掘品で満たしたい、これが狙いであった。歴史の浅いアメリカは古い文化財に憧れを抱いていた。繁栄のなか次々と博物館が建設され「博物館時代」とさえ称され、さまざまな美術品や古代文物は人々の欲望に合致した。

以下は主として5点の史料を通じての検討である。オックスフォード大学ボドリアン(Bodleian)図書館収蔵「スタイン日記」⁽⁹³⁾・大英博物館収蔵「スタイン関係史料」・新疆ウイグル自治区档案馆(館長:呉志強局長)と佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構(代表:福原隆善前佛教大学学長と筆者)編『近代外国探検家新疆考古档案史料』・同編『中瑞西北科学考察档案史料』・同編『スタイン第四次新疆探検档案史料』である。

ボドリアン図書館と大英博物館での調査は2009年9月、大英博物館での第二回調査は12年11月に行った。当然ながら先方Ian Wilde・Helen Wilton Godberfforde・Ben Arnold・Stephanie Clarke各氏やClarissa Von Spee(大英図書館Susan Whitfield氏紹介)氏らの正式許可をえての調査と史料入手である。新疆ウイグル自治区档案局(館)との共同出版は筆者が許新江局長時代の2001年から実施してきたプロジェクトで、掲出書は1～3冊目である⁽⁹⁴⁾。これらの関係諸氏に感謝したい。

これらの史料には便宜的にS(スタイン日記)・E(スタイン日記以外の関係史料)・C(中国側档案史料)を年月日などの前につけた。スタイン日記の日付は記載日である。「・・・」内がその内容要約である。スタインの宿泊地については明確なところのみ記した。スタインの独特な筆致、複雑な文脈、年月によるかすれ、裏写りなどにより筆者では判読しがたい部分多く、先行研究を参照し英語熟達者の協力も得たが不十分な部分もあろうかと思われる、諸氏の教示をいただければ幸甚である。スタイン日記以外の関係史料の日付は記載日であり、それにつづくCE以下は大英博物館の整理番号である。中国側档案史料の日付は当該文書の発信日、日付不明瞭なものは編集者が研究推定した日である。各史料には分かりやすいように下

線を付した⁽⁹⁵⁾。

スタインは1929年12月5日から27日まで8回（当初は6回600ドルの申し出⁽⁹⁶⁾）講演の間にハーバード大学フォッグ美術館理事兼教授ポール・J・サックス（Paul・Joseph・Sachs）らと様々な打合せを行った。

スタイン日記の主要活動一覧（S1930.01.01～03.29）には第四次探検の準備活動がまとめられている。

1930年1月1日サックスからの電報で資金が確保されたと知る。6日ホームベック博士らと昼食し、米國務省の支援を要請。7日サックスと彼の両親宅で夕食、詳細な取り決め書を受け取り、10日（9日付で）サックスへ条件を詳述し承諾と伝える。12日ローウェル総長に米國務省への推薦状を要請し、イギリスへ向かう。21日ケニヨン（言語学者・大英博物館理事）と大英博物館で会い助成金を要請。2月11日ビクター・ウェルズレイ卿と英外務省で面談、ケニヨンより大英博物館3年間計3,000ポンド助成を知らされる。27日ケニヨンと大英博物館で会い英外務省の支援を要請。

ハーバード大学との交渉・調査資金獲得・米英両政府への支援要請など手なれた活動がまとめられている。

スタインとサックスとの交渉過程史料を紹介する。長い原文を要点のみに絞った。第四次探検に関するハーバード大学との交渉過程が明示されていて、中央アジア探検史研究の貴重史料といえる。

サックスから手渡された「サー・オーレル・スタインKCIE」宛取り決め書（E1930.01.04・CE32/24/10/1）は「親愛なるスタイン」から始まり要点は次のようである。

12月31日発信電報を確認するための書簡。探検隊のために10万ドル獲得。貴殿をリーダーとして、ハーバード大学フォッグ美術館とハーバード燕京研究所（ハーバード大学と燕京大学が共同設立）が後援。3年間アジアの何処でも探検可。成果は大英博物館をふくむ上記団体に所属。貴殿の問題を理解できない委員達（後述）によって行動が妨げられることがないように、

連絡は私個人へお願いする。我々の了解事項は下記する、同意されるなら了解の旨伝達頂きたい、これまでの様々な会談で合意した計画に誤解を与える事項があれば直ちにお知らせを。とあり、以下箇条書きされている。

①付した別紙10万ドル3年間探検使用に同意。経費予算を作成され明細不要、随時送付されたい。②別紙費用項目間の融通可。次年度へ繰り越しも可。③貴殿が2月に英国を出発し米国経由で中国へ向かう費用も我々が支援との貴殿の提案に同意。貴殿は通知することなく自由に何時でも希望する所へ移動することが出来る。期待した成果が得られないことが中国の情勢で明確になった場合、自由裁量でベルシア地域（またはアジアのいかなる地域）に方向転換し、資金の全て使用可。④助手選考やその給料などの決定は貴殿の裁量。同行米国人地理学者を見つけられれば我々も同様に喜ばしい。⑤もし申し出があれば大英博物館の参加を承認。負担額は約1万ドルに止まるものと。寄付金額に応じて成果を分け合う。⑥貴殿を「ハーバード大学フォッグ美術館アジア研究名誉会員」に任命するよう要請中、認可後は報告書にそのように載せることは我々の望外の喜び。⑦収集品が西洋で研究され保存処理されることに同意。10万ドル寄付の割合で大英博物館・フォッグ美術館・ハーバード燕京研究所・ハーバード大学博物館で配分。貴殿の配慮で中国が望むなら彼らに供与も可。彼らが関心を示し、展示する用意がないなら中国政府からの貸し出しとして西洋で展示。⑧我が国国務省が貴殿に助力できると考えておられる書簡を得るなら、ローウェル総長の提案とともにワシントンの相応関係者に転送してもらうよう要請。⑨望まれるなら海外で利用できる特別紹介状をローウェル総長に依頼でき、彼が米国職員の協力を得られる紹介状を国務省に依頼するよう提案。⑩上記されていない事項や資金の運搬・何時何処で支払うかなどの詳細は2月ケンブリッジへお帰りになる時に貴殿と私で慎重考慮し最終結論に至ることを認識同意。

最後は「この何ヵ月、非常に重要なこの計画に関して我々の会談の後、この幸先よい出だしに私自身深く満足し、同僚も貴殿がフォッグ美術館・ハーバード燕京研究所と親交を持たれることを喜び誇りと思っていることを知られたら、嬉しく思われることでしょう。これ以後、これらの機関を米

国における貴殿の故郷と思っただけですようお願い申し上げます。最大の確信と希望をもってこれからのことを期待しています。親愛なるオーレル卿へ ポール・J・サックス（署名）ハーバード大学フォッグ美術館とハーバード燕京研究所を代表して」とある。

本史料で、注目すべきはサックスが「問題を理解できない委員達によって行動が妨げられることがないよう、連絡は私個人へ」としている点であり、「期待した成果が得られないことが中国の情勢で明確になった場合」としている点である。前者は関係者の反対（後述）を示しており、後者はハーバード大学側はウォーナーの敗北（後述）や把握していたはずの「アメリカ自然史博物館中央アジア探検隊」が1928年収集化石80余箱を中国側に押収され、29年共同調査交渉も頓挫（30年3月協定締結）⁽⁹⁷⁾などから、スタイン第四次探検の難しさを十分理解していたことを示している。

これに対するスタインの回答（E1930.01.09・CE32/24/11）は「親愛なるサックス」から始まり要点は次のようである。

Harvard University
Fogg Art Museum
Cambridge, Mass., U. S. A.

January 4, 1930.

Mr. Aurel Stein, F.O.I.N.
c/o Explorer's Club
644 Cathedral Parkway
New York City.

Dear Stein:

I write to confirm my telegram sent on December 31st to the Hotel Lafayette, Washington, D.C., reading as follows: "Glad to report complete success at Trustees meeting with result that we now have entire hundred thousand for your expedition. Letter follows. Happy New Year." This telegram will have conveyed the information to you that various friends and the Trustees of the Harvard-Yenching Institute have together subscribed a total sum of \$100,000. to make possible a Three Year Expedition to any part of Asia, under your leadership and sole direction, and under the auspices of the Fogg Museum of Art of Harvard University and the Harvard-Yenching Institute, to which institutions (and the British Museum as explained hereinafter) all results of the expedition shall belong.

It seems to me that there is little to add to the telegram quoted above, because we are anxious to make it crystal clear that your actions are not hampered by Committees in America who cannot comprehend your local problems. For this reason also it is understood that you communicate from the field with me rather than with any Committee, as such times as you may find it necessary to send communications. It goes without saying that on receipt of any word from you I shall keep your other backers and friends informed so that they may be in full touch with your movements as far as this seems possible and wise.

Our understanding of the arrangements is set forth in the following paragraphs, and if correctly stated by me, it will only be necessary for you to acknowledge this letter to me as expressing your understanding. I enclose a draft of letter covering this formality. If I have omitted any essential fact, or if I have in any way given a wrong impression of the plans to which we have agreed in our various talks, you will, of course, let me know at once.

1. It is understood that you have available for a Three Year Expedition the sum of \$100,000. to be expended by you as set forth (in intentionally general terms) in Exhibit A herewith attached.

図19. サックスから10万ドル決定など連絡
1930年1月4日付書簡（部分）

address while in England:
c/o The President,
Corpus Christi College,
Oxford

At Professor Lammens's house
9, Parker Street, Cambridge, Mass.
January 9, 1930.

Dear Lamma,

I am much obliged to you for allowing me time to acknowledge your full and complete letter of January 4th concerning the arrangements for my proposed explorations in Central Asia (or eventually elsewhere in Asia) more adequately than would have been possible at the late hour of the 7th inst., when you were good enough to hand it to me after our latest meeting. I am very glad to be thus enabled to assure you in writing of my very sincere gratitude for the most helpful and effective way in which you have laboured to secure to me a safe and satisfactory basis for these explorations. I feel particularly grateful for the very kind consideration you and your colleagues of the Fogg Art Museum have shown for the requests contained in my letter of July 15, 1929 (to Mr. S. T. Keller) and subsequent correspondence regarding the conditions under which I am able to undertake the planned expedition.

2. I am very glad to be left free by the terms indicated in paragraphs 2-4, 6-7 of your letter to adapt all practical arrangements concerning these explorations and their eventual results to the circumstances as they may present themselves before the start for, or in the course of, my planned expedition. I appreciate this freedom not only as an encouraging mark of personal confidence in my qualifications for such a task but also because prolonged experience makes me hope that this freedom will render it easier for me to achieve adequate results in the field.

There are a few points with regard to which, as already verbally mentioned, I am anxious to supplement the statements contained in your letter. I am glad to do this now in accordance with the suggestion contained in paragraph 10 of your letter.

3. You are aware of the special reasons which make me anxious for the proposed explorations to be undertaken with the cooperation of the British Museum and thus indirectly with such diplomatic support and good will as a letter, dated November 9, 1929, from Sir Frederic Kenyon shows that there is good reason to hope for the Trustees of the British Museum being prepared to be associated in the enterprise and to make a contribution towards its cost.

This letter, however, does not specify the likely amount of this contribution. The sum of \$50,000 or \$10,000 which is named in paragraph 5 of your letter was indicated

図20. スタインから修正追加要望連絡
1930年1月9日付書簡（部分）

私が提案した中央アジア（或いは最終的にはアジアの何処か）探検に関する1月4日付貴殿の完璧懇切丁寧な書簡、手渡して頂いた7日夜遅く確認。貴殿に心からの御礼をこの書簡で伝えられ喜ばしい。1920年7月18日付（C・T・ケラー氏宛）私の書簡記述の要望、私が計画した探検に着手できる条件に関してのその後の書簡やりとり^{ママ}に貴殿およびフォッグ美術館の貴殿同僚の配慮に感謝、とあり、以下②から簡条書きされている。

②貴殿書簡②から④と⑥から⑦記載条件により現実的な取り決めを自由に合せることができ嬉しい。この自由裁量はこのような任務に心強い、私の能力への個人的信頼の印だけでなく、現地で十分な成果をあげることが容易にしも難い。書簡⑩により補足したいこと幾つかあり。③私が大英博物館の協力と英国外務省の外交的支援を得て探検に着手したいと望む特別事情を貴殿はご存じと思う。同封1929年11月9日付フレデリック・ケニヨン卿の書簡でお分かりのように大英博物館理事会がこの計画に参画し費用に貢献することを望むのは十分に理由がある。書簡には額は記されていない。私が提示し貴殿書簡⑤に述べられた2,000ポンド即ち10,000ドルは卿との会話から私が推量した概算推定額である。書簡⑤に示された条件などを大英博物館が応じることを私も望む。提案した大英博物館の価値は、その寄付金をはるかに上回る。その参画により英国ならびにインド政府の誠意ある協力が確約されるから。④私の1月3日付書簡で触れた探検後に出版される私的談話（私の『沙漠地カセイの廢墟』や『砂に埋もれたホータン遺跡』のような）は都合良い時に写真や他の資料を使用するなどについては自由にさせて頂きたい。概要報告書の出版も自由にさせて頂きたい。詳細な報告書の出版は財政支援参画の団体の承認を得て別途取り決める。⑤貴殿書簡は我々の取り決めを明確に表している。現時点で念頭にない点、検討が望ましい点は私がケンブリッジに戻った際、予定では2月終わりか3月初め頃に追加の合意に至るといふ貴殿の有難い申出を喜んで利用、とある。

最後は「私をハーバード大学フォッグ美術館の名誉会員に任命するとの申し出、大変光栄に思う。この榮譽に感謝し、提案した探検を論じる如何なる科学的報告書または書物形式の出版物の私の名前の下に、間違いなく記します。貴殿ならびに同僚の方々のご親切に感謝します。貴国に足を踏

み入れて以来、私が享受してきた過去と未来の活動に対して、貴殿ならびに同僚の方々に心から感謝申し上げます。ご多幸を祈ります。敬具」で終わっている。

アメリカハーバード大学が持ちかけた第四次探検にスタインが大英博物館を引きいれたのは収集した文物を英国へ渡したいためとの説を見受けるし、筆者もそう考えていたが、上記史料の③「提案した大英博物館の価値は、その寄付金をはるかに上回る。その参画により英国ならびにインド政府の誠意ある協力が確約される」のとおりであることは、後に紹介する英公使の働きで証明される。

上記のケラー宛書簡の日付「1920年」は「1929年」の誤植と思われる。ハーバードがこの探検を考え始めたのはフォッグ美術館調査隊で美術館中国美術部長ラングドン・ウォーナー（Langdon Warner）が敦煌壁画の移し取りを拒否された1925年以降であり、スタインにウォーナーからの招聘書簡が届いたのは1928年8月⁽⁹⁸⁾のことであり、何よりスタインのケラー宛書簡（E1929.07.18・CE32/24/5）が存在しているからである。

シルクロード探検でアメリカは遅れを取っていた。はるか離れた中央アジアでの「領土争奪」課報戦に参戦する意図が希薄であったためでもある。アメリカ自然史博物館中央アジア探検隊がゴビ沙漠などを調査し（1921～28）、気候地理学者エルスウォース・ハンティントンがダンダンウイリク遺跡などを踏査し（1905～06）、フォッグ美術館ウォーナーが敦煌から壁画をグリセリンと粗い布で移し取ってきたぐらいである（1923～24）。

それまでのドイツ・ロシア・日本・フランスなどの探検隊は敦煌やキジルなどで壁画をナイフで数cmの厚さで剥がし取っていた⁽⁹⁹⁾。

ウォーナーは1925年にも敦煌壁画の移し取りを試みたが、中国側に拒否されていた。米英両国の教会学校3校が統合され北京に誕生した燕京大学の学生部長ウィリアム・フン（William Hung・洪業）の回想録*A LATTER DAY CONFUCIAN: Reminiscences of William Hung*（当代の儒者－ウィリアム・フン回想録）に拒否のくだりが記されている。

ある夜、学生ワン・チン・ジェンから急ぎ会いたいと電話があった。

居間で会うと涙を流し跪き「フン部長、助けてください。私は中国に対する裏切り者です」と言った。彼はウォーナーの通訳で敦煌旅行の世話をしていた。…ある夜、ウォーナーが壁画の上に布地を置く不快な作業を目撃した。ウォーナーは成功したら、ワンを再び雇うと言ったという。…翌朝、フンは教育部副大臣に会い、急ぎ措置をとり、副大臣は各地政府長や警察に電報を発した⁽¹⁰⁰⁾。

一端イギリスに戻ったスタインは1930年3月17日ニューヨークに上陸し、当夜ボストン着。この頃、フンがハーバード大学で教えていた。これがスタイン第四次探検を屈辱的失敗に導く伏線であった。

ウォーナーの方法は薬品により布地に壁画を移す革新的な技術だった。この技術を有するアメリカの地質学者ミルトン・ブラムレット (Milton Bramlette) がハーバード側を代表するかたちで第四次探検隊員に加わった。

以下は中国の古物や遺跡の保全と研究を専管する古物保管委員会 (1928年成立) の「斯坦因來華背景及目的報告 (スタイン中華來訪の背景と目的についての報告・中文)⁽¹⁰¹⁾」(C1930.12.日記載なし)の一部要約紹介である。部分的に中国寄り表現になっているが、彼らの思考パターンを理解いただくためでもある。

「…スタイン卿が取得した成果は考古学上にささやかな貢献をしなかったわけではないが、インドから新疆や甘肅への軍路を詳細測量し、敦煌秘蔵品を多く盗み出し永遠に異郷に帰属させた、我が国の莫大な損失だ。今春、また新疆を訪ねるビザを取るために首都 (南京) に来た。…外交部は普通旅遊護照 (一般旅行ビザ) を発行してしまった。…英国公使館はもし古物収集と国外持ち出しの予定があれば、その目的・範囲・計画書を中央研究院へ提出してから帰路につくとしている。…今回の旅の予算は、ハーバード大学が毎年2万ポンド3年契約で計6万ポンドを提供、これは中国の130数萬元に相当する。ほかに大英博物館が毎年3千ポンド3年契約で計6千ポンド提供 (スタイン日記では3年間で3,000ポンド)、中国の13万数千元に相当する。またインド政府測量局が負担、金額は不明。以上の合計は中

国のおよそ200万元である。スタインが要求したものだ。このことは英国・インド・米国とヨーロッパ各地の新聞が報じている。また中国の京津タイムズも10月17日に報じた」。

ここに記されたポンド表示はハーバード大学史料（後述）ではドル表示となっている。総額10万ドルである。この現代価値についてブライザックは「外国人悪魔たちの最後」で100万ドルとしている⁽¹⁰²⁾。該当論文発表当時（1997）のレートで1億3,000万円ほどに相当する。紹介を続ける。

「スタインは古道を探すだけで考古学上の収集活動はやらないと言明しているが、そうなら何故このような大金を使うのか。誰の目からも人を馬鹿にした行為だ。内幕の一部はハーバードの書類で暴きだされた。…ハーバード大学の博物館を充実させるために新疆・甘粛の古物を大規模発掘し収集するとして、スタインは資金拠出を頼んだ。この大学は2度中国西北部にスタッフ（ウォーナー）を派遣し発掘（移し取り）を企んだが北京大学が係員を差し向けたため、目的は達成されなかった。ハーバード大学は残念に思い謀にたけ盗みに長じていることで世界的に著名なスタインを招いた。その会議参加者には少数の中国人と大局観を持った米国教授もいて、このような大規模な考古学上の計画なら中国人と協同しなければならない、国民党下の中国は満州族下の清朝時代と全く異なると主張した」。

ここに記された中国人は前述のフンであり、米国教授は燕京大学の学長ジョン・レイトン・スチュワート（John Leighton Stuart）である⁽¹⁰³⁾。

その会議について、フン回想録ではハーバード大学が所在するケンブリッジのコマンダーホテルでスタインと面談（月日未記入）したとある⁽¹⁰⁴⁾。「外国人悪魔たちの最後」ではケンブリッジのサックス邸でスタイン・スチュワート・フンが1930年3月21日に話しあったとある⁽¹⁰⁵⁾。

先に紹介したスタイン日記の主要活動一覧（S1930.01.01 ～ 03.29）の後半にはハーバード・燕京の勧めで3月18日に会議が開かれ（会場未記入）、サックス主催晩餐会と記されている。そして20日にはブラムレットが来訪し説明とある。

この3件の会合が同一のものかどうかは不明であるが、重要会議であり、スタインが書きもらすとは考えられないので、同一とすれば日付はいずれ

かの記録違いと思われる。紹介を続ける。

「これに対してスタインは次のように長々と意見を述べた。自分は昔の中国をよく知っている。国民党は自ら少年中国と吹聴している。…外国人が中国の学術団体と協力しあう打合せもあったが全くつまらないし、騙される。新疆は決して中国領ではないとも言える。中国には中央政府はない。新疆は未開である。これまでの経験は通用する、いくらかの金を渡せば官吏はどうにでもなる。…会議の多数派は喜び、総費用中の6,000ドルを新疆官吏への働きかけ費と指定した。取得物はハーバード大学に提供し、重複品は大英博物館とインドに分けると決めた。居合わせた中国人と道理をわきまえた米国の教授は憤慨したが、多数派により採決された」。

ここに記された多数派とは前述のサックスらである。紹介を続ける。

「今春、ビザを首都（南京）で申請する際は行方をくらし（我々との）面会を断った。中央大学（現在の南京大学）が講演を依頼したが口実をつくり断った。想像すれば彼は聞き手に告げられない事があるからと分かる。英国の使者が古物は運ばないと言明したが…老獪でだまし取ったり買いたたいたりするのに慣れているし、百数十万元の大金を携えているし、測量の専門家を同道している。…上下一体となって国外追放を希望する…」。

HARVARD UNIVERSITY FOGG ART MUSEUM CAMBRIDGE, MASS., U.S.A.	
<u>Sir Aurel Stein's Estimate of Expenses</u>	
Transport	\$40,000.
Excavation Guides Technical Equipment Wireless for longitude, etc., etc.	
2 Indian assistants for two and a half years	2,000.
2 Chinese assistants for two and a half years	12,000.
Travel of surveyors and their menial staff	8,000.
Salary of Sir Aurel Stein for three years at \$400 a month	16,560.
Visits to local officials, etc.	6,440.
	<u>\$85,000.</u>
Guarantee fund for publication (on basis of three volumes like SINDHIA, edition of 750 copies)	\$15,000.
	<u>Grand Total \$100,000.</u>

図21. ハーバード大学側提供10万ドル項目別表
E1930.01.04サックス書簡附属



図22. 中国とヘディンの西北科学考察協議書
1927年4月26日付（部分）

少々長くなったが、第一次から三次探検時とは中国側の意識が大きく変化していることを示すための紹介でもある。

文中の賄賂用6,000(正確には6,440)ドルなどが記載された史料「ハーバード大学フォッグ美術館スタイン卿費用見積」(E1930.01.04・CE32/24/10/3)を添付する。特記すべきはスタインの報酬として毎月460ドル3年分計16,560ドル(前述換算例でおよそ2,150万円相当)が計上されている点である。彼にとって探検もひとつの仕事であった。さらに探検終了後に出す報告書(第二次探検報告書『セリンディア』のような3巻本と明記されている)750冊分15,000ドルも計上されている。

金子民雄は書いている。「68歳のスタインは、すでに時代に合わなくなっていたのか、それともこれまでのマキャヴェリ流の方法がいまも中国で通用すると考えていたのか、この結論は間もなく出ることになる⁽¹⁰⁶⁾」。

2. ヘディンと中国との西北科学考察団

スタインとともに中央アジア探検で輝かしい成果を獲得していたヘディンは1926年10月、ルフトハンザ航空の依頼を受けて、ベルリンと上海を結ぶ路線開発の基礎調査のためスウェーデン・ドイツ・デンマークの混成チームで再び中国を訪れた。

西欧列強に領土を侵略され、文化財を持ち出されていた中国では、20世紀初頭までの意識とは大きく転換し、外国探検隊による各種調査に激しい拒否姿勢が学界中心に巻き起こりつつあった。

ヘディン隊の調査計画も激しい反対に遭遇した。6ヵ月におよぶ交渉を経て、1927年4月26日、ヘディンは中国學術団体協會と19ヵ条からなる共同調査協議書を交わした⁽¹⁰⁷⁾。

前文に両者の立場が「中国學術団体協會が西北科学考察団を組織するために、スウェーデン国スウェン・ヘディン博士と合作する方法は以下のようである」と示されている。中国側が主催者であることが明示されている。以下に主要内容を列記する。

協會は西北科学考察団理事会を組織し、考察団の進行一切を監察・指揮

する（第2条）。理事会は団員を組織し、外国団員はヘディン博士が選び、協会が審議した後に委任する（第3条）。理事会が委任する団員中の外国側隊長はヘディン博士を任命する（第4条）。採集品の運搬は中国側隊長が行う（第5条）。全行程の食料・装備・人夫・運搬用ラクダ等・医薬品・採集品運送費・その他・外国側隊員手当はすべてヘディン博士が担当するとともに、期間中毎月850元を本協会に寄付する（第6条）。行程は北京からパオトウ・ソゴノル（いずれも内モンゴル）・ハミ・ウルムチ・ロプノール・チェルチェン（いずれも新疆）、変更必要時は双方団長が協議し、重大変更は理事会が審議したのち実行する（第7条）。調査期間は2年を超えない（第8条）。中国の国防・国権に関することは直接・間接を問わず一切調査できない、違反した場合は中国側団長が制止する（第10条）。測量地図は30万分の1を超えない（第11条）。歴史的・美術的建造物を破損しない、古物等を購入しない（第12条）。発掘は行わない、小規模発掘は双方団長が協議して行う（第13条）。考古・地質学者の獲得品は中国側団長あるいは中国側団員に渡し、本会が保存する（第14条）。写真・記録・図面・日記は理事会が審査、映像は理事会審査後まず北京で映写、これらの手続きをへず発表できない（第15条）。調査完了後に本協会名で正式報告する（第16条）。分野別出版は正式報告後に行う、地質学・人類学・考古学・民俗学などは本協会の経費負担により中国で出版し、地磁学・気象学・天文学などはヘディン博士の経費負担により欧州で出版し、双方100部を交換する（第17条）。気象観測装置4基と各種機器はヘディン博士が整え、調査完了後に理事会に提供する（第18条）。

協議書最後に「中華民国16年（1927）4月20日の本協会第9回大会の議決を経て当日の議長周肇祥が代表して、スウェン・ヘディン博士と各条を研究し、双方が満足して4月26日北京大学で調印する」と記されている。

中華民国が主権を有するその領土内を調査する協議書であるから当然ではあるが、中国側中心の内容である。

1927年5月9日、ヘディンと中国側隊長徐炳昶（北京大学教務総長）率いる調査団は北京駅を出発した（先遣隊はパオトウで準備中。一部隊員は後日参加）。調査は三段階で行われた。1927年5月から翌年5月にかけて内モン



図23. ヘディン側中国語での活動計画 1927年4月27日付

ゴルから新疆ウルムチへかけて実施、経費はルフトハンザ航空が負担した。ドイツの航空関係技術者7名も参加した。途中で航空路開設の反対運動が起こり、ルフトハンザ航空が撤退し活動は停止した。

1928年夏から33年秋にかけて新疆地区で各種調査を実施、航空路開設関係から学術調査のみにしぼり実施された。経費はスウェーデン政府が負担し、一部をルフトハンザ航空などが拠出した。

1933年10月から35年4月にかけてヘディンは中国鉄道部の依頼で内モンゴルと新疆を調査、中国沿海部から新疆までの道路建設の可能性を探るためであり、経費は中国政府が負担した。考古学・動物学・植物学・地理学方面の調査や地図作成・気象観測を実施した。新疆の複雑な政治情勢と内戦状態の中で「スパイ」と疑われ一時的に拘束された⁽¹⁰⁸⁾。

これらの成果は双方が発表した。ヘディン側は*Reports from the Scientific Expedition to the North-western Provinces of China under the leadership of Dr. Sven Hedin : The Sino-Swedish Expedition* (ヘディン博士指導力下の中国西北地区科学探検報告書・中国—スウェーデン探検隊) など全55巻を出版した。中国側は団長徐炳昶が『徐旭生西遊日記』(旭生は号)、黄文弼が『高昌』などを出版した。これらの報告書は

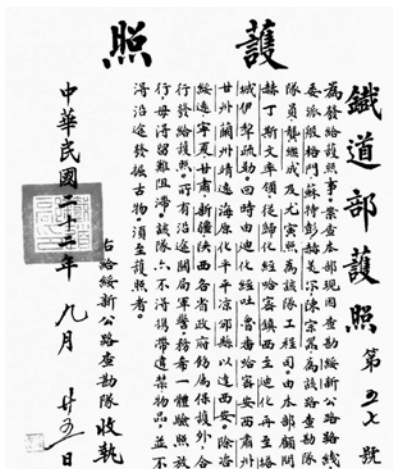


図24. 鐵道部からヘディンらへの旅行許可証 民国22年(1933)9月25日付

中国とヘディンによる西北科学考察団(団名については種々の表記がある)の成果の巨大さを物語っている。

3. スタインの決断

第三次探検時に王道士から中央政府や学者たちの自国文化財保存への意識変化を聞いていたにも関わらず(ウォーナーが二度目の敦煌壁画の移し取りを拒否されたスタインに話したかどうかは不明)、何故、スタインはハーバード大学の要請に乗ったのであろう。

3回の探検で手中にしていた「輝かしい栄光」。それが彼に「絶対的自信」をもたらしていた。冷静な判断力を失わせていたともいえる。老化による頭脳の衰えもある。さらにはスタインが「縄張り」としてきた新疆各地でヘディンを一方の隊長とする「中瑞西北科学考察団」が1927年から調査していたことも判断を誤らせた。

前述したように第一次探検時ヘディンへのライバル心からムスターグ・アタ峰登頂を試みているし、そのヘディンが1890～91年、1893～97年、99～1902年、05～08年につづき、その時点でも調査中であることも微妙に影響を与えたであろう。シルクロード探検家の中でもヘディンはスタインと並ぶ巨星であったし、部分的にはスタインより評価されていた。

杉山二郎の「スタインとその時代」に、次の記述がある。

この中央アジア探検家・考古学者(スタイン)を日本の東洋学界が、また敦煌学者が厚く歓迎した事実はない。その正確な滞在日程すら一部に知られているだけで風化し埋没している。このような事態は何か不自然である。彼が公式訪問でなかったにしても、世界的学者を遇するのに冷淡過ぎはしないだろうか。かつてヘディンの来日(1908)に当り、天皇皇后を始め朝野の有名人が会見し、東京地学協会が金メダルを贈り、ヘディン記念号を刊行した歓迎振りと、余りにも対照的である。彼の出自をユダヤ人とする偏見を知らず知らず日本の学界が継承していたとすれば、何と不幸なことであろうか⁽¹⁰⁹⁾。

本論「Ⅱ. スタイン探検人生」で述べた「ユダヤ人へのいわれなき差別への劣等感と反骨心」が決断を後押ししたのであろう。ヘディンが中国との共同隊であれば、自分は大英帝国の威信にかけて、“Sir”を獲得した自負から単独で調査できると思ったに違いない。ベルベット大礼服・白手袋・二角帽子・サーベル着用の授爵式での写真からもその自負は窺える⁽¹¹⁰⁾。

中国では外国探検隊による盗掘と購入持ち出しや中国人自身による「宝捜し」に対応すべく、1906年清朝政府民政部に古蹟科が設置され、1909年には古蹟保存弁法が裁可された。中華民国成立後の1916年には古物保存通達が出され、文物保存暫定弁法が制定され、28年には名勝古蹟古物保存条例、30年には古物保存法が制定されるなど、急速に文化財保護の環境整備が進んでいた⁽¹¹¹⁾。

スタインはこのような大きな流れを把握していなかった。いや把握はしていたであろうが十分に理解していなかった。70歳を目前にして「栄光の地」新疆でもう一花咲かせようと思ったとしても不思議ではない。こうして、スタインは時代の変化を読み取れず、フンの秘かな画策を知らず、ハーバード大学の要請に同意した。

Ⅳ. 第四次新疆探検

1. 新疆への「遊歴」ビザ取得

ハーバード大学との協議を終えたスタインは1930年3月29日、豪華客船「アジア女帝号」でバンクーバーを出港、4月10日横浜に上陸した。

東京・鎌倉・奈良・京都で、日仏会館・増上寺・大倉集古館・東京大学・鎌倉大仏・法隆寺・東大寺・奈良国立博物館・薬師寺・唐招提寺・春日神社・知恩院・京都国立博物館・比叡山・伏見桃山陵などを訪れ、帝国学士院の晩餐会・京都大学の歓迎晩餐会などに出席、駐日英国大使・大山柏・羽田亨・梅原末治・小川琢治らと交流し、20日神戸から出港した⁽¹¹²⁾。この11日間の行動からも並々ならぬ探究心が読み取れる。

を訪問しているので、是非とも面談して欲しいと述べた。王部長はスタイン卿が国外に何か持ち出す考えはあるかと質問。公使は『そうだ』と答えた。しかし彼の仕事はロイ・アンドリュース（前述した「アメリカ自然史博物館中央アジア探検隊」の責任者）のような人達とは全く違い、中国と西洋の古代交流接点を辿る研究目的で発見物を研究するだけである。『古代の紙屑箱かその他のゴミ』と言っても良いと述べ、探検計画の財政面を説明し、つづけて8月にインドから中国へ出発、約2年半の探検となる。新疆と内モンゴルを3年探訪し歴史調査と考古学研究を行うことを認可するビザ発行を謹んで申請する。と述べ、王部長は「木曜（5月1日）午後3時に喜んでスタイン卿を迎えると応じた」。

この時点ではイギリス側はスタインの文物持ち出しを「そうだ」と明言している。そして、それらは「古代の紙屑箱かその他のゴミ」と驚くべき表現を使用している。

ランプソン公使はつづいて英領インド政府の新疆省政府に武器や弾薬を供給に関する覚書を手渡した⁽¹⁴⁾。二つの問題を関係づけて王部長に許可をせまった。

5月1日ランプソン公使はスタインをともない王外交部長を訪ねた。英国外務省の面談録（E1930.05.01・CE32/24/19/5）にはその生々しい応酬が記録されている。

「ランプソン公使がスタイン卿を王部長に紹介。王部長がお会いでき嬉しいと述べた。スタインは新疆で当局者と良好な関係で、任務を完遂できたことは嬉しいと応えた後、玄奘のこと、アジア各地踏査に永年要した、地図作成の必要性、地形学と歴史調査の密接な関係などについて長々と話した。公使の提案でスタイン卿は研究活動について説明。スタインの冗長な説明に一瞬の間があったので、王部長はスタイン卿の業績を認め、公使の要請通り出来る限りの便宜を与えることが出来る」と発言。中国政府はスタインが南京を立つ前にビザを発行し、新疆当局へ電報で通知する。スタインは深く感謝し、再度地図作成のメリットを強調し、彼の地図で説明される耕作地の増加が示す通り、中国による新疆支配の有益な結果を滔々と述べた。公使の提案でスタインはルートがカシュガルからトルキスタンに

跨る古代駐屯地（ニヤ遺跡）のゴミ山を探索したい、また天山山脈の北側ルートも調査したいので、モンゴルも許可の中へ入れることを希望した。王部長はルートの詳細をもらえるかと訊ねた。スタイン卿は細目を渡すのは難しい理由を滔々と説明した。中国政府調査部から中国人地理学者の派遣を希望した。王部長は北京の協会にその旨を伝えたと述べた。公使が同行希望は中国政府調査部派遣の地形学者であると口を挟むと王部長は参謀本部の朱長官に伝えたと述べた。スタイン卿は地理学者の費用も遠征側が負担すると述べた。

公使はビザ発行の具体的手続きを訊ねた。王部長は写真と詳細資料が必要と返答した。スタインは中国政府から承認を得る前にインド人を雇えないので氏名などは提供不可能と説明。同行アメリカ人青年学者（ブラムレット）の資料と写真を持っていて、アメリカ公使がビザ等の申請書を提出すると解釈。スタイン卿はインド人助手や使用人の名前は後日提供で十分ではと提案し、王部長は駐カルカッタの中国総領事が事後処理するであろう



図27. 公使とともに王正廷外交部長へビザ要請 1930年5月1日付面談録（部分）

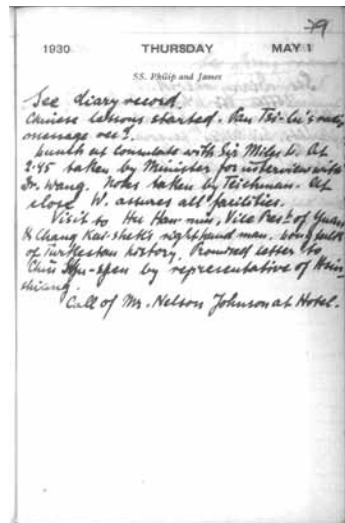


図28. 公使と昼食後に王外交部長へビザ要請 1930年5月1日付日記

と助言し同意した。結論的にビザはスタイン卿が希望する上海出発日5月13日までに発行可能であるととらえた」。

外交文書である本史料にもスタインの性格を示すくだりがある。「地形学と歴史調査の密接な関係などについて長々と話した。…冗長な説明に一瞬の間があったので…中国による新疆支配の有益な結果を滔々と述べた。…細目を渡すのは難しい理由を滔々と説明した」の「長々・冗長・滔々・滔々」である。

ランプソン公使の外交交渉によりスタインは5月7日に「遊歴護照」(旅行ビザ)を受領⁽¹¹⁵⁾。英国政府の中華民国政府への武器輸出が「交換条件」であった。スタインがハーバード大学のサックスへ強調した「提案した大英博物館の価値は、その寄付金をはるかに上回る。その参画により英国ならびにインド政府の誠意ある協力が確約される」(前述)は正にその通りであった。英国政府の力なくしてビザは取得できなかったと思われる。

「交換条件」は以下のようである。1929年、新疆省政府は英国駐カシュガル在領事館との秘密交渉をへて、英領インド帝国から兵器の購入を予約した(歩兵銃4,000丁と銃弾400万発)。その後南京の国民政府を通じて更に兵器を購

入したいと申請した(歩兵銃6,000丁と銃弾100万発)。インド政府は1回目注文分を1930年内に交付という新疆省政府の申し出は承諾したが、2回目は棚上げになっていた。スタインが第四次新疆探検を計画した際、英国駐中国公使館とインド政府外務省・英駐カシュガル領事館は外交交渉でこの件を駆け引きの道具に利用して、スタイン計画にそって譲歩するように、中国に強要した⁽¹¹⁶⁾。

ビザに記された「遊歴護照」は文字どおり「旅行ビザ」である。後述する

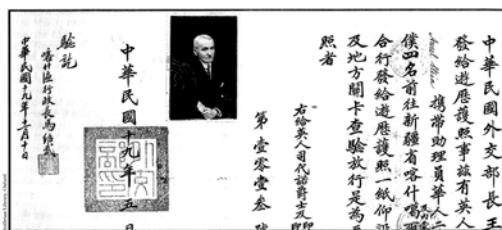


図29. スタインへのビザ(オックスフォード大学ボドリアン図書館蔵・プライザック「外国人悪魔たちの最後」より転載)。下部が欠けているが、後述のビザ発給を新疆省へ通知した電文(C1930.05.06)とほぼ同様である。プライザックも上記説明のように「発掘認可は含まれていない」としている。

ランプソン公使からインド外務長官あて電報 (E1930.06.12・CE32/24/21/3) にもそのように記されている。ところがスタインは後述する中国側からの非難への反駁書 (E1931.05.10・CE32/24/46/5) で「許可には必要な調査も含まれていると理解している、如何なる古代遺跡でも発掘出来ることは明確な了解事項であった」とし、また後述 (S1931.07.01) する「タイムズ」への投稿では“The passport was understood to provide also permission for such survey work” (旅券は調査活動の許可を与えると理解された) と「調査」を付け加えて解釈している。いや結果的に「追放⁽¹¹⁷⁾」され、後付けでそのように表現したのかも知れない。この両者の差がこれから軋轢をうむことになる。

このビザ取得前後をスタインは日記に次のように記している。

5月1日についての新たな不安 (S1930.04.29)。狩猟から帰ってきたランプソン公使に会い王部長との会談についての心強い報告をえる (S1930.04.30)。公使と領事館で昼食、2時45分に王部長と面談し全ての便宜の確約をはばえる。蒋介石の右腕である胡漢民を訪問し新疆 Chin Syes Yen (新疆省主席金樹仁 Jin Shu Ren とと思われる) への書簡の約束をえる (S1930.05.01)。無線電信機など発注、ビザを受領したと総領事から電話連絡をえる (S1930.05.07)。ランプソン公使と王部長などへ書簡 (S1930.05.13)。

ビザを取得したスタインは5月13日「箱根丸⁽¹¹⁸⁾」でインドへ向かった。探検の準備を熟知のカシミールするためと、陸路で新疆へ向かつては目立つためと推測される。

スタインとイギリス・アメリカ側は重大な点に気づいていなかった。ハーバード大学による新疆探検についての会議に出席した中国人フン (ウォーナーの2回目の敦煌入り禁止させた) の存在だった。彼は北京の古物保管委員会にスタインの探検計画を知らせ、反対運動をするよう働きかけた⁽¹¹⁹⁾。

以下、煩をいわず時系列でまとめてみたい。

2. 嚴重に監視せよ

C1930.05.06 中華民國外交部（以下外交部と称す）から新疆省政府（以下省政府と称す）への電文⁽¹²⁰⁾「史汀（Sir）がアメリカ人柏蘭勒德（Bramlette）および随員中国人2人・インド人3人・インド人□1人を伴い□月にインドから新疆・内モンゴルを考察に行く。2年間である。本部（外交部）はビザを発給した。各辺境の官員に当英国人たちが通過する際、保護するよう通達されたい。協力を」（一部他史料より補足）。南京でビザが発行された日（スタインが総領事から受領したと電話連絡を受ける前日）の電文である。発信日は魚（6）日であるが、何故か11日到着となっている。スタインの中国語表記はこの「史汀」以外に「司代諾」や「斯坦因」などが使用され、現在では「斯坦因」が一般的である。インド人が分けて記入してあるのは身分の違いと思われる。

この柏蘭勒德は前述したミルトン・ブラムレットであり壁画移しの技術を有するアメリカの地質学者で今回探検にハーバード大学を代表するかたちで参加した。のちにカシュガルで体調くずし帰国する。中国人2人につ



図30. 新疆省へのスタインらビザ発給通知
民国19年（1930）5月6日発信

いては不明。先に紹介したスタインと英公使が王外交部長と面談した際、要望し実現しなかった中国政府調査部派遣の地理学者であろう。前述した（Eハーバード大学フォッグ美術館スタイン卿探検費用見積・E1930.01.04・CE32/24/10/3）ハーバード大学がスタインと約定した10万ドル中、この中国人アシスタント2人分として12,000ドルが計上されている。1人6,000ドルはスタインの報酬16,560ドルの36%ほどにあたり決して少なくない。結果的に参



図31. インド出発などと報じる「大公報」
民国19年（1930）7月17日

加せず、この予算は取り決め書に従い他項目へ融通されたと考えられる。インド人3人はインド政府の測量技師と思われ、続いて記されているインド人1人は料理人等の使用人と思われる。

C1930.05.12省政府金樹仁主席からカシュガル行署（役場）馬紹武行政長官への代電「ビザ発給された」、C1930.05.12省政府金主席

から外交部への代電「入境許可を境界線関所に命じた」。ビザ発給を知った中央研究院（政府直轄の最高学術研究機関）が動き出した。C1930.05.20中央研究院蔡元培院長から外交部への公函「新疆での調査目的を厳格に審査する必要あり」。これに対して、C1930.05.27外交部から中央研究院への公函「既にビザ発給」には「英公使館は一般旅行以外に古物収集と持ち出し実施時は目的・範囲の計画書を提出すると声明」とも記されている。C1930.05.31中央研究院蔡院長から行政院への公函「調査行動を制限し、発掘品の持ち出しを防止すべし」。これに反応して、C1930.06.04行政院から中央研究院への公函「行動制限と古物持ち出しを厳重監視せよと新疆・甘肅・熱河・察哈尔等の軍と民の長官へ命令した」と事態が進展する様が記されている。上記の両史料では「ハンガリー人スタイン」（すでに1904年にイギリスに帰化）とされている。

E1930.06.12・CE32/24/21/3ランブソン公使からインド帝国外務長官への極秘袋に入れられた電報「スタイン氏には新疆および内モンゴルの一般旅行ビザが発行されただけで、文物を収集し国外に持ち出そうと意図しているなら事前に計画の明細書を提出し、その承認を得なければならない。どのような形であれ、彼らの要求に応じることはつまらない長い協議に陥り、スタイン氏が受け入れられる解決には至らないであろう。スタイン氏が到着しだい面談し、私にどう（中国）外交部へ返信してほしいかを確かめてもらいたい。奥地で3年間不在になるので、辺境での発見物の問題はそれほ

ど急を要することではないと私は感じる」。

中国側が猛反対しているにも関わらず「発見物の問題はそれほど急を要することではない」とはまさしく極秘袋に入れられた内容である。公使が公文書で“passport for ordinary travel”（一般旅行旅券）と明記していることに注目する。中国側史料に登場する「遊歴護照」（旅行ビザ）に適合する表記である。しかし、スタインは先にのべたように「調査活動の許可を与える旅券」と主張している。

C1930.08.02省政府北京弁事処張鳳九処長などから省政府金主席への公函「立法院胡院長紹介のスタイン…適当に便宜を図られたし」とある。胡院長訪問（S1930.04.30）の効果が表れている。

3. スリナガル出発

S1930.08.11スリナガル出発「出発が決まり清算、サックスからの2通手紙へ電報打つ。船で出発、運河を下る。船上泊」、S1930.08.12前進「バンディプルで下船。ムハンマド・カーンが病気に。探検・個人の帳簿を綿密に整理、準備段階の出費多く用途も不同で決して楽ではない。ブラムレットが追いつく。月光明媚で素晴らしい夜」。ムハンマド・カーンはインド政府測量技師で診断の結果、肺炎と判明、後日調査から離脱。補充を要求したが実現しなかった。ほかの随行測量技師アフラッ・グルもインド政府所属。帳簿整理にも几帳面さが表れている。S1930.08.13前進「コラグ・バン宿屋泊」、S1930.08.14前進「ムハンマド・カーンを送り返すことを決めねばならない。政府が受信した電文の内容にはがっかりした、古物の輸出規制に関するものだ、品目の例外はあるようだが（この部分はハンガリー語で記述⁽¹²¹⁾）」、S1930.08.15前進「カムリ宿屋泊」、S1930.08.16前進「カラパニ宿屋泊」、S1930.08.17前進「ラッツ兵舎泊」、S1930.08.18前進「馬が暴れ出し、池に振り落とされる。背中と臀の痛みをこらえながら宿屋までたどり着く、温湿布で処理しておくしかない悩ましい一夜。アストル宿屋泊」、S1930.08.19前進「ムシュキン泊」、S1930.08.20前進「地元駐屯軍責任者が届けてくれたトッド少佐からの電話メモでは中国サリコル（タシュクルガン

地方)の長たちは命令を受けて入国を阻止しようとしている。自分の目論見がもう外れたかと疑い、たいへん心配になって落ち着かない。ブンジ泊。

中国入国が許可され、国境を管理する地方役場に通知されて(C1930.05.12)から3ヵ月も経過しているのに「入国阻止情報」に接し、「怪我した背中疼痛深刻化」に悩みながら、心配している。行政院「調査行動を嚴重に監視せよと命令」(C1930.06.04)が混乱を呼んだのであろうか。

S1930.08.21前進「4時起床、7時半出発」、S1930.08.22前進ギルギット着「ブルゲ大尉を訪問、トッド少佐からの電話連絡事項について話し合う。妨害の報告は実証されている。パークレー大尉と食事。ギルギット泊」、S1930.08.23ギルギット滞在「ブルゲ大尉が見せてくれた電報全ては中国側の妨害に関している。英国駐カシュガル総領事からの電報では行政院の命令により新疆省主席はすでにカシュガルに命じて、入国を阻止するそうだ。南京に緊急な抗議を申し込むように、英国駐中国公使館に願いが出てある。この電報はインド政府にも送達済み。約束済みの兵器弾薬が輸送途中

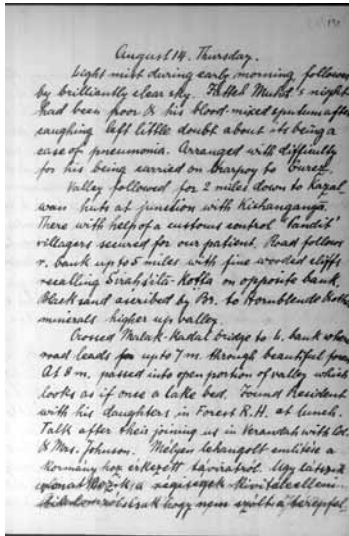


図32. 下4行はハンガリー語で記入
1930年8月14日付日記(部分)

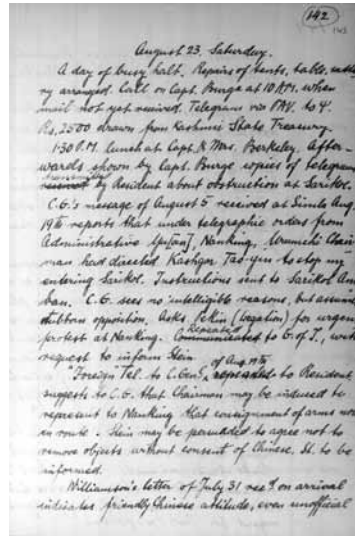


図33. 「武器輸送中と圧力をかけたら」
1930年8月23日付日記(部分)

であることを持ち出して、圧力をかけたら良いかもしれないと」。

スタインは入国許可を取得していたからには問題なく入国できると考えていた。この事態急変に英国側は「兵器弾薬は輸送中」と圧力をかけ解決しようとしている。前述「外国人悪魔たちの最後」には驚くような記述がある。「入国許可が出ないので、英国側は新疆政府に『スタインは武器と弾薬の輸送に関わる特別人物』と称し、入国許可を取り付けた⁽¹²²⁾」。「グレイトゲーム」の現場を垣間見るくだりである。

C1930.08.24疏勒（ヤニシャル）潘祖煥県長から省政府金主席への電文「英総領事のスタイン入国申請について指示伺い」。欄外に省政府の指示が書いてある。

S1930.08.24ギルギット滞在「医者診断では骨折はしていないが、筋肉を傷めた」、S1930.08.25ギルギット出発「英総領事らに電報発信」。

C1930.08.26省政府金主席からカシュガル馬長官とヤニシャル藩県長への電文「カシュガル到着後、調査活動について相談」。

S1930.08.26フンザへ前進「荷駄隊の運賃決済。久し振りの涼しい一夜。チャルト泊」、S1930.08.27前進「72人のクーリーを引き連れて出発。ヒンディー泊」、S1930.08.28前進「村長から露营地の借り賃を要求される。アリアバッド泊」。72人の人夫、1人25kgとすると1,800kg。他日の記載でもあらわれる大部隊での移動、困難な探検と豊富な資金、そしてスタインの性格を物語っている。集落で雇い数日先の集落で解雇し別の人達を雇う、駅伝を活用しての前進。

4. 入国許可待ち

S1930.08.29アリアバッド滞留「アフラッ・グルが経度確定観測開始」、S1930.08.30滞留「サックスへ中国側妨害の詳細長文手紙を書く」、S1930.08.31滞留「更に多くの手紙書く。写真現像」、S1930.09.01前進「フンザ泊」、S1930.09.02フンザ滞留「背中痛みつづくな手紙書く」、S1930.09.03滞留「方々から手紙到着。フンザ人身体測定。背中きわめて悪くなる予感」、S1930.09.04滞留「一日中横になっていると痛み緩和に効果があるかどうか

試す。読書」、S1930.09.05滞留「現像局部感光を試みる。多くの人を身体測定。いろいろな書簡や文書を見る。軍医から電話でマッサージ受けたらと進言える」、S1930.09.06滞留「帳簿整理。現地人から氷河が最近後退していると聞く」、S1930.09.07滞留「帳簿整理。現地人身体測定、フィンランド人の顔をもつ男に出会い驚く」、S1930.09.08滞留「郵便出す。バルチスタン調査の論文修正。イギリス王立地理学会『地理学報』を読む。予定遅れ痛感」、S1930.09.09滞留「背中は目に見えるほど腫れている」、S1930.09.10滞留「背中痛み夜も眠れず。手紙数通届く、中には個人弁護士ウィルソンからの遺言状執行者資格問題と『スタイン・アーノルド探検基金』について遺言状一部改訂案も。軍医からグリセリン塗布の進言える」。スタインは節約家で個人的消費をすることは殆どなく、給与や講演料・印税などで資産を蓄えこのアジア地域研究のための基金を設立している。

S1930.09.11滞留「背中痛み好転。朝7時、アフラッ・グルより入国の表玄関が開いたと聞く。イギリス駐在官への9月9日着電報で、この消息確認。英総領事9月3日発信電報の写しで、新疆主席がカシュガルに来てよいと電命を出したと知る。まさに心動かす快報。サックス・アレン・アンドリュースへのPAVコードでの電報を起草。今日は気が晴れた一日だ。というのは、もう一度以前の縄張りに戻ることが期待できるから」と喜びが伝わっている。PAVコードはギルギット駐在イギリス政治代表所で使用された電報暗号。「縄張り」と表現している。荷造りを開始、そんな中でも17人の男の身体測定をしている。あらゆることに興味を持つそれがスタイン。

ここで疑問が生じる。前述したように中国入国が許可され、それが国境を管理する地方役場に通知されてから4ヵ月経過している（C1930.05.12）。長々と入国を阻止されたのは何故か。イギリス政府の恫喝的外交（武器輸出との半ば抱き合わせ）でビザは出したものの学界からの猛烈な反対運動が巻き起こり（これには既に述べた在アメリカ中国人フンの愛国的画策が働いているのだが）、スタインやイギリス側が痺れをきらして自ら中止することを期待した中国側の政治的時間稼ぎ作戦もあったと推測できる。

S1930.09.12前進「一晩ぐっすり眠る。クーリー 75人に荷物を渡す。方々

へ手紙書き委細説明。村長らにチップや土産を与える。医務室を見学、立派で整然としている。毎日30～50人診察、イギリスがここに文明をかけつつあることを物語っている。夜、大天幕での宴席に列した、ヨーロッパの味だ。歌手らが披露したのは突厥語とペルシア語の歌だ。酋長宮殿前泊」。出発が決まり背中痛みも和らぎ熟睡を喜ぶ人間らしさ、いきさつを手紙で知らせる外交力、村長らへ心づけする社交力、帰化したイギリスへの自負が記されている。人夫も増やした。前進再開の喜びが宴会記述に表れている。

S1930.09.13滞在「酋長宅など見学」、S1930.09.14前進「アタバド泊」、S1930.09.15 前進「ゲルミト泊」、S1930.09.16前進「パス泊」、S1930.09.17前進「ゲルミトとパスで雇った人夫に1人1ルピーの日当と1アンナ（1/16ルピー）のチップを渡し帰す、喜ばれる。カイバル泊」。このような僻地に手紙が届くのも、大量の荷物が運搬できるのも、郵便制度がととのっていたからである。S1930.09.18前進「郵便袋届く。ギルチャ酋長別荘近く泊」、S1930.09.19前進「手紙を書く。ミスガル泊」、S1930.09.20前進「郵便袋の送達時刻に間に合うように、更に多くの手紙書く。ムルクシ泊」。スタインは実に筆まめ、この日記はじめ大量の書簡などを残し、それらが現在もオックスフォード大学や大英図書館・大英博物館などに保存されている。

C1930.09.21行政院から省政府金主席への特急電文「遊歴許可と文物発掘禁止」。この史料には「南京駐在英國総領事が外交部へ来て告げた、スタインはビザをとり新疆へ向かったが省政府は行政院からの訓令を受けておらず入境させないので、辺境で立ち往生し困っていると。よって、入境を許し、地元の長官らに文物発掘と国外持ち出しが発生しないよう係員を派遣して厳重に監視されたい」などとある。当初の「ビザ発給」から「厳重監視」となり、そして「文物発掘・持ち出し禁止」へとビザ内容にそった伝達がされていく。

5. 中国入国

S1930.09.21前進「海拔15,000フィート（正確には15,837フィート・4,827

m) のキリク (Kilik) 関 (中国との国境の峠) を越える。30年前に初めて到達した中央アジア (新疆) の目的地はここだ。野営地は13,400フィート (4,084m)、身を切るような寒さ」。

C1930.09.22外交部から省政府金主席への電文「入境許可と文物発掘禁止、嚴重監視」。「英国使者が今回スタインは古物を探し求める目的はないと明言しているので、入境を許可し…」とある。スタインの目的が文物収集であることは、ハーバード大学と大英博物館へ文物を納めることを条件に資金を得ていることから明白であるが、イギリス側は表向きには収集目的はないとしたのであろう。

S1930.09.22前進「ミンタカ・アゲジ泊」。

C1930.09.23省政府金主席から古物保管委員会への電文とカシュガル行署への訓令「考古を阻止」。

S1930.09.23タシュクルガンへ前進「熟知した歩哨所の中国人からビザの提示を求められる⁽¹²³⁾。武器についても聞かれる。帳簿と日記を11時30分まで書く。パイク (Payik) 歩哨所近く泊」。中国側関所に着いた安堵感が遅くまでの仕事ぶりにうかがえる。S1930.09.24前進「ジェシチ台地泊」、S1930.09.25前進「ジュルガル・グムバズ近くの牧草地泊」、S1930.09.26前進「1900年探検時のガイドや県長・アクサカル (Aksakal) らの出迎えを受ける。9時30分就寝。タシュクルガン泊」。旧知の人達からの歓迎に安らいだであらう。

「アクサカル」は「白ひげの老人」を意味し、「村長」のような存在であったが、この時代にはイギリスやロシアの駐カシュガル領事館から任命され手当を得て、情報入手活動を手助けする役割を担った。カシュガルのアクサカルが英領事館にあげた情報により、大谷探検隊の橘瑞超と野村栄三郎を英国はスパイと疑い東京大使館を通じて日本政府に二人の活動についての確認を求めたとの記述もある⁽¹²⁴⁾。

C1930.09.27省政府金主席から行政院と外交部への密電「旅行許可と嚴重監視・発掘禁止・測量禁止」、C1930.09.27省政府金主席からカシュガル馬長官への密電「入境許可と行動制限」。前者には「馬長官には行き先を明らかにさせたうえで通過を許し、経路に沿った各地の長に嚴重監視と隠れて発

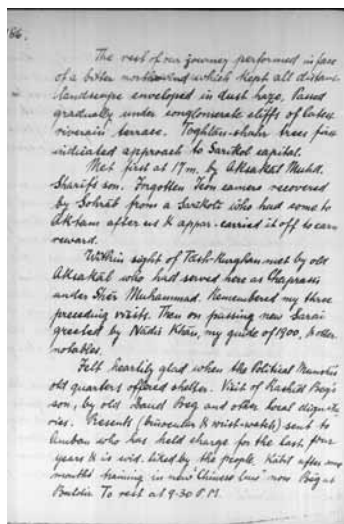


図34. 中国入口の町での出迎えが記されている 1930年9月26日付日記（部分）

掘することや地形を測量することを許さず、国防を重視し文化を守るよう命令した」とあり、後者には「イギリス使者が古物収集目的はないと言明したので、中央政府がビザを発給したから、その信望に関わるので入境は許さざるをえない。彼の世話をしながら嚴重監視し、収集と測量禁止…」とある。

S1930.09.27タシュクルガン滞在「地元駐屯部隊2人がビザと荷物検査に来訪。（護身用の）武器と弾薬を点検。県長を訪問し玄奘や過去3回の訪問を話す。県長の宴会を楽しむ」、S1930.09.28前進「精算や両替。故城の写真撮影を制止され、中国側態度の表れと感^マじる。どのような進展が得られるか、北へ帰るべきなのか（この部分ハンガリー語）。歩哨所泊」、S1930.09.29前進「朝5時20分起床、7時30分出発。雪降りだす」。日記はほぼ毎日、起床から始まり通過地の詳細な観察と活動内容が詳しく記され、就寝で終わっている。この日の起床と出発時間を取り上げたのは、大規模な荷駄隊を朝早く出発させることは並大抵ではないからである。

S1930.09.30
前進「積雪。中央アジア関係の雑誌読む。風邪で6時に寝る、こんな時には読書こそあう。今は



図35. 第三次新疆探検時点でも「測量等禁止」
民国2年（1913）8月28日付公函

亡き母の思い出（この部分ハンガリー語）。タルバシ泊」、S1930.10.01前進「現地の人が1906年の訪問を憶えていた。チヒル・グムバズ泊」、S1930.10.02前進「キジル・ツッケン泊」、S1930.10.03前進「巡礼団に出会う。アクタラ泊」、S1930.10.04前進「部落長が歓迎。私の帰還は祝福されるだろうか（この部分ハンガリー語）」、S1930.10.05前進「途中アクサカルが歓迎。ヤブチャン泊」。

6. カシュガルで待機

S1930.10.06前進カシュガル到着「カシュガルが近づき往時の楽しい思い出がよみがえる。英総領事ジョージ・シェリフ(George Sherriff)大尉⁽¹²⁵⁾(以下、英総領事と称す)の熱い歓迎をうけ、今後の見通し楽観的で、心おきない夜。潘季魯(疏勒県長・潘祖煥とも)へ手紙届ける。ランプソン公使の電報は妨害への強烈な反感を示している。英総領事館泊」。潘季魯の父・潘震は新疆の高官でスタインの古い友人であった。スタインは潘季魯の修学時代に援助した、英語・ロシア語・フランス語・ウイグル語なども出来、探検の順調進行に協力した。スリナガルを出発して、入国拒否をはねのけようやくたどり着いた大英帝国の「最前線基地」。「心おきない夜」に安堵感がにじんでいる。

S1930.10.07カシュガル滞留「金主席への贈答品(地図)を英総領事に託す。役場やスウェーデン宣教師宅を訪問。プラムレット到着」。イギリスとロシアだけでなく他国もグレートゲームに参戦していたことがうかがえる。

C1930.10.08カシュガル馬長官から省政府金主席への電文「スタインが計画どおり調査することの可否」。中国語はすべて縦書きであった当時としては珍しい横書き史料である。

S1930.10.08カシュガル滞留「長旅で破損した荷物箱等を修理。来訪した潘季魯と役場などを訪問し、希望を伝える。金掄県長は支持を表明」。

C1930.10.09疏附(コーナシャー)県から省政府金主席への電文「調査活動許可申請」。

S1930.10.09カシュガル滞留「PAVコードでサックスなどへ電報。知人らへ手紙書く」。ことの難渋ぶりをスポンサーへ報告したのであろう。S1930.10.10滞留「修繕や勘定書処理。オークション方式で両替」、S1930.10.11滞留「ショーンベルグ大佐が夜中2時到着。レーに兵器弾薬輸送のため6週間ほど滞在した。銃4,000丁と家畜500頭（意味不明）、S（?）からの電報は悪い知らせに違いない、重要な任務を遂行するに足る時間が確保できそうもない、帰還ルートと日時を検討すべきだ（この部分ハンガリー語。Sは文意からサックスと思われるが、不明）」。ショーンベルグは二度にわたって新疆を踏査、金主席がインドから銃・弾薬を買い付ける仲介をした英国軍人。S1930.10.12滞留「馬行政長官の宴会出席、酒飲む」、S1930.10.13滞留「個人弁護士らへ手紙。スウェーデン布教所を訪問、1915年時より拡張されている、新しい医務室を見る。フレデリック・ワイティの手紙で調査困難を予感する」。ワイティはインド立法院長（1920～26）、1928年から国民政府の首席政治顧問に招聘されたイギリスの政治家。スタイン第四次新疆探検を支援するため、蒋介石主席や胡漢民立法院長・王正廷外交部長らの説得にあたった。S1930.10.14滞留「唇に水膨れ。ショーンベルグ大佐と話し合う。馬で散歩。今後の移動には様々な困難が伴う、U（?）からの回答と暗号電報の解説を待っているが来る気配はない（この部分ハンガリー語。Uはアレンを表すウとも異なり不明）」。

C1930.10.15省政府金主席からカシュガル馬長官への密電「カシュガル大道経由でウルムチへ来る命令と監視」、C1930.10.15英総領事（総領事の中国語表記は石立甫）から省政府金主席への電文「沙漠での考古調査の許可申請」。中国語横書きの本史料には「主席閣下のご高覧を請う。弊国スタイン卿の新疆を来訪する詳細状況は10月7日に弊領事より馬行政長官に述べているので、翌日には閣下に伝えられたと思うが、いまだご指示を得ていない。スタイン卿は中国政府の良き友であることは明察されておられると存じている、彼が新疆へ来るのは中国の古代の威名を発揚するためである。直ちに命令していただくのが一番望ましい。冬の初めには沙漠での作業が始められるよう。承諾くださり折り返しの返信を伏して期待する。感激に堪えない。ご健勝で」とある。「高覧を請う、幣国、弊領事、伏して」

などと外交儀礼用語が散りばめられている。一方で「スタイン卿は中国政府の良き友である、新疆へ来るのは中国の古代の威名を発揚するため」と主張を貫く記載もある。

S1930.10.15カシュガル滞留「Takacs（高楠順次郎？）などへ手紙」、S1930.10.16滞留「サックスへ今後の見通しについて手紙書く。資金引き出し。馬長官が自動車で来訪、当地初の自動車で町中大騒ぎ。馬から『金主席のウルムチへ来て、相談しようとの“方針”』を聞く。英総領事はウルムチへ行く必要はない、新疆政府のその方針はインド政府の感情を損ね、武器弾薬の供給に支障が出るかもしれない、英公使も強硬な措置をとるかもしれないと暗示した。英総領事は潘季魯と相談し、明朝新疆政府へ出す電文を決めた。英公使とインド政府外務省へも障害を知らせ、協力を要請することに。あの悪意扇動が起きた結果だ。手紙16通出す。実験（活動？）の成功に疑問を抱く、どうしたら無駄な時間をかけずに済むか、恐らく冬の間に以前と同じ方法（日程？）に戻していけば有用な仕事ができるだろう、厳しい決断が迫られている（この部分ハンガリー語）」。

省政府からカシュガル行署へ発せられた密電（C1930.10.15）「カシュガル大道経由でウルムチへ来る命令と監視」が早くも伝達された。まさに外交戦である。

S1930.10.17滞留「愛犬ダッシュ死に悲嘆に沈む。領事館庭木の間に葬る。写真現像」。スタインは孤独をいやすために犬を可愛がりすべてダッシュと名付けた。この5代目ダッシュの死は第四次探検頓挫を暗示しているかのようである。

C1930.10.18カシュガル馬長官から省政府金主席への密電「スタインのタクラマカン沙漠通過の決意と迪化（ウルムチ）へ相談に行く気になれない」。この電報には「英総領事はウルムチまでは遠く、冬季でないとタクラマカン沙漠通行は困難で、これ以上延期となれば計画が崩れてしまう。主席に電報で要請し承諾してもらうつもりだ。さもないと北京の公使が外交部と交渉する、とのことである。自分が婉曲的に説明しても、自身の考えを固持しているので願います」と記されている。馬長官は新疆の官吏であるが、スタインを擁護するような内容が度々出てくる。混乱の新疆にあって

このような人も多くいた。

S1930.10.18カシュガル滞留「潘季魯県長と情勢について話し合う。楊増新前主席暗殺と金主席昇格の経緯も聞く。役人は生活困窮(政府弱体化で)と聞く。手紙書く」、S1930.10.19滞留「ウォーナー(前述したフォッグ美術館中国美術部長)へ直面する困難について手紙を書き、サックスへ伝えるようにと。ウルムチからの返事未着」。

C1930.10.20省政府金主席から英総領事への電文「スタインをウルムチへ招き調査コースを検討する」。省政府からカシュガル行署への密電(C1930.10.15)「カシュガル大道経由でウルムチへ来る命令と監視」の正式伝達と英総領事から省政府への電文(C1930.10.15)「沙漠での考古調査の許可申請」への回答である。

S1930.10.20カシュガル滞留「ハカニン・シャリ遺跡調査」。

C1930.10.21コーナシャー金掄県長から省政府金主席への電文「ケリヤからカラシャール(コルラ近郊) 経由ウルムチへ行く申請」。本申請には「…入境を許し踏査を許さないのは理由がたちににくい。…英総領事は苦々しく思いインド政府と英大使に、インドからの兵器輸送を取り消す提案をしようと考えている。総領事と会い忠告し3日待ってもらった。…義理を中央に立てるより、自ら英国・インドと友好を結んだ方が良いと思う。虚名を捨て実益をえることだ…」とある。上位の主席への申請にしては踏み込みすぎているが、「英総領事が兵器輸送取り消し提案を考慮。中央に義理を立てるより英国・インドと友好を結んだ方が良いと思う」部分はバーター取引を常とする外交戦や当時の中華民国中央と新疆省の実体的関係を物語っている。当時の中国・新疆の混乱ぶりは前述したとおりである。

S1930.10.21カシュガル滞留「部屋で整理。手紙受け取る。手紙書く。英総領事来訪」、S1930.10.22滞留「ほとんど一日中手紙書く。英総領事と馬で外出」。

C1930.10.23省政府金主席からカシュガル馬長官等への密電「ケリヤ・カラシャール経由ウルムチへ来ることを許可する、関係者を随行させ監視する」、C1930.10.23省政府金主席からカシュガル馬長官への密電「ウルムチへ来る際、陶明樾を随行させ監視にあたらせる」、C1930.10.23省政府金主

席から英総領事への電文「カラシャール經由ウルムチへ来ることを許可する」。カシュガル到着後2週間余をへての「移動」許可である。しかし、スタインが知るのは11月3日の中国側宴席で中国側からである。これほど重要なことがイギリス側から即時知らされないのは妙である。あるいは発信日に誤りがあるのか。後日の記載（S1930.11.03）では無線通信故障発生とされている。

S1930.10.23カシュガル滞留「アレン（親友）やワイティへ『事件』（先に進めない）の一部始終を詳細に手紙で報告」、S1930.10.24滞留「英総領事と車で潘県長を訪問、金主席よりの返事は未着と知らされる。中国語学習」、S1930.10.25滞留「散策と写真撮影。読書と手紙書き」。この撮影の部分で「レンズの絞りは32 f・シャッターは1/10秒」と記しているほどのこだわり。S1930.10.26滞留「返事届かず。英総領事は状況打開をアメリカ公使にも表だって応援してくれるよう提案するつもり。英総領事と馬で散策。中国語テキストを朗読する」。スタインの焦りが読み取れる。語学も天才であった彼は何度も中国語の個人指導を受けたが、なぜか苦手であった。第二次探検時の助手蔣孝碗が湖南人であったため、スタインの中国語は湖南訛りだった。S1930.10.27滞留「ルコック夫人の2通の手紙への返信書く。散策しながらも先を案じる」、S1930.10.28滞留「10月分勘定書修正。友人へ状況説明の手紙を書く。夜『後漢書・西域伝』（仏訳）を読む」。

C1930.10.29省政府金主席から外交弁事処への指令「9月27日パイク関所より入境した⁽¹²⁶⁾」。スタインは9月23日、パイク歩哨所でビザ検査を受け入国している。C1930.10.29カシュガル馬長官から省政府金主席への電文「英総領事からのスタインのホータンなどへの遊歴申請」。横書きは諜報戦を繰り広げた英露両国人数が居住していた影響であろう。

S1930.10.29カシュガル滞留「サックスへ手紙で苦境報告」。焦るスタインは翌日からの郊外での小調査を決めた。

C1930.10.30英総領事から省政府金主席への公函「考古活動の許可申請」。これにはイギリス駐カシュガル領事館の公印が押されている。

部分的に記載する。「主席兼総司令官金樹仁にご高覧を願う。謹んで申し上げます。…南京政府は遺跡と古代地理を調査するために来ることを許可

したのに、かつて来ることを阻んだことがある。奇異なことである。…踏査は許さないがウルムチへ来ることは許すと伝達された、幣領事は中々理解できない。…貴国が華人を派遣して踏査に随行させることをスタイン卿は極めて喜んで受け入れ、旅費も払う、スタイン卿はもともと華人学者を数人招聘しようと立案したが、まだ尋ねあたらないと明言したこともある。…早く踏査させて頂きたいと重ねてお願いする。返事を頂戴したい。…幣領事は閣下に信頼をいだいており、とりわけ今回インドを通していろいろと買物する件には熱意を持っている。…閣下が今回何故このような対応を私に与えたのかは全く分からない。しかしこのぐらいのことで双方の友好は阻害には至らず友情は増進されると幣領事は重々しく表明する。敬意を表し、ご健勝を祈る」。

外交的文言で彩られているが、「遺跡と古代地理を調査するために来ることを許可した」とスタインの言い分を述べた上に武器売却案件をちらつかせて踏査（発掘目的を隠して）許可をせまっている。

スタイン第四次新疆探検行程表

1930.08.11	スリナガル出発
1930.08.22	ギルギット着 08.25 発
1930.09.23	中国入国検査（国境峠越え 21 日）
1930.10.06	カシュガル到着 11.11 出発
1930.11.29	ホータン着 12.07 発
1930.12.18	ケリヤ着 1931.01.09 発
1931.01.11	ニヤオアシス着 01.13 発
1931.01.16～24	ニヤ遺跡「発掘」
1931.02.11	チェルチェン着 02.15 発
1931.02.24	チャルクリク着 02.28 発
1931.03.16	コルラ着 03.21 発
1931.03.29	クチャ着 04.01 発
1931.04.09	アクス着 04.12 発
1931.04.25	カシュガル帰着 05.18 出発
1931.06.01	中国出国検査（国境峠越え 3 日）
1931.06.16	ギルギット着 06.22 発
1931.07.02	スリナガル帰着

図36. スタイン第四次新疆探検行程表

S1930.10.30カシュガル郊外へ移動「一晩中不安。用水路の取り入れ口付近調査へ。不言実行（この部分ハンガリー語）」、S1930.10.31移動「同地で初歩的調査実施し移動」、S1930.11.01カシュガルに戻る「英総領事が金主席へ返事が遅延している理由を手紙でたず。役人たちを招き夕食会開催。出席者のひとり李郵政局長から『約14日前に読んだ新聞に、金主席がスタインの新疆入境と発掘禁止の命令を受けとったとの記事があった』と聞く。風邪で発熱」、S1930.11.02カシュガル滞留「英総領事の交信記録を読み、行政院長のスタイン新疆省入り反対を知る。英総領事は潘県長を通じて再度ウルムチへ電報を

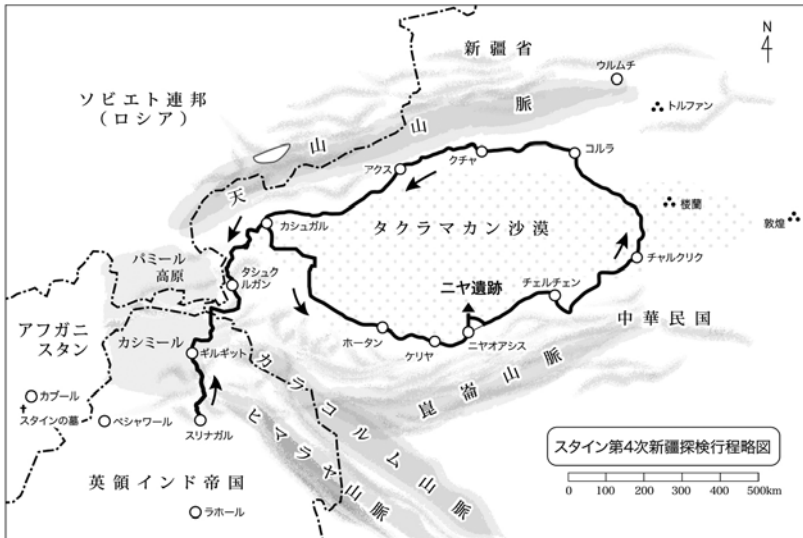


図37. スタイン第四次新疆探検行程略図

出そうと考える」。

7. カシュガル出発許可

S1930.11.03カシュガル滞留「中国語個人授業受ける。中国側宴会に出席。役人が受け取った金主席10月23日付返電で、『スタイン計画に基づきホータン・ケリヤ帯へ行くことに同意し、カラシャールを通してウルムチへ至り、そこで今後について話し合って決めよう」と要求している。中国人を伴うことも命令。返事が遅れたのはウルムチの無線通信に故障発生』と知る。英総領事が発見物の処理について言及『カシュガルで展示し、ロンドンへ移動する。中国側がどれかを要求したら、それは中国の適当な場所へ送られる。最終案は中国の学者一人を招待し目録作成や解説などを補佐させる』。宴席にはロシア総領事ソコルニコフやロシア副領事、ドイツとオーストリア人などが。この二人は北京でヘディンと一緒にだった」。ようや

く移動が許されこの日の宴会、安心感が綴られている。

S1930.11.04滞留「出発にそなえて精算。英公使館電報で発掘禁止だが旅行は妨げないとの解釈を確認、発見品についてはウルムチで金主席と話し合うとの公使の提案を知る。郵便袋受け取る。中国語学習」、S1930.11.05滞留「ブラムレット（壁画剥離技術を有する今次探検の地理方面助手）体調すぐれず、スウェーデン布教センター医師に文明世界で静養が必要と診断され帰国決定。アレンへの手紙を書き、サックスへの手紙を書き始める」、S1930.11.06滞留「8月11日から11月5日までの日記の原本をふくめた郵便物を出す。馬4頭購入。アフラッ・グルが測量から戻る」。

スタインの「異常」ともいえる「日記送付」は彼の性格を浮かび上がらせる。日記はイギリスのアレン夫妻に送られた。彼らを通じて自己の行動を広く伝えるためと思われる。公開を前提として書いた日記とも言える。紛失をおそれて写しは手元に残していた。この用心深さも一目を置くに値する。

C1930.11.07省政府金主席からカシュガル馬長官はじめホータン・アクス・カラシャール・ウルムチ県長などへの代電「嚴重に監視し発掘と測量を禁止」。この電文中には「スタインは和闐（ホータン）から庫車（クチャ）・焉耆（カラシャール）・吐魯番（トルファン）・哈密（ハミ）から省首府（ウルムチ）を計画している」と、これまで明らかでなかった行程が示されている。

S1930.11.07カシュガル滞留「精算。同行人はChang Shunと決定、とやかく言うだろうと予測。無線受信の練習。ロシア10月革命（1917）記念宴会がロシア領事館で開催され英総領事参加。帰国するブラムレットと費用精算」。この同行人（監視役）をスタインはChang Chungとも記している。彼が聴きとった表記から中国語に戻すことは難しいが、中国側の史料（後述C1930.11.14など）からカシュガル郵便局検査員の張鴻昇と特定できる。S1930.11.08滞留「病身のブラムレット帰国へ。潘県長による送別昼食会開催され、スウェーデン布教センター医師らと話し合う。シャンパンもでる。ブラムレットが残したカメラを潘に贈る」、S1930.11.09滞留「挨拶回り。馬長官へ張鴻昇への手当支給を提案するも同意されず。名刺印刷原版を探す

ため第15号から18号の服装トランクを開く」。スタイン自身は中国語では「司代諾」と表記していた。

C1930.11.10省政府金主席から外交弁事処陳繼善処長への訓令「嚴重監視と発掘活動禁止」。史料には「前に敦煌石窟で多数の古物を詐取したスタインがビザを取って西北地方を遊歴する、ビザには物品を採集してはならないと明記してあるが、この人物は貪欲で狡賢く、旅行には必ず目的を持っている。…学术界が世間に発表するのは民族の誉だが、文物は国内に保存するのが主権を尊重する方法だ。…スタインは中央アジアで考古活動に約30年も携わり、取得した成果は国内外の学者一同に深く仰がれているが、我が国の先民遺跡を盗取し我が国の主権を蹂躪することは我が民族を憤慨させる」と記されている。

上記に「物品を採集してはならないと明記」とあるが、スタインに発給されたビザには「遊歴護照」と記載され、「物品を採集してはならないと明記」はない。が、「遊歴」が意味するところは「旅行」であり「発掘許可・文物収集」が含まれていないことは明らかである。「取得した成果は国内外の学者一同に深く仰がれている」部分は中華思想の中国では稀な外国人への評価である。その一方で「古物を詐取・狡賢く・盗取・主権蹂躪」と激しい言葉が並んでいる。

S1930.11.10カシュガル滞留「最後の精算など最終的出発準備。(英総領事館が収集していた) ヨートカン出土文物を梱包。真夜中まで手紙書く」。

C1930.11.11英総領事から省政府金主席への公函「省政府へ向かう」。公印の押された本史料に記されている予定コースは「ホータン・ユテン（ケリヤ）・カラシャール（コルラ近郊）経由で省（ウルムチ）へ」であり、省政府がカシュガルなど各地役場へ連絡した「ホータンからクチャ・カラシャール・トルファン・ハミ経由（折り返し）ウルムチを計画」（C1930.11.07）とは異なる。第一次探検から三次までの連続大規模発掘で栄光をもたらした「ニヤ遺跡」。これを隠すスタイン側の意図がこの二件の史料から窺うことが出来る。発掘をスタインは当初から計画していたが、中国側の発掘禁止命令にあい、英総領事と相談しつつ巧みに覚られないようにしたのであらう。略図を参照いただきたい。新疆省がスタインの計画と連絡した「ホー

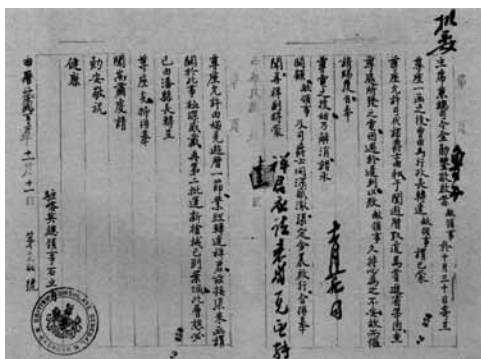


図38. 英総領事発信「ケリヤ経由で向かう」
1930年11月11日付公函



図39. 新疆側把握ルートとスタイン希望ルート
ニヤ遺跡「発掘」意図が読み取れる

タンからクチャ経由」では目指すニヤ遺跡から離れる。スタインの希望コース「ホータンからケリヤ経由」にはニヤ遺跡への接近が秘められている。

なお本史料には「いろいろ世話になった、幣領事はスタイン卿とともに深く感激している。…新疆へ輸送する銃器第二次分はすでに葉城(カルグリク)に到着、県長が閣下へ報告したに違いない」ともあり、カシュガルで1ヵ月余待ちようやく出発できる喜びとともに「交換条件」兵器供与についても記している。

8. カシュガル出発

S1930.11.11カシュガル出発「よく眠れなかった。朝10時に英総領事らと出発、潘季魯を訪問、成功と再会を祈りあう。カシュガル東門を離れる。夜10時ラクダ隊到着。夜中12時食事、12時30分就寝。ヤング・アリキ泊」、S1930.11.12前進「6時前起床。カルタ・ヤイラクの不潔で煙塵充滿した長宅泊」、S1930.11.13前進「臨時道案内人から度々賃金を求められる。ラクダ隊とトラブル。ヨブルガ(岳普湖)南泊」。

C1930.11.14コーナシヤ一金県長から外交弁事処への呈上書「スタインと

張鴻升の11月11日出発を報告」。

S1930.11.14ホータンへ前進「カラクル宿場の倉庫泊」、S1930.11.15前進「カシュアリキの農家泊」、S1930.11.16前進「第一次探検時のコックと雇われ希望者が待っていた。英総領事からの11月13日付手紙アフラッ・グル快方に向かい15日には出発できそうを喜ぶ。数通手紙書く。ヤルカンドのアクサカル別荘泊」。

C1930.11.17疏勒（ヤニシャル）潘県長から省政府金主席への電文「予定通りの計画で出発する許可を求める」。ここに「氷を携えて旅行する…主席が考えを堅持すればインド政府は助けあうことが出来なかったとして、すでに応じた兵器契約を破棄されるおそれありと言明しておく」と記されている。この史料でも兵器購入が持ち出されている。潘県長は父子二代にわたるスタインの友人だからこそこの「主席が考えを堅持すれば…兵器契約を破棄されるおそれありと言明しておく」との電文である。

S1930.11.17ヤルカンド滞在「アクサカルとヤルカンド役場など各方面訪問。馬方等を雇う」。

C1930.11.18省政府金主席から外交弁事処への訓令「入境許可と発掘禁止」。この史料は長さ105cm（縦24.5cm）の長文で、文中にスタインの中国語表記「斯坦因」（2ヵ所）と「司代諾」（10ヵ所）が混在していて、欄外に同一人物へ二種の表記を使用することへの注意コメントが記されている。

S1930.11.18ヤルカンド滞在「役場での県長の宴会に出席。スウェーデン布教センター訪問。カシュガルで雇った従者を解雇」。

C1930.11.19省政府金主席から新疆外交処陳継善処長への訓令「スタインはすでに省（ウルムチ）へ出発、嚴重監視すべし」。この史料で興味を引くのは「監視員張鴻昇の月給は40銀券だが、寒空に外国人と遠出するのは苦勞だし、儉約して具合が悪くなくても困るし、風変わりな感じを与えてもいいけないので、80銀券まで支給することを許す。馬長官の公式書類により払うこと。前借りも許す」とあり、人情味のある計らいと省のトップが「公式書類により払うこと」まで指示していることであろう。C1930.11.19省政府金主席から英総領事への公函「于闐（ケリヤ）・焉耆（カラシャル）經由で省（ウルムチ）へ来ることを許可」。両国の駆け引きが読み取れる文

言が並んでいる。「考古学活動は禁止だが…中英国交は睦まじいと称されている、両国の親善を増進するために、スタイン卿がケリヤ・カラシャール経由でウルムチへ来ることを承諾する。通過する道中で調査も可能で、これなら中央政府の命令も尊重できるし、スタイン卿に遊歴の利便を与えることにもなる。貴下の幸せと健康を祈念する」と。スタイン側の主張するルートが認められた。しかも「道中で調査も可能」（発掘禁止が解かれたわけではないが）とある。中央と英国側の双方を立てようとする新疆政府金主席の苦肉の策である。

S1930.11.19ホータンへ前進「ポスガム・バザールの大きな屋敷泊」。

C1930.11.20古物保管委員会が出した「オーレル・スタイン卿の中国トルキスタンでの考古学調査についての声明書」（Statement regarding Sir Aurel Stein's Archaeological Expedition in Chinese Turkestan）は4頁（英文）にわたり、スタインの文物持ち出しを激しく批判している。徐炳昶・黄文弼ら著名学者19人の連名である。本史料はCE32/24/25としてイギリス側にも収蔵されている。後述するスタインの本声明への反論に英国駐中国公使館へ届けられたのは12月21日とある。ハーバード大学・大英博物館・インド考古局などへも送付された⁽¹²⁷⁾。C1930.11.20省政府金主席からヤニシャル潘県長への密電「普通遊歴ビザと拳銃購買とは無関係」、C1930.11.20省政府金主席から新疆外交処陳処長への訓令「遊歴許可と発掘禁止」、C1930.11.20外交弁事処から第四第六公安局への訓令「発掘禁止」。

S1930.11.20ホータンへ前進「第一次探検時に世話になった老人宅に兵器輸送と関係ある高官が2ヵ月滞在。歩兵銃・弾薬を運ぶ長いラクダ隊に出会う。葉城（カルギリク）のアクサカル宅泊」。

C1930.11.21省政府金主席からカシュガル馬長官への密電「ケリヤ・カラシャール経由ウルムチへ来ることを許す」。文中に「途中で考察を行うこともできる。これは友誼に配慮したからである。領事とスタインには既に手紙と電報で述べたが、改めて婉曲表現で伝えられたい。ほかの件は首府で相談しよう。今は心配するな」とある。この史料でも先に述べたように新疆は中央と混乱的關係にあったことが読み取れる。

S1930.11.21カルギリク滞在「サックス・アンドリュース・香港上海銀行

やウルムチへ行く予定なのでキルケガールダなどへ手紙書く。県長表敬」、S1930.11.22前進「県長の歓迎昼食を終え、前進。コシ泊」、S1930.11.23前進「ラクダに逃げられ、待つ時間に廃塔探査。9時30分にやっと出発。チョラクイ泊」。昼間に荷駄運送で酷使されるラクダは夜間「半自由」にされる。紐を食いちぎり逃げられたことは筆者も度々経験している。ラクダ使いが連れ戻すのを数時間待たねばならない。S1930.11.24前進「身を切るような寒風。英総領事に手紙書く。グマ（皮山）泊」、S1930.11.25前進「ラクダ隊出発遅れへ愚痴。盗掘跡ある仏塔廢墟觀察。モジ宿屋泊」。

C1930.11.26中央研究院から国民政府への公呈「護照（ビザ）を取り消し、即日出境を命令すべき」。「入国許可」（C1930.05.06）から「調査目的厳格審査必要」（C1930.05.20）、そして「調査行動制限、発掘品持ち出し防止」（C1930.05.31）をへて「調査行動嚴重監視せよと省政府へ命令」（C1930.06.04）と進展してきた事態は、ここに至り「ビザ取り消し、即日出境を命令すべき」とさらに圧力が強められようとしている。

S1930.11.26ホータンへ前進「ザングヤの新築家泊」。この日スタインは満68歳の誕生日を迎えているが、一言も触れられていない。通過地の地勢が延々と綴られている。S1930.11.27前進「崑崙山脈がはっきり見える。両足がリウマチのようだ。ピアラマ近郊立派な家泊」、S1930.11.28前進「ザワ・バザール近く泊」。

9. ホータン到着

S1930.11.29前進ホータン着「旧友たちの熱烈な出迎えを受け言いつくせないほどの喜びを感じる。ショーンベルグ大佐よりの手紙でイブラヒム・ベクの監獄入りを知る。アクサカルとニヤ遺跡・エンデレ遺跡行きについて検討。ホータンのアクサカル宅泊」。イブラヒムは第一次から三次探検でスタインが雇ったウイグル族、敦煌文献の運搬も手伝うなどスタインに協力したためにケリヤ県長により数度逮捕された。英総領事と英公使が新疆省金主席と国民政府王外交部長に抗議した⁽¹²⁸⁾。S1930.11.30ホータン滞在「英総領事やアレンなどへ手紙書く。地区の楊行政長官を表敬しニヤ遺跡やエ

ンデレ遺跡行きを話す、意見を述べなかったので、賛成したかどうか不安を感じる。県長も表敬、潘県長からの紹介状を受け取っていた。新たに購入したラクダ14頭を調べる」。

スタインほど情報の重要性を認識している者が、英国側ともいえるアクサカルはともかく現地の長に何故「ニヤ遺跡やエンデレ遺跡行きを話した」のだろうか。イギリス公使館電報で「発掘禁止だが旅行は妨げないとの解釈」を確認（S1930.11.04）しているのに。

「輝かしい栄光」を勝ち取った第一次から三次探検時代の旧友が沢山いるホータンにようやく到着した安心感からだろうか。あるいは長の気を引き「消極的賛成」でも得られると期待したのだろうか。あるいは68歳（当時としては十分に老人）を4日前に迎えた衰えであろうか。過去の行動から遺跡へ行けば発掘すると予測されてしまい、新疆政府へすぐにも報告されるのは目に見えている。

S1930.12.01滞在「楊長官・段県長が答礼来訪、玄奘などについて話す。ケリヤ（于田）県長の協力が必要と話す、助力するよう命令されているはずだと教えてくれた。楊長官による大型宴会に参加、礼砲やラッパが轟く軍隊式歓迎だ、現地の役人全員がそろった。大広間には多くの国の国旗が陳列してある。16品のフルコースをヨーロッパ方式でとる。アレン夫人の誕生祝いの手紙書く」。多くの国の国旗陳列やヨーロッパ方式での食事は

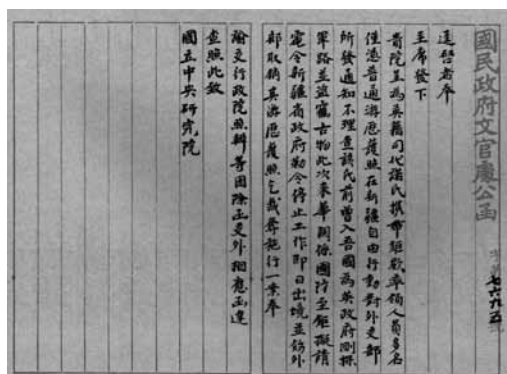


図40. 国民政府「ビザ取り消し即日出境命じた」
民国19年（1930）12月3日付（部分）

「グレートゲーム」による
各国人の頻繁な往来を示
している。S1930.12.02滞在
「イブラヒム・ベクがまだ
収監されていると知り、疑
問感じる。バザール散策」。

C1930.12.03外 交 弁 事
処からコーナシャー金県
長への指令「11月11日カ
シュガルから随行人張
鴻昇を伴い出発した」、

C1930.12.03国民政府文官処から中央研究院への公函「国民政府がすでにビザを取り消し、即日出境を命令した」。「英政府が軍路を測量し、古物を盗む…」と厳しい文言が並んでいる。中央研究院が国民政府へ「ビザを取り消し、即日出境を命令すべき」と提案して(C1930.11.26)から一週間での決定である。

S1930.12.03ホータン滞在「楊長官らより安全や高齢などを理由に沙漠調査反対を受ける。これらの『屁理屈』に、経験豊富であり今までも無事だった、季節的に今しかない、インド政府からの賛成も得ているなどと話す。最終的にケリヤまで前進しそこで決定することになる。妨害にぶつかり落胆。英総領事11月17日の手紙に金主席の11月1日付手紙が同封されていた。友好的な美辞麗句が並んでいて、『古代ルートぞいで進み希望している古物が発見できるかも知れない』とあり、タイムリーな鼓舞だ」。

金主席からカシュガル馬長官への密電(C1930.11.21)で「既に領事らに述べた」と記しているのはこの手紙を指すと思われる。発掘禁止の一方で、古物が発見できるかも知れないとは、一見矛盾と思えるが南京政府や学術側の強硬姿勢と新疆省政府の現場としてのスタイン調査への温度差である。

S1930.12.04滞在「ヨートカンを調査。墓の撮影を張鴻昇(監視人)から禁止される」、S1930.12.05滞在「英総領事から11月28日付手紙で金主席の前進同意を知る。楊長官にも同様に伝えられていた。孔雀河やタリム河を見て、トルファン経由ウルムチへ行くつもりと伝える。一日前との急変化に安堵する」、S1930.12.06滞在「ラクダ18頭購入。楊長官と県長来訪。出発答

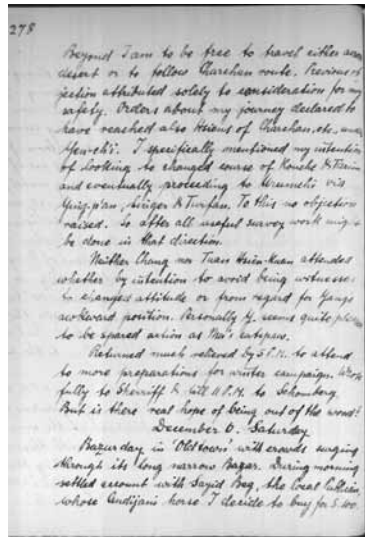


図41. 「前進許可下達」を知り安堵
1930年12月5日付日記(部分)

礼宴」。

10. ホータン出発

S1930.12.07ホータン出発「サカ語写本12枚をふくむドモコ遺跡出土文物が届けられる。ロブ泊」、S1930.12.08前進「役場で別れの挨拶、百科事典に記載された精絶（ニヤ遺跡）を紹介してくれた。閲兵して出発。ベシュトグラク泊」、S1930.12.09前進「チラ（策勒）入り口で兵士らの歓迎を受ける。アフラッ・グルに赤痢の薬与える。チラ泊」、S1930.12.10前進「県長による出発式、軍楽隊演奏のもと閲兵。ラクダ隊は夜11時45分に到着。ドモコ泊」。この数日の閲兵などは新疆省金主席から各地への前進同意通知とスタインの“Sir”名誉爵位への表れである。出発式や閲兵は猛烈反対姿勢の中央学术界からしたら考えられない反国益行為であろう。

S1930.12.11ドモコ滞在「前日遅く到着のため休養。宝搜し屋から遺跡について情報収集。深夜まで手紙書く」。ここドモコ（ダマゴウ）⁽¹²⁹⁾でもスタインの古代遺跡情報入手は現地の「宝搜し屋」などからであった。S1930.12.12滞在「風邪で発熱、部屋に閉じこもる。手紙書く」、S1930.12.13前進「風邪よく眠られず。マラカラガン近くで土偶用漆喰残片・フェルト製靴底・骨製刀柄などを見つける」、S1930.12.14前進「マラカラガン近くで仏塔発見、仏像など検出、監視人から動かすことに反対されるが、ケリヤ県長へ持っていくことで決着。足がふらつく。マラカラガン泊」、S1930.12.15前進「オトロヨル遺跡観察。疲労と風邪で夕方6時就寝。アチマ泊」、S1930.12.16滞在「風邪ひどく寝て休む。郵便袋に金主席より発掘禁止の手紙。ラクダ使いのクルバンがドモコからもどり一包みの写本と漆喰飾り板・肩から上の菩薩像を持ってきた。25両で購入」。

スタインは「金主席よりの発掘禁止の手紙」に接しても何も記していない。よほど体調不良であったと思われる。「宝搜し屋」から文物を購入している⁽¹³⁰⁾。

S1930.12.17前進「風邪ひどく再び発熱。トガラガル泊」、S1930.12.18前進ケリヤ着「重い風邪と咽喉炎。イブラヒム・ベクが出迎え。監獄で苦難をな

めやつれて見るかげもない。家へ見舞う。ケリヤ県長の部下が招待所や政府筋の家に泊まるよう誘ったが、実質『留置場』と思い断る。ケリヤのアクサカル宅泊」。

C1930.12.19行政院から省政府への電文「ビザを取り消した、即日出境を命令」。国民政府文官処が中央研究院へ「国民政府がすでにビザを取り消し、即日出境を命令した」を連絡して（C1930.12.03）から16日後の新疆省政府への電報。どう解釈できるのだろうか。

11. ケリヤで療養

S1930.12.19～26ケリヤ8日間療養「気管支炎でやむなく療養、最高38.6度。苦勞しながら英総領事へ手紙。イブラヒム再度投獄情報に心痛。当地で自分を待っていた英駐中国公使9月28日付手紙に発見物は今後の課題と言及あり。26日に返信を出す」。9月28日からすでに約3ヵ月経過しての情

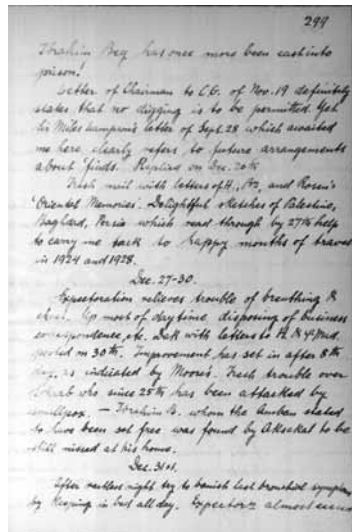


図42. 気管支炎でやむなく療養
1930年12月19～31日付日記（部分）



図43. 新疆省金主席の「厳密に防備する」
民国19年（1930）12月宥（26）日付密電

報である。その頃は省政府から行政院と外交部へ密電「遊歴許可と発掘禁止」(C1930.09.27)、省政府からカシュガル行署へ密電「入境許可と行動制限」が発出された(C1930.09.27)時期である。ランプソン公使は「発掘は交渉しだい」と考えたのであろう。

C1930.12.20新疆北京弁事処から省政府金主席への公函と回答「出境を命じる」、C1930.12.26省政府金主席から行政院蒋介石院長への密電「厳密に防備する」。従者は2人しかいないとも記されている。

S1930.12.27 ~ 30ケリヤ4日間療養「呼吸も楽になり快方に向う。アレンなどへ手紙。イブラヒム釈放されたと聞く」。記録魔ともいえるスタインが約10日間殆ど書かない。健康状態とともに「発掘禁止」で過去の栄光が否定されることへの心理状態も重なっていたと推測できる。

C1930.12.28張鴻升から省政府金主席への代電「ホータンでの活動報告」、C1930.12.28行政院から省政府への特急密電「活動停止と即日出境を命令せよ」。行政院から省政府へ「ビザを取り消した、即日出境を命令」(C1930.12.19)とほぼ同様内容である。後者は文末に「…行政院勘印」と記され、行政院が勘(28)日に発信したものであり、その後に「民国19年12月30日到(着)」と受信日が記されている。わずか9日での再発信に行政院側の新疆政府側が実行しないことへのいらつきが読み取れる。

C1930.12.29教育部から行政院への呈上書「訪問目的と省政府の調査事情」。本史料の発信者は「兼理教育部部長職務蔣中正」・「政務次官李書華代行」とタイプされ、それぞれ押印されている。蔣中正とは中華民国主席蒋介石(介石は字、中正が本名)である。史料には呉金鼎「斯坦因敦煌盜經事略(スタイン敦煌での經典盗み出し事案概要)」が添付されている。スタインの第一次から三次までの報告書から関係部分を引用し王道士を説得する様などが記されている。この「斯坦因敦煌盜經事略」は古物保管委員会による1930年12月(日記載なし)「スタイン来華の背景と目的についての報告」(前述)にも添付されている。C1930.12.31省政府金主席から行政院への密電「速やかに出境させよと各地方政府に命令した」。12月28日付け行政院「即日出境を命令せよ」への返電である。C1930.12.31省政府金主席からカシュガル馬長官への密電「出境命令を英総領事へ伝達し発掘あれば持ち出



図44. 行政院の「軍路測量の陰謀…」
民国19年（1930）12月世（31）日発信密電

し制止し押収せよ」、C1930.12.31行政院から省政府金主席への密電「即日出境命令」。行政院から省政府への「即日出境命令」は3日前（C1930.12.28）にも出されている。各方面からの圧力がよほどであったと判断できる。「古物発掘と軍路測量の陰謀、国防と學術を擁護するためビザ取り消し」ともある。スタインは各地で詳細な測量を実施している。「軍路」測量の意図はなくても、疑われるのは当然であろう。第二次新疆探検報告書には図45のようなほぼ新聞大の測量図が94枚添付されている。

S1930.12.31ケリヤ療養「アレンからの手紙読む」、S1931.01.01～02療養「回復遅い。県長來訪」。

C1931.01.03カシュガル馬長官から省政府金主席への電文「ケリヤ・カラシャル經由ウルムチへ向かう」。

S1931.01.03ケリヤ療養「やっと10月の勘定報告書作成の気力でてくる」、S1931.01.04療養「終日無気力。16日ぶりの外出。役所を訪ね陳県長に馬を雇いたいなどと話す。張（監視人）も熱心に説明した、彼に昨日渡した金によるものかも知れない」。スタインは監視人懐柔にとりかかっ

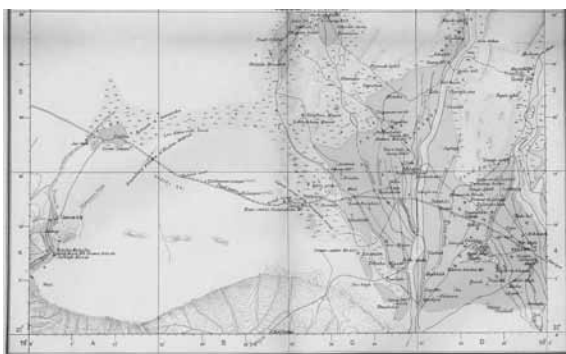


図45. スタインの測量図、ホータン周辺（部分）
第二次新疆探検報告書より転載

ている。ケリヤの陳県長は排他的愛国主義者だったと言われている。

C1931.01.05省政府から行政院への密電「活動停止と出境を促すことを沿線各県へ命令した」。

S1931.01.05 ケリヤ療養「アレンやAbe（安部？）などへ手紙書く」。

C1931.01.06省政府金主席からカシュガル馬長官への密電「極力早い出境を催促せよ」。両国の外交問題に発展しないように「面倒を起こさないために婉曲的言葉で出来るだけ早く…双方の間が気まずくならないよう…」とある。C1931.01.06省政府からヤニシャル県への電文「ビザを取り消し、帰国を命ずる」。

S1931.01.06ケリヤ療養「帳簿整理。読書」。スタインは大量の本を持ち込んでいる。

C1931.01.07カシュガル馬長官から省政府への密電「ホータン行署などに出境命令を伝達した」。

S1931.01.07ケリヤ療養「県長の小宴会に出席、ニヤで（遺跡調査のため）更に多くのラクダと人夫が必要と説明。2週間の節食後の馳走攻めで消化不良」。

スタインは「ニヤ調査で多くのラクダと人夫が必要」、新疆政府側は「各所に出境命令伝達」（C1931.01.07）と、まったくかみ合っていない。

C1931.01.08省政府金主席から行政院への密電「期日を限って出境させよと命令した」。

S1931.01.08ケリヤ療養「12月の勘定書作成。出発準備。県長来訪。英総領事へ次の連絡地はエンデレと手紙」。20日間療養滞在、しかも状況好転せず、心情いかばかりか。

12. ニヤ遺跡「発掘」

S1931.01.09ニヤオアシス（尼雅・現在の民豊・ニヤ遺跡との混同をさけるため本論ではニヤオアシスと表記＝前述）へ出発「病癒え出発。監視人にチップ。ボグラクム・マザール砂丘先の大きなバザール先泊」、S1931.01.10前進「イエスユルゲン泊」。

S1931.01.11前進ニヤオアシス着「寒風吹きだす。宿泊する家を1時間探し回る。ラクダ隊夜11時着。夕食0時30分、夜中1時就寝。ニヤオアシス泊」。

C1931.01.12省政府金主席からカシュガル馬長官への密電「即時出境させる催促命令」。新疆政府が下部機関に命令してもスタインに伝わらない。政府の弱体ぶりが表れている。

S1931.01.12ニヤオアシス滞在「ラクダ隊の遅延組は夜中2時から3時に到着していた。人夫やラクダ・飼料の調達で一日中走り回る。ケリヤ県長の手先が何かと邪魔をする。張鴻升は一切のトラブルは南京の妨害に帰結すると」。

C1931.01.13省政府から教育部への指令「沿線各県に考古活動を阻止し出境を促す命令済み」。

S1931.01.13ニヤ遺跡へ前進「出発間に英総領事からの手紙届く、発掘禁止命令には砂を動かす程度は含まないことを役所側も承知したと。この助けがもう一度奮い立たせた。11時いよいよニヤ遺跡へ進入開始」。

この「発掘禁止命令には砂を動かす程度は含まないことを役所側が承知した」は、新疆政府が文件を出したわけではなく、現地役人レベルの口頭によるものであろう、事の重要性からして何ほどの効力もないことは英総領事も十分理解していたと思われる。が、“Sir”である栄光の人スタイン、しかも70歳を目前にした老人の病をおしての「古物収集執念」への精神的応援として、また職務を果たしていることを上司に示すためにも、上記のようにスタインに連絡したのであろう。

S1931.01.14前進「身にしみる寒い夜。華氏零度（摂氏零下18度）以下。ヤンタキシャワルの氷結河床の近く泊」。

C1931.01.15国民政府文官処から中央研究院への公函「省政府がすでに即時出境を命令した」。確かに新疆政府は前述のように下部機関に命令している。しかしそれが英領事館あるいはスタインに伝えられたかを新疆省政府は確認していない。混乱期の中国にあって組織の緩みと混乱が垣間見える。

S1931.01.15前進「沙漠での水を確保するため結氷を切り出す⁽¹³¹⁾。イマー

ム・ジャファル・サデック・マザール泊」。この地名は「偉大なジャファル・サデックの墓」を意味し、西域南道一帯のイスラームの聖地である。民豊隆起帯の丘にあり、その麓に巡礼者用の宿舎がある。スタインは第一次探検1901年時よりさびれていると記している。

S1931.01.16ニヤ遺跡調査「タンク6個とバッグ8個への水詰め込み作業などで手間取る、ラクダ17頭で12時20分出発。ブッシュ帯と胡楊林を通る。1901年キャンプ地？泊⁽¹³²⁾」。出発が遅れるのはラクダに荷物を積み込むのに時間を要するためである。この辺りはまだ沙漠の縁にあたりタマリスク堆で進路を妨げられる。

E1931.01.17・CE32/24/23/2英公使館参事官から英北京大使館イングラム氏への配布厳禁暗号電報「スタインの旅行許可証は、貴重な遺物を発見し持ち出すことがあるという根拠で取り消されたと中国外交部から正式通告があった。主な論拠は約200万^{ママ}ドルにも上る不要と思われる額が供与されている、その一部がインド政府調査部より供与されているのは文化目的以外がある、前歴での敦煌からの写本持ち出しを報告書で自慢している、発見物はハーバードと大英博物館・インドへ行く取り決めである。(昨年)8月末スタインは中国の許可なく如何なる発見物も持ち出さないと公式に保証をする用意があるとインド政府はランプソン公使に通知した。米国公使と本件を協議したが指示がない限り、これ以上のことをする気はないようだ」。「Ⅲ.アメリカの憧れ」で紹介した古物保管委員会の「スタイン中華来訪の背景と目的についての報告」(C1930.12.日記載なし)では200万元とされていたものが、本史料では200万ドルになっている。原因不明。

S1931.01.17調査「宝捜し屋が捨てたであろう文字入り木簡32点・文字がかすれた木簡8点・封泥押印ある木簡2点を収集。古代橋遺構に到着。消化不良と呼吸困難に苦しむ。1914年キャンプ地泊」、S1931.01.18調査「よく眠れず。ブドウ畑遺構の写真撮影。N23・N24・N12などを観察。病状好転。N12付近にBC設置」。スタインはニヤ遺跡の遺構に「NIYA (尼雅・ニヤ)」の「N」と通し番号を付して、N14 (正確にはXIVなどとローマ数字を用いたが、本論では便宜的にアラビア数字で表記)などと番号している。

S1931.01.19調査「数日ぶりに熟睡。N24撮影。住居址で類人猿のような

中国人ガードマンが大きな壺（高86cm・直径71cm・口径27cm）を掘り出した。N25は以前と変化なし。N26撮影。日干しレンガ計測。N26-a模式図作成。N11観察。N26で砥石と石臼を検出。BC泊」。三次にわたる発掘でスタインに「輝かしい栄光」をもたらしたニヤ遺跡にようやくたどり着いた安堵感からの熟睡であろう。「類人猿のような中国人ガードマン」と書いている、よほど嫌っていたのであろうが、蔑視しているようにもとれる。彼自体が「被差別民族」として苦しんだことを忘れ、列強国市民となって約27年の驕りであろうか。

S1931.01.20調査「熟睡。N12西北部観察。N17～N20附近で五珠銭・矢尻・ビーズなど遺物収集。N14模式図作成、パノラマ写真撮影。N14とその近くを徹底的調査方針。N15・N16・N17～N20群通過。張が黒色石（研石）を拾い上げる。N14とその北側の遺構を『完全にクリーニング』するのが現在の目標。テント北で五珠銭収集。BC泊」。

スタインは“complete cleaning”と記している。「発掘禁止」を意識してニ

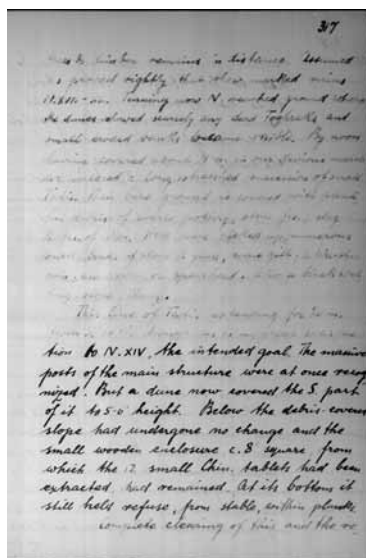


図46. 最終行に「完全清掃」
1931年1月20日付日記（部分）

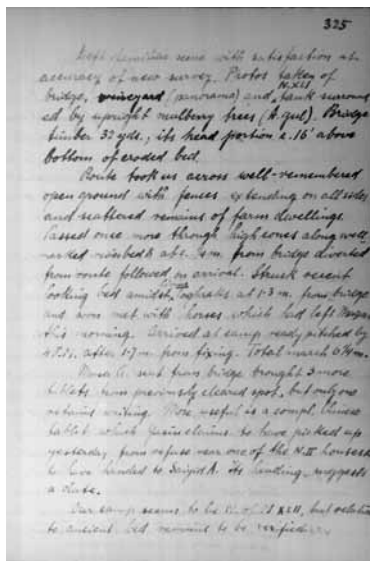


図47. 下3・4行目に「ある期日を連想させる」
1931年1月24日付日記（部分）

ヤオアシスで読んだ英総領事の手紙「発掘禁止命令には砂を動かす程度は含まないことを役所側も承知した」(S1931.01.13)を拠り所としたい気持ちの表れであろう。考古学上は「発掘」と「試掘」は区別されている。中国でも「発掘」と「清理」を使い分けている。実体的には両者の境界は見かた次第である。前述したヘディンと中国との西北科学考察団の協議書第13条にも「発掘は行わない」とする一方で「小規模の発掘は双方団長が協議して行う」とある。筆者も中国でその区分の「ご都合的使い分け」を体験している。後述する林教授もスタイン「発掘」としている。監視人である張さへもこの日遺物を掘り出している。

S1931.01.21調査「アブドラ・カファルが3人を連れて夜明け前に出発し、N14のゴミ山を“クリーニング”に行った。自分自身は丸一日テントで発見



図48. 当時の発掘は「文物を得るために掘る」であった
第二次新疆探検報告書より転載（スタイン撮影）

t no finds of interest. Accordingly, b
with a good conscience. My renewed
thern extension of the area occupied
Niya or *Ching-chüeh* 精絶 and had
n as the contemporary terminal course
and fully set forth in *Serindia*,²⁴ reg
onditions that has taken place since its

図49. ニヤ遺跡と「精絶」の関係に言及
第三次新疆探検報告書より転載

物の荷造りや日記を書く。こうすればガードマン（監視人）たちを引きつけておくことが出来、現場へ出かけ調査に介入できない。『セリンディア』（第二次調査報告書）記載のあらゆる地点を東へ約2マイル動かす必要あり。木簡などいくつかの遺物収集。N13以北にはもう遺構はない⁽¹³³⁾。BC泊」、S1931.01.22調査「今日はしっかりと心に刻みつける価値ある一日。8時15分、ガードマンたちが起床前に出発。N6・N5・N15・

N2・N1・仏塔など調査。N3を“クリーニング”。漢文本簡25点など遺物多数収集。BC泊。「今日はしっかりと心に刻みつける価値ある一日」とは漢文本簡25点などの収集を指していると思われる。S1931.01.23調査・南下「アブドラ・カファルがN2遺構群の2遺構を“クリーニング”。午後3時7分南へ移動。不明野営地泊」、S1931.01.24調査・南下「N39模式図作成と撮影。N38・古代橋観察。今回の測量で判明、『セリンディア』仏塔位置は西へ約1マイル（約1,600m）ずれている。古代ブドウ畑・N41・貯水池を撮影。前日のN2調査で従者がある期日を連想させる漢文本簡収集。ほかに数枚の木簡収集。N42北泊」。

ニヤ遺跡は「西域36国」のひとつ「精絶国」に比定され定説化している。その有力根拠となっているのは、地元の伝承とともにスタインが報告書でニヤ遺跡を「精絶」と取り上げている点である。林梅村北京大学教授も1995年大英図書館でスタイン収集遺物を調査し、第四次探検においてN2附近で収集したという遺物に「□漢精絶王、承書从□」と記された「木簡の写真」を確認し「1931年2月スタインはニヤ遺跡で最後の考古発掘を行った…N2附近で別の漢代遺構を発見し、『精絶』と地名のある漢文本簡を掘り出した…この木簡は我々が漢代『精絶国』とニヤ遺跡の関係を研究するのに、極めて重要な考古資料を提供した⁽¹³⁴⁾」と発表している。

この「漢精絶王」木簡はスタイン日記1月22日「しっかりと心に刻みつける価値ある一日」収集木簡あるいは24日「前日のN2調査で従者がある期日を連想させる漢文本簡」であろうか。スタインは監視人たちの起床前に出発したり、自分はテントで作業を行い油断させるなどの作戦で、「完全なクリーニング」や遺物の「拾い上げ」を実施し数十枚の木簡を収集した。中国西部に位置する新疆、その西部に位置するニヤ遺跡の1月末の朝8時15分は明けきっていない時刻である。

S1931.01.25南下「午後5時マザール帰着。終日消化不良に苦しむ。マザール宿泊所泊」。1月17日夜まで良く眠れなかったのが、18日ニヤ遺跡到達したら病状好転。そして、遺跡を離れた25日から消化不良に苦しむ。第四次新疆探検の目的であるニヤ遺跡「発掘」をおえ、貴重文物多数を手に入れ、ハーバード大学や大英博物館との約定を形だけでも果たすことが出来る安

堵感からの気の緩みによる消化不良であろうか。目的を一応達成したスタインは帰国へと傾いてゆく。収集した文物が押収されないよう帰路を考えながら。

S1931.01.26マザール滞在「各種整備。ニヤオアシスの人夫（12人）に暇を出す。新しい案内人を雇う。聖人墓へ行く。英総領事へ監視人から聞いた軍事的測量反対を含む状況説明と今後の調査の為に英公使へ働きかける必要性があると手紙書く。無理なら調査地変更も考慮。風呂へ入る」。

13. エンデレ遺跡調査

S1931.01.27エンデレへ前進「墓守らが見送り。迷惑千万な見張りでスパイの張鴻升は残ってゲームをしていて、一安心だ」。

C1931.01.28省政府からケリヤ県などへの代電「早期帰国を勧める」、C1931.01.28省政府金主席から行政院蒋介石院長への上申書とケリヤ県などへの密呈「即日出境を命令した」。この史料には国家の最高指導者への上申と地方役場への連絡が一緒に記されている。C1931.01.28張鴻昇から省政府金主席への代電「ホータン出発からケリヤで病氣療養など報告」。「マカラガンで仏像移動を止めさせた、写真は2点のみ許した、スタインだけでなく従者が天然痘になりつつある」と報告している（S1930.12.14参照）。

S1931.01.28エンデレへ前進「砂丘越えて疲労。サリグルーン泊」。

C1931.01.29省政府から行政院への密呈「即日出境を命令した」。C1931.01.28と同一内容である。

S1931.01.29エンデレへ前進「エンデレへの案内人見つける。タトル泊」、S1931.01.30 前進「ヤンタキチャワル先泊」、S1931.01.31前進「カシミールコル泊」、S1931.02.01停滞「サックスへ報告と南京の阻止について手紙書く。他へも手紙」、S1931.02.02前進「手紙数通到着、英総領事14日付け手紙で英公使が働きかけるようだと知り嬉しくなる。また新疆主席はあいまいな態度をとっていると感じる。コルチェオジル泊」、S1931.02.03 停滞「2時間40分かけて英総領事へ手紙書く。エンデレ仏塔探し。雪降り出す。サックスへの報告、アレンなどへ手紙書く」、S1931.02.04停滞「積雪2cm。丸一

日夜12時まで手紙書く。従者が仏塔を探し出す」。スタインは第一次・二次でもエンデレ遺跡⁽¹³⁵⁾を発掘している。S1931.02.05調査「約2ダースの手紙を従者に託す。イブラヒム・ベクの請け出し金18両を別便で出す。仏塔撮影。1906年クリーニングした遺構で遺物数点収集」、S1931.02.06チエルチェンへ前進「張鴻升（監視人）が測量作業を心配している。ジガダオジル泊」、S1931.02.07前進「非常に冷える。ショドン泊」、S1931.02.08前進「チンゲリキ泊」。

C1931.02.09省政府金主席から西北科学考察团中国側代理团长袁復礼（清華・北京両大学の教授）への復函「スタイン出境命令中、スウェーデン国王の勲章を拒絶」。「便りとともに化石と写真受領。スタインは帰国させるので貴団とはぶつからないので心配無用。勲章は誠に恐縮だが取り消しを」などと記されている。スタインと西北科学考察团との微妙な関係が読み取れる。勲章はヘディンが外交の一環で手配したのであろう。

S1931.02.09チエルチェンへ前進「霜で白一色。アケバイ泊」、S1931.02.10前進「強風と雪。結氷地面にテント。ケトメ泊」。

14. チエルチェン到着

S1931.02.11前進チエルチェン到着「雪積もる。アクサカル出迎え。ウルムチからの命令で張鴻升がいらつく。南京から出国要求のようだ。チエルチェン泊」、S1931.02.12滞在「夜通しあれこれ考える、ケリヤに戻れば大変な嫌悪を呼び起こすと思われるので、戻らないと決定。戻らずコルラへ行き、情報しだいウルムチへ行くかカシュガルへ戻るかを決めよう。この考えに張鴻升は最終的に賛成した。役場へ県長らを表敬。英総領事へ手紙書く」。

C1931.02.13省政府金主席から外交弁事処への訓令「即時離境を命令済み」。この史料で特記すべきは長さが293cm(縦24 cm)に及んでいる点である。本論「Ⅲ.アメリカの憧れ」で紹介した古物保管委員会1930年12月「スタイン中華来訪の背景と目的についての報告」を「12月19日付けで受け取り主権保全・至宝加護の考えに敬服し、強制的に出国させるよう命令済み

と返信した。外交弁事処にも送付する、了承いただきたい」とある。スタインは「英人爵士斯坦因」と記載され、“Sir”の称号が外交儀礼上一定の役割をえている。古物保管委員会の長文をふくんでいる。

S1931.02.13チェルチェン滞在「第三次探検1915年時にアクスで会った警察局長が来訪。手紙数通書く」、S1931.02.14滞在「ラクダを得るために県長を訪問。張は真面目にカシュガル馬長官への報告書を書いている。アクサカルと遺跡など参観」。

C1931.02.15張鴻升から省政府金主席への代電「ケリヤでの活動を報告」。ここでは「英国旅行者スタイン」と表現されている。ニヤ遺跡やエンデレ遺跡などでの活動について「漢代の精絶国（ニヤ遺跡）は唐代には砂に沈んでいた。^{ママ}5日間滞在し日ごと歩きまわり古建築を23カ所見た。…古跡が多く警備は難しかった。古物発掘や収集、測量などは当係員が確実に監視し阻止した。スタインは我が国の法令に服従でき決まりに外れる行為のない方であるが、ニヤ遺跡などでは測量を行い当係員が再三再四阻止したが、スタインは承諾しない。学問上の活動で別の目的はない、ウルムチに着いたら金主席に渡しても良いと反論した…」などと報告している。

スタインはニヤ遺跡での活動について前述のように「木簡多数収集（S1931.01.17）。五珠銭・矢尻・ビーズなど遺物収集。N14模式図作成、パノラマ写真撮影（S1931.01.20）。アブドラ・カバフルが3人を連れて夜明け前に出発し、N14のゴミ山を『クリーニング』に行った。自身は丸一日テントで発見物の荷造りや日記を書く。こうすれば監視人・張鴻升たちを引きつけておくことが出来、現場へ出かけ調査に介入できない。木簡などいくつかの遺物収集（S1931.01.21）。監視人たちが起床前に出発。N3を『クリーニング』。漢文木簡25点など遺物多数収集（S1931.01.22）。N2を『クリーニング』（S1931.01.23）。N39模式図作成と撮影。古代ブドウ畑・N41・貯水池を撮影。前日のN2調査で従者がある期日を連想させる漢文木簡収集。ほかに数枚の木簡収集（S1931.01.24）」と記録しているが、スタインの隠密行動は見事功を奏し、これら中国側禁止項目違反は張鴻升の報告には記されていない。あるいは知ってはいたが立場上書かなかったか。あるいはハーバード大学に出させた賄賂の効き目であろうか。

C1931.02.15チエルチェン韓天書県長と張鴻升から省政府金主席への代電「スタインのコルラからカシュガル経由で帰国する計画を報告」。スタイン滞在中のチエルチェンから県長と監視人の連名で出された本史料にはスタインの切望などが記されている。「国民政府の阻止に服従して帰国する



図50. 「戻るのは絶対困ると懇願した」
民国20年（1931）2月15日付報告（部分）

が、今では道のりが大半すぎたので、来た道に沿って戻るのは様々な困難が存在するので絶対困る、コルラ経由でカシュガルへ戻って帰国した方が良い、是非とも許可して欲しいと懇願し、今から帰途につく、今後は考古学上の活動は中止すると申し開きした。早く帰国させたほうが好いと思うので、15日に出発し先に進む予定だ。適当かどうか指示いただきたい」とある。

スタインの本音を略図で示したい。「道のりが大半過ぎたので」と主張しているが、地図を見れば一目瞭然で、「大半は過ぎておらず」コルラ経由の



図51. コルラ経由はチエルチェンから戻るより約470kmも遠い

7割弱である。道は若干変化（タクラマカン沙漠の外周とも言えるルートであり大きな変化は少ない）しているが、1931年から65年後の地図帳によれば「チエルチェンからカシュガルまでは約1,069km」であり、「チエルチェンからコルラ経由カシュガルまでは約1,542km」である⁽¹³⁶⁾。また「来た道に沿って戻るのは様々な困難が存在する

ので絶対困る」とは何を指すのだろうか。来る時はニヤ遺跡やエンデレ遺跡を調査するために沙漠へ進入したが、帰路はその必要はなく、タクラマカン沙漠南縁の主要道路の通行には特別の困難はない。彼にとっても知人の多いルートでもある。では何故「様々な困難が存在するので絶対困る」と張に言ったのか。推測できる唯一つの困難は「**ニヤ遺跡での秘密裏の収集品を持ってニヤオアシス經由ケリヤ地区を通過することによるトラブル**」である。

ニヤ遺跡「発掘」を終えて、マザールへ戻ったあと、ニヤオアシスを経由せず「砂丘越えて疲労」しながらエンデレ遺跡を目指した。マザールからニヤオアシス間には砂丘はなく緩やかな枯れつつある川沿いの「道」であり、若干遠回りであるが楽な通常ルートであるのに、通らなかった。ここにもニヤオアシス通過を避けたい狙いが感じられる。

もしニヤオアシス經由ケリヤへ戻れば、いかなる事態が待ち受けていたかもしれない。従順な使用人イブラヒムはケリヤ県長により投獄されている（S1930.11.29・S1930.12.18・S1930.12.19～26ほか）。ビザを取り消され、即日出境を命じられている身であり、その上に禁止されている「発掘」でえた文物を数十点所持していれば、たとえ外国人であっても外交官でなく“Sir”に過ぎないスタインの場合は身柄拘束さえ起こりえた。そうなっていたらイギリスと中華民国の国際問題に発展していたであろう。アメリカをふくめて。彼は「拘束」を恐れ、ケリヤ經由カシュガルへもどるコースでなく、コルラ經由カシュガル行きコースを選んだとも推測できる。

もっともスタインが「来た道に沿って戻るのは様々な困難が存在するので絶対困る」と監視人に発言したかは確認できない。しかし前述した日記（S1931.02.12）に「ケリヤに戻れば大変な嫌悪を呼び起こすと思われるので、戻らないと決定」とあり、実際そのルートに戻らなかったし、カシュガルへ帰着した後もニヤ遺跡収集品の国外への持ち出しに固執したことからすれば、張の報告のようであったと思われる。

15. チャルクリクへ向かう

S1931.02.15チェルチェン出発「ラクダ2頭とロバ11匹で出発。軍が閲兵式で見送り。ペルシア旅行を考える。アカチケン泊」、S1931.02.16前進「ラクダ4頭追加。第二次探検1906年時と第三次探検1913年時のガイドなどに会う。張鴻升の機嫌悪い⁽¹³⁷⁾。タトラン泊」、S1931.02.17前進「老人たちが見送ってくれる。風強い。タヒタペレ先泊」。

C1931.02.18西北科学考察団袁復礼中国側代理隊長から省政府金主席への公函「スタインの活動事情を知る」。

S1931.02.18前進「ペルシア調査旅行計画立案、予想通りにどうしても帰らねばならなくなったら場合は実行する。コルラから計画書を発送、6月前にはテヘラン（英大使館）に届くだろう。遅くとも11月にはグワダールから出発できる。それまでマルゲ（スタインがこよなく愛したカシミールの夏の幕営地）で行う仕事も考えた。夜12時30分から食事。アキタブランガル泊」。

前述したハーバード大学との取り決めに「アジアの何処でも可」を入れていることからしても、第四次新疆探検が目論見通り進展しないかもしれないと予測していたであろうが、あれほどの執念（第四次探検でも大々的成果をあげたい）で入国前やカシュガル・ホータン・ケリヤでの待機にも耐えたスタイン。ニヤ遺跡「発掘」での文物収集成果（第三次までとは比較にもならないが）へのわずかな満足感からか、ペルシア調査への気持の切り替えの速さには驚かされるが、あくまで「生涯探検」を続けたいという執念は感動的でさえある。S1931.02.19前進「凍土に井戸を掘るも上手くいかず」。

16. ビザ取り消し出国命令を知る

S1931.02.20チャルクリクへ前進「ケリヤ経由の英総領事1月31日付手紙で、南京政府によりビザを取り消され出国を命じられたことを知る。チャッパンカルデ先泊」。ビザ取り消し出国命令さえ予測していたようで動揺は

記されていない。国民政府文官処から中央研究院への「国民政府がすでにビザを取り消し、出境を命令した」連絡（C1930.12.03）、行政院から省政府への「ビザを取り消した、出境を命令」連絡（C1930.12.19）からおおよそ2ヵ月後にスタインへ伝えられたことになる。12月3日スタインはホータンに滞在し「沙漠調査反対を受けるも、最終的にケリヤまで前進しそこで決定することに」と記し、12月19日からはケリヤで病氣療養し「苦勞しながら英総領事へ手紙。イブラヒム再度投獄情報に心痛。英駐中国公使9月28日付け手紙には発見物の処置は今後と言及」と記している。

S1931.02.21前進「馴染みたちが来て心やすらぐ。葡萄園など見学。ワシ・シャリ泊」、S1931.02.22滞在「一日中安らかに仕事。手紙数通書く。英総領事へはビザ取り消し連絡を受けたとき既に心構えが出来ていた、コルラ経由でカシュガルへ戻るのに丁度良いと釈明した。返信先をスリナガルに変える」、S1931.02.23前進「イルリキ先の穴居人小屋泊」、S1931.02.24前進チャルクリク着「第二次探検1906年楼蘭調査の馴染みの消息に感慨。チャルクリク泊」、S1931.02.25滞在「英副領事などへ手紙、孫文の信奉者の県長を表敬。県長が夜に答礼来訪。激烈なブラン（砂嵐）吹く」、S1931.02.26滞在「英領インド帝国の外務・政治長官へベルシア調査旅行の手紙起案。遺跡で県長から写真撮影とめられる。県長の夕食会に張鴻升と参加」、S1931.02.27滞在「出発準備。ホータン・カシュガル・ウルムチの貨幣が混在し面倒。測量員が経度観測。水不足などで漢族の移住者はほとんど流出」。

17. コルラへ向かう

S1931.02.28チャルクリク出発「ラクダ19頭とロバ32頭で出発。カラバレ泊」、S1931.03.01前進「追記：緯度観測の結果クルガンの緯度は北へ51秒動かすべき。クルガン泊」。スタインは測量学校で学んだことからか位置関係には病的なほど細かく、随所に測量結果が記録されている。通過地帯の地形や植生についても延々と記されている⁽¹³⁸⁾。

C1931.03.02西北科学考察団袁代理団長から省政府金主席への公函「考古活動阻止に尽力を」。

S1931.03.02コルラへ前進「本日の前進距離22マイル（35.4km）。トクム南泊」。

C1931.03.03省政府金主席から西北科学考察团袁復礼代理团长への復函「考古活動を阻止する」。前日の連絡への返信である。

S1931.03.03コルラへ前進「身を切るような北東寒風。アラハン泊」、S1931.03.04前進「水不足で過疎と化した。カルダイ泊」、S1931.03.05前進「暖かい一日。ヤルグズトギラク泊」、S1931.03.06前進「肌をさす木枯らし。結氷した池の水が美味い。小規模な兵站らしき城壁を観察。チケンリク泊」、S1931.03.07滞在「のんびりと心静かな一日。手紙や修理」、S1931.03.08前進「道はずれて進み張鴻升を激怒させる。スμμα泊」、S1931.03.09前進「村長に喜び迎えられる。クズレクマハッラ泊」。

C1931.03.10省政府金主席からチエルチェン韓県長などへの代電「2月15日付連絡のコルラ経由カシュガル行きを許可」。2月15日の「コルラ経由でカシュガルへ戻り帰国する。適当かどうか指示いただきたい」への回答である。まことに妙な時間差である。

S1931.03.10コルラへ前進「荷駄隊2時30分出発。カシュガルへのコース検討。2月20日に受け取った英総領事1月31日付手紙（南京政府ビザ取り消し出国命令）を書き写す。ウルギコル泊」。荷駄隊はなんと深夜2時30分出発。どう理解すべきなのか。

C1931.03.11省政府金主席からコルラ・カラシャール・クチャ・アクス県などへの代電「沿線測量・製図・発掘を禁止」。監視人張からの報告（C1931.02.15）に基づき「ニヤ遺跡などで測量をした、すでにコルラ経由でカシュガルから出境するためそちらへ向かっている、測量と古物発掘をさせてはならない。もし携帯していたら差し押さえること」とある。C1931.03.11省政府金主席から北京弁事処張処長らへの公函「近日中に出境と見当」。本史料では「ビザが取り消され、監視人が行く手を阻むようにしている。スタインは憤りが積もって重病になりケリヤでほぼ1ヵ月間起きられなかった」と記載されている。スタインは疲れからか前年12月からこの年1月にかけて気管支炎で療養したが、本史料では「憤りが積もって」とされている。C1931.03.11省政府金主席からチエルチェン韓県長への電文

「2月15日付連絡のコルラ經由カシュガル行きを許可」。2月15日の「コルラ經由でカシュガルへ戻り帰国する。適当かどうか指示いただきたい」への回答である。まことに妙な時間差である。

S1931.03.11コルラへ前進「荷駄隊3時出発。ヘディン楼蘭発見時の案内人エルデックに偶然出会い、ヘディンが再び来ていることを教え、金を少し渡す。荷駄午後6時着。タイズ・コル湖泊」。この日も前日も荷駄隊を深夜に出発させている。後日にも深夜に出発させている。異常ともいえる深夜出発は「大変な嫌悪を呼び起こすと思われる」ケリヤから一刻も早く離れ、一日でも早く治外法権の英領事館へ駆け込みたいとの焦りであろうか。一方でコルラでは数日滞在しているのも妙である。エルデックは中国側から楼蘭発見者とされている（注67参照）。S1931.03.12前進「激しい北西の風のなかテント張る。ヨルバルシバシ泊」、S1931.03.13前進「消化不良と咳に苦しめられる。ロプ人の集落チョン・コル泊」、S1931.03.14前進「最初のストーブの要らない夜だった。県長を表敬訪問。県長が答礼来訪。カラクム泊」、S1931.03.15前進「荷駄隊は前夜から先行。道程の数値は1915年と合致する。シネガハ泊」、S1931.03.16前進コルラ到着「英総領事への暗号電報の下書き。コルラ県長を表敬訪問。県長部下3人に守られてテントへ帰る。張鴻升へ帰途につくつもりと知らせた。コルラ泊」。

スタインはこの日、監視人張鴻升へ「帰途につくつもり」と伝えたと記しているが、彼が「ケリヤに戻らずコルラへ行き、情報しだいでウルムチへ行くかカシュガルへ戻るかを決める。張はこの考えに最終的に賛成した」とした時点（S1931.02.12）で、張鴻升はスタインの本音「ウルムチには行きたくない」を読み取り、現地政府へ報告しそれが省政府への連絡「コルラからカシュガル經由で帰国する計画」（C1931.02.15）となったと考えるのが妥当であろう。

S1931.03.17コルラ滞在「各種処理。荷駄隊などに手当て支給。駐屯軍指揮官を表敬。答礼に来た指揮官の求めに応じて少々の菓を与える。サククスへ状況説明の報告書き始める」、S1931.03.18滞在「深夜2時まで経度観測、ここは東経86度8分21秒。春が近づいた」、S1931.03.19滞在「カシュガルとウルムチからの郵便物に手紙も電報も入っていない。サククスへの報告書作

成継続」、S1931.03.20滞在「サックスへ報告書完成。Prince Oyama⁽¹³⁹⁾などへの手紙とともに発送。カシュガルやウルムチから情報がないことは英公使の働きが効果をもたらすと期待してはいけなことを示している。チェルチェンで引き返しの取り決めをした。来る冬の仕事の計画を立てた、ペルシアかパンジャブだ」。

スタインは病的とも表現できる記録魔であることは報告書や各種書簡、そしてこの日記で十分理解される。通常であれば散逸してしまうこれらがこのように保存されていたのはスタインが家族や友人らに保管を依頼していた結果である。

18. クチャへ向かう

S1931.03.21コルラ出発「ラクダ隊前夜出発。すでに寝ていた時、ヘディン調査隊アンボルト博士突然来訪、夜中1時まで話す。起床するとすでに出発していた。再びアンボルト来訪。チム泊」、S1931.03.22「アンボルトの羅針盤作業を見る。チャルチ泊」、S1931.03.23 前進「エシメ泊」、S1931.03.24 前進「まる一晚激しい砂嵐。路上でアクス知事の馬車隊に会う。1908年と15年に会ったことがある。知事が出会った当時の情景を監視人張鴻升に話してくれた⁽¹⁴⁰⁾。ヤンギヒッサル泊」。23年、16年前に会ったと具体的に記憶しているとは驚嘆に値する。

C1931.03.25カシュガル馬長官から省政府金主席への電文「ビザの保留と遊歴を続けることについて外交部の許可否」。横書きの史料である。省政府から幾度も「ビザ取り消し出国命令」が発せられているのに、この問い合わせは政府の弱体ぶりを示すものといえよう。

S1931.03.25クチャへ前進「県長表敬訪問。礼儀正しく迎えられる。3発の礼砲で。経度観測。ブグル泊」、S1931.03.26ブグル滞在「修理と追加馬車の手配など。鄧県長を表敬し馳走になる。ドモコの遺跡へ行ったこともある、ダンダンウイリク・精絶（ニヤ）両遺跡のことも聞いたことがあるという。張鴻升がケリヤの県長らがスタインの活動を妨害したと県長に話す。夜県長が答礼来訪。その席上でも張はニヤ遺跡でのスタインの測量は

別に問題でないと県長に話す」。

アクス知事がスタインとの出会いを張鴻升に話したことが早くも効果を発揮している。これに対してスタインは26日の日記で「私を脅かしたことやニヤ遺跡などでのひどい仕打ちを忘れたのだろうか」と記している。

C1931.03.27省政府金主席からカシュガル馬長官への電文「遊歴を続ける許可指示を受けていない」。上記25日付問合せへの返信である。

S1931.03.27クチャへ前進「アンボルトらの見送りを受ける。クチャ郊外ヤンギアバド泊」、S1931.03.28前進「ハミ事変（金主席の弾圧に反発したムスリム農民蜂起）に関連した騎馬隊に遭遇。ヤカアリク泊」、S1931.03.29前進クチャ着「アクサカルらが出迎え。クチャ県長表敬、潘震（スタインの古い友人）の秘書だった。遅着のラクダ使いを叱責。クチャ泊」、S1931.03.30滞在「スウェーデン宣教師来訪。県長が答礼来訪。二人だけでドモコ・楼蘭両遺跡のことなど話し合う。ワッツ大尉（英駐カシュガル副総領事）3月20日付手紙と英駐中国公使館3月9日付電報コピーを受け取る。公使は中国側へ抗議しているが埒が明かない。王正廷外交部長は各種学術団体の反対を鎮めるために具体的な計画書を求めている。反対の根拠は、①200万両もの経費援助を受けている、②インド測量局の支援は絶対に文化のためではない、③セリンディア（第二次探検報告書）で自賛している敦煌文献の持ち出し、④収集文物をハーバードと大英博物館に分配する計画、また米国公使が米政府の命を奉じて支持しているなどと記されている。ワッツ大尉への返信は好転が見込まれる余地はないので、カシュガルへ引き返すと書く。もしかすると、もう一度険しく苦しく長い旅をして東へ向かって来た道をもどるしかないだろう」。

この日の記録は中国側の反対理由を明確に伝えている。最後の「もしかすると…東へ向かって来た道をもどるしかないだろう」はニヤ遺跡での文物収集が知られた場合の呼び戻しを警戒していると思われる。

語学の天才スタインは数カ国語を操った。中国語も度々個人教師につくも十分ではなかったが、この日県長と二人で遺跡について話し合ったことや各地の宴席などでおおよその意思疎通はできたようなので、日常会話程度は出来たものと思われる。

E1931.03.31・CE32/24/39/3ランブソン公使から英外務省への連絡「今朝王部長と面談した。スタイン卿からの12月25日付書簡によると反対の悩ましい矢面に立っているとあり、英総領事からの報告ではケリヤの古代遺跡で砂を取り除きたかったが妨害を受けたという。王部長はケリヤという地名を書きとめ、残念ながら何も知らないと言い、反対がどのように生じたかを説明した。スタイン卿は求めたが出来なかった中国人科学者を同行することなく、通りぬけさせて（ビザ発給）しまい、王部長は科学界と衝突してしまった。探検日程概要のような物をもらえば、科学界の面目を立て、なだめる程度のことはできると王部長はほめめかした。王部長は辿るルート of 正確な概要をスタイン卿が提供するのは無理だと十分認識していた。あのような困難な状況が今はもう起こっていないことを願った」。

この12月25日はスタインがケリヤで療養していた時期(S1930.12.19～26)であり、日記には26日に返信を発送とある。1月9日には病癒えニヤ遺跡に向かい、「発掘」を行い多数の木簡などを取得した。

S1931.03.31滞在「ワッツ副総領事への詳細な返事を書く。スウェーデン宣教師を食事に招く。勘定事務」。

19. アクスへ向かう

S1931.04.01クチャ出発「英国居留民やアクサカルらが見送り。キジルガハ千仏洞で亀茲語を撮影。ガルメ泊」、S1931.04.02前進「キジル千仏洞観察、切断された壁画が多い。破損はすでにゆゆしきところ達している。荷駄隊が先行しすぎて千仏洞を翌日再訪するチャンスを逸する。テレク泊」。これまでの探検で各地の遺跡で大規模な発掘を行い、敦煌からは購入という形で、大量の文物を持ち出したスタインが荒らされた石窟を見て「破損はすでにゆゆしきところ達している」とは二重基準と言えよう。S1931.04.03前進「5時間睡眠。城壁址観察。ベク（拜城）泊」、S1931.04.04ベク滞在「県長表敬訪問、喜んで援助するとの表明に感激。答礼来訪の県長に張（監視人）が旅行目的に心から賛同すると告げるのは、南新疆でのひどい仕打ちと大違いと嘆く」。

「ひどい仕打ち」とは発掘が禁止され撮影を止められたただことだろうか。あるいは従順な従者がスタインに協力したために逮捕投獄（監視人が関与したわけではないが）されたことを指すのか。S1931.04.05前進「復活祭。寒い朝5時起床」、S1931.04.06前進「延々と通過地地形の記載（これは毎日のこと）。ジョルガ泊」、S1931.04.07前進「4時起床。経緯度のズレが事細かく（これも毎日のように）。砂嵐。カラユルゲン泊」、S1931.04.08前進「土煙ひどい」、S1931.04.09前進アクス着「アクスカル出迎え。待ちに待った手紙約60通など受け取る。ワッツ副総領事からはウルムチへ行かずカシュガルへもどるのは賢明な駆け引きだと。英公使館転送の中国の新聞で自分が嘲罵糾弾されていることを知る。アクス泊」。

中国側の嘲罵糾弾を“The Times（タイムズ）”は1930年12月29日「“新”中国とオーレル・スタイン卿－追放要求」記事で紹介した。これに対して、スタインの親友アレンはスタインを擁護する内容の手紙を「タイムズ」に送り「オーレル・スタイン卿は中国に－編集長への便り」として1931年1月3日掲載された⁽¹⁴¹⁾。

S1931.04.10アクス滞在「手紙など処理。県長を表敬訪問。午後には県長が答礼来訪」、S1931.04.11滞在「上質な金属器3点など入手。駐屯軍長来訪。県長が再び来訪。20通ほどの手紙書きあげる」。



図52. 剥ぎ取られ痛々しい「初転法輪」壁画
キジル千仏洞第224窟



図53. 第四次探検から55年後のキジル千仏洞
スタインは1915年にも訪れている

20. カシュガルへ向かう

S1931.04.12アクス出発「カハングン泊」、S1931.04.13前進「砂嵐。ターン泊」、S1931.04.14前進「砂嵐やみ暑くなる。ヤイデ泊」、S1931.04.15前進「空が珍しく澄みきる。チャデルコル泊」、S1931.04.16前進「仏教遺跡数カ所を観察。1908年5月にも見たし、ルコックは1914年春に整理した。アブルマザール泊」、S1931.04.17前進「夕方再び激しい砂嵐。マラルウェシ近く泊」、S1931.04.18滞在「手紙書く。県長と軍長を表敬訪問。張鴻升や従者へ夕食をふるまう」。

スタインの「張鴻升や従者へ夕食をふるまう」記載は、第四次探検の日記中で初のことである。あれほど嫌っていた監視人を含めてのふるまい。カシュガルも近づいた安堵感の表れであろう。「みんなナイフとフォークで食事、ヨーロッパ生活様式の浸透」とイギリス勢力圏を実感した記述もある。

S1931.04.19滞在「郵便物の処理など心静かに仕事した一日。県長が答礼来訪。土煙空高く」、S1931.04.20出発「雨。カラカチン泊」、S1931.04.21前進「サックスからの困難は覚悟済みとの長い手紙に慰められる。オルデクリク泊」、S1931.04.22前進「ルーンコウ1915年第三次時と同一場所泊」、S1931.04.23前進「ハイズアワト1915年第三次時と同一場所泊」、S1931.04.24前進「沙漠的風景が一変し愉快な一日。カシュガル旧市街郊外泊」。敦煌莫高窟で王圓籙道士を「まるめこみ」（加藤九祚）大量の仏典などを持ち出した社交上手のスタインも、張鴻升には最後までを手を焼いたようで、この日「生意気盛りの大臣様（張）は豪華な広間を占拠した」（スタイン自身は果樹園に野営、張はその果樹園所有者の住居に宿泊）と皮肉を込めて記している。

21. カシュガル帰着

S1931.04.25前進カシュガル帰着「丘から廃棄された軍駐屯地を撮影、張が心配する。午前11時英総領事館へ帰着。英総領事とワッツ副領事の出迎

えを受ける。手紙や新聞が山のように待っていた。ウルムチから転送された3個の郵便袋も（途中までウルムチへ行くと表明していたので、そこへ送られたものであろう）。安らかで静かな夜、すべてを手紙類の閲覧に費やす。英総領事館泊」。

スタインが第四次探検のためカシュガルに到着したのは、1930年10月6日。ジリジリしながら滞留し目的地ニヤ遺跡を目指してカシュガルを出発したのは、11月11日。監視人の目を逃れながら、ニヤ遺跡「発掘」の目的は「部分的」に果たしたものの幾多の障害に阻まれ、ビザは取り消され考古活動禁止を命ぜられるなどの苦難をへての5ヵ月余りで「イギリス主権下」の英国領事館への帰還。夜は静かに更けていったことであろう。

22. 収集文物整理・調査継続認められず

C1931.04.26カシュガル馬長官から省政府金主席への電文「遊歴を続けることの許可否について」。この電文では「スタイン卿は昨日カシュガルへ着いたが、彼の話によればビザは取り消されていないそうであるので問い合

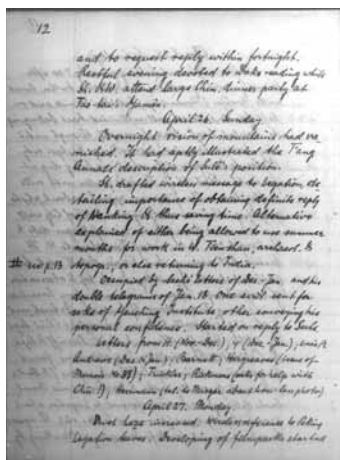


図54. 「許可をえて調査継続かインドへ戻るか」 1931年4月26日付日記



図55. 「旅行継続許可連絡は受けていない」 民国20年（1931）5月支（4）日付電文（一部破損）

C1931.05.02古物保管委員会張主任から行政院への公呈「追い出し主権を維持」。

S1931.05.02カシュガル滞在「砂嵐。潘県長と収集文物問題を検討。馬長官の大宴会に英総領事と出席、官界幹部は皆出席し西洋式宴会。張鴻升も招かれる。夜11時までつづく」、S1931.05.03滞在「激しい砂嵐。古物保管委員会の声明文と外交部王部長より公使への書簡への覚書起草。馬長官に見せる文物の目録作成。手紙届く」。

C1931.05.04省政府金主席からカシュガル馬長官への電文「遊歴を続ける外交部の許可電は受けていない」。カシュガル行署から省政府へ「遊歴を続けることの許可否について」問い合わせ（C1931.04.26）への回答である。

S1931.05.04カシュガル滞在「馬長官に文物見せる。可哀想（過去3回と比べて）な展示である。古物保管委員会の声明文への覚書作成継続。馬長官と相談して英総領事が省政府金主席へ目録とともに幾つかの文物を提出し持ち出し許可をえる作戦。また英総領事は中国が要求したら文物をどこへでも移動するなどの保証書を提出し持ち出しの許可をえる作戦。『小年中国』とその影響をうけたハーバード燕京の代理人（スチュアート学長を指す）が引き起こした非難告発書に心が痛む」。

「小年中国」、スタインはどのような感情でこのような表現を引用したのであろう。友人らへの手紙にも“*Young China*”と書いている。そこには大英帝国の国民としての驕りがあったかもしれない⁽¹⁴²⁾。

ハーバード大学が企画したスタイン第四次新疆探検は、学内でも反対があった。スチュアート燕京大学長らは昔のままのスタイン流収奪方式は時代が変化した中で通用しないと反対した。積極推進派のサックスは反対派への情報漏れを防ぐために、スタインと秘密裏に連絡しあうため、表向きとは別の連絡をする取り決め（E1930.01.04・CE32/24/10/1）により「一通は表向き、一通は内密内容」（S1931.04.26）の連絡をしていた。スチュアート学長は後に中国駐在のアメリカ大使となった。

S1931.05.05滞在「外交部覚書と古物保管委員会声明への覚書起草急ぐ。英総領事が文物を撮影、馬長官へ渡す見本も含めて」。

C1931.05.06教育部蔣部長職から行政院への呈上書「省政府へ即日出境を

厳命されよ」、C1931.05.06国民政府蔣中正（介石）から行政院への訓令「外交部に命じてビザを取り消した即日出境を促せ」、C1931.05.06国民政府から中央研究院への指令「外交部がビザを取り消した即日出境を促す、英国（航空測量）探検隊も注意制止」。

同日に発せられた3通の連絡には、前年12月3日の国民政府文官処から中央研究院あて発信「国民政府がすでにビザを取り消し、出境を命令した」、12月19日の行政院から省政府あて発信「ビザを取り消した、出境を命令」から既に約半年を経てもなお出境させられない苛立ちが表れている。

教育部の呈上書には「中央日報」などの記事にふれ「即日出境を厳命されよ、検査し、古物や写真を携帯していたら押収させよ」などと記され、国民政府の訓令にはスタイン即日出境とともに「飛行場建設調査のため英国航空測量の先遣隊が既にロンドン出発との報道…制止せよ」とグレートゲーム展開も記されている（注14・15参照）。

S1931.05.06カシュガル滞在「覚書清書10頁。木簡撮影。手紙書く」、S1931.05.07滞在「夜7時まで手紙書く。ルイス大佐（インド測量局長・第四次探検へのインド人測量員を派遣）あてに測量図など詳細報告4頁書く。時間を無駄にしてしまった、極度の疲れを感じる（この部分ハンガリー語）。



図58. 「英国航空測量先遣隊が既に出発と報道…」
民国20年（1931）5月6日付国民政府訓令（部分）

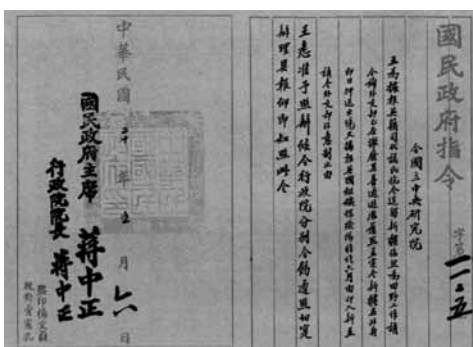


図59. 蔣中正（介石）名で発出された同様内容
民国20年（1931）5月6日付国民政府指令

英総領事とカラー写真について話す」、S1931.05.08滞在「覚書清書急ぐ。多数の写本撮影」、S1931.05.09 滞在「敦煌活動にもふれた18頁からなる覚書清書完了、英総領事の審査を受けた、英公使に郵送し外交部と古物管理委員会へ伝えてもらう」。

E1931.05.10・CE32/24/46/5 スタイン流の複雑な文脈からなる長文の上記「覚書」は1930年12月21日に古物保管委員会から英公使館へ届けられた声明文と1931年1月8日に中国外交部から英公使館に送付された覚書への「反駁書」であり、「英国駐カシュガル総領事館経由で英国駐北京公使館により通知された、オーレル・スタイン卿の中国外交部ならび到北京国立文物保存委員会（古物保管委員会）の声明文に対する覚書」と題して大英博物館に収蔵（20.4×33cm・13頁）されている。文脈をまとめ直し要点を簡条書きで記載する。丸数字は便宜的に付した。

- ①これらの申し立ては無責任で無節操な中国の報道を下地にしているようである。裏付けとなる証拠書類について論及が許されるようお願いしたい。私の学問的労苦と業績を十分に理解していない人達に間違った印象を作り出す可能性がある。申し立てでなされた攻撃は事実誤認によるものであることは十分に明らかである。もし申し立てが正しければ私の人格に関わってくる。古代中国の中央アジアでの功績を解明することでは誰にも引けを取らない学者（スタイン）の人柄に、そのような中傷を投げかけることは間違っていると、多分彼らは認めるようになるであろう。英公使の了解のもと、中国外交部と古物保管委員会に伝達されるようお願いする。
- ②種々の文明の交流地における三次にわたる探検は英領インド政府の指令による四つ折り11巻（地図を含めると13巻）の詳細な報告書で十分に解説し、現地での研究の必要性を訴えていて、更に補完し拡張する必要性を感じていた。
- ③現地調査費と報告書出版費・私の報酬をふくむ費用については、ハーバード大学10万ドルと大英博物館3千ポンド提供の申し出があり、南京でランプソン公使に詳細な支援依頼書を提出した。優秀な中国人研究者を希望することも明記した。公使同席のもと中国王外交部長閣下へ上記書簡で

述べた詳細を説明し、考古学目的の新疆と内モンゴル旅行を許可するビザを受領、この許可には必要な調査も含まれていると理解している、如何なる古代遺跡でも発掘出来ることは明確な了解事項であった。希望した中国人補佐確保は結果がでなかった。

- ④パミール高原で新疆入りを阻止されたが、公使の働きにより撤回された。ホータン北東にある追加調査が必要な沙漠の（ニヤ）遺跡へ到達するまでに南京の指令により発掘も地図作成も禁止された。反外国傾向の地元政府長が妨害効果を与えるために躍起になった。
- ⑤中国政府の事前合意なしに発見物を持ち出さないとの私の確約は公使が正式に伝達し、その当日に王部長はビザを無効にしないし、する意図もないと言明したというにも関わらず、ビザは無効にされ、退去を強く要求された。王部長より求められた詳細計画は、すでに英公使を通じて提供しているので、求めに従うことが賢明かどうかは熟慮する必要があった。ビザが無効にされた理由には、インド考古局調査部をインド調査部と間違えたり、インド調査部をインド国防省傘下にあると誤って記述したり、200万ドルという空想的金額や英・印・米などの新聞で報じられたということ以外に言及されていない。獲得古物はハーバード大学へ送られ、重複があれば大英博物館とインドに送られるという取り決めを私がしたという声明も不正確である。
- ⑥インド調査部員の助けを得て実施した測量は純粹に地理学目的であり、全て出版している。戦略的地点調査に関与したというのは根拠のない中傷である。
- ⑦発見された物品の最終的保管場所については有能な西洋人専門家の事前分析と出版が確保されることを条件に、すべて了解すると述べた。今回、人が持ってきた物や妨害を受けたにも拘わらず行きついた（ニヤ）遺跡で拾い上げた取るに足らない「発見物」も、すべて中国政府に報告しその処分については彼らの指令を待つだけである。これまでにこのように求められたことはなかった。
- ⑧全ての文物は大英博物館へ持込み専門家により完璧に整理され、国籍を問わず資格ある研究者は利用できる。仮にそれらがそのまま現地に残さ

れたとしても、自然の力か人間の手で破壊される運命であったことは間違いないだろう。仮に中国のある場所に送られたとしても、当時の一般的状況では、それらは放置か完全な損失の重大リスクに晒されていたことであろう。中国より遺物を持ち出すことに規制が当時あったかは、私には確証できなかった。古代遺跡での仕事は現地中国管理者の好意的姿勢で促進されたことは事実である。大英博物館のような施設に、不注意そのものの保存状況から文物を移すことが、声明文の用語を借りれば「営利破壊活動」と表現出来ないことを彼らはそのうちに認識するだろう。

⑨敦煌での完全に無知なのか真正直な道教僧が選りすぐりの物を譲ってくれたのは、彼の寺の益になるからだった。その後、ペリオ教授が取得物を中国人学者に見せた後、政府から残りを北京に移すよう命じられたが、金銭補償は敦煌王道士には届かず、大量の写本類も運送途中で私物化された。各地で私に買って欲しいとの申し出と符合している。私が報告書で記載したのは自慢からではなく、どのような状況下で取得したかとそれらが被った悲運を明らかにするためである。

⑩1930年6月2日に発布されたとする「遺物法」(古物保存法)について意見を述べさせていただく。その条項が実際に効力を発し、調査する上での回復不能な損失、とりわけ主に中国人の斡旋で近年蔓延する古物商売利益のための墳墓の無計画な発掘や略奪を阻止できることを熱望して止まない。

⑪私の労苦に精通する親友オックスフォード大学のP.S.アレン学院長が1月3日「タイムズ」で公開した書簡で中国側の申し立ては「余りにも奇想天外で馬鹿らしいだけでなく、全く根拠のないもの」と正しく表明した。

次の文言で締めくくられている。

1年前に私の再探検計画に対し、便宜の供与という形でなされた公式支援から離反した中国外交部が、その根拠として提示した誤った申し立てと不当な推論を、詳細に暴露せねばならないと思った。この残念な離反により被った損害は、現在の段階では少し触れるだけで明確である。私のこれまでの労苦の成果に精通している人々は、私が過去の



図61. 「スタインまだ新疆に、古物盗みと辺境探る」
「中央日報」民国20年（1931）4月25日

この日スタインは英公使館からの「調査継続許可かインドへもどるかの英公使館回答期限」を翌日にひかえ「にわかには帰国の思い」となった。記事はタイムズ北京駐在員

による「古物保管委員会がスタインなど外国探検家の中国での考古活動を阻止する」との紹介である。29日は30日の間違い、天才スタインも時にはミスをおかす。

C1931.05.11 行政院から省政府金主席への密電「強制的に出国させよ」。史料には「カシュガルで長期間とどまっていたのは何故か、もしか古物や写真などを携帯していたら差押えよ。測量についても秘密を探ることがないよう制止せよ。英国（別の）探検隊はインドから新疆へ入り、航空測量調査を行うとの報道がある。スタインの行動と関係あるのは明らかである。新疆入りを中止させよと外交部に命じた。秘密裏測量を防止せねばならない」とも記されている。

S1931.05.11 カシュガル滞在「馬12頭を総額575両で売却。覚書（反駁書）が英公使館経由でハーバード大学や大英博物館・国際東洋学会議（第18回・1931年9月オランダで開催）へ配布されるよう要請」。

C1931.05.12 行政院から教育部への指令「省政府へ即日出境を命令せよと伝達した」。

S1931.05.12 カシュガル滞在「諸事多忙。英総領事が写本撮影。ニヤ遺跡での写真現像。手紙書く。総領事館の花園散策で一休み。帰路の荷駄重量は約3,500ポンド（約1,580kg）」。

C1931.05.13 行政院から省政府等への令「出境を命令し取得文物と写真を差押えよ」。

S1931.05.13 カシュガル滞在「両替。スウェーデン人宣教師を訪問」。

S1931.05.14滞在「ハッサンと別れ、30年続いた交流はこれで終わる。サックスへ手紙、覚書同封。張鴻升来訪し出発日を知りたがる。郵便袋発送」。ハッサンは第一次探検以来のラクダ使い。

C1931.05.15国民政府文官処から中央研究院への公函「出境を命令し取得文物と写真を没収する」。

S1931.05.15カシュガル滞在「木簡などを包装しトランク2箱にあふれるほど詰め込む。荷物整理。極悪非道の張鴻升の同行を望まない」。全てを事細かく記録するスタイン。この日記も同様に微にいり細にわたり日々の出来事が記載されている。本論に拾い上げているのは数十分の一程度である。そのスタインがトランク2箱に詰め込んだ文物をどうしたのかの記載は全くない。何故なのか。「中国人の同意を得る前に総領事館に置いておくつもり」とした(S1931.05.01)3日後の5月4日「馬長官と相談して英総領事が省政府金主席へ保証書とともに提出し持ち出し許可をえる作戦」と記されているのも矛盾している。

これらの文物はこの方針どおり総領事館へ「全て」を預けたのだろうか。後に紹介する史料(C1932.09.05)には「一点一点確認したが、リストの番号と古物の番号が同じでなく、正確な確認は出来なかった」とある。後述するように文物は総領事館へ預けられ、その後、ウルムチへ移動され、北京へ移動するとの史料がある。スタインが残した英文のリスト以外にも収集文物があったのではないかという疑問は残る。そのような噂も聞く。すべて預けたと言えるし、一部を持ち出したとの説も否定しきれない。先行研究『斯坦因第四次中国考古日記考釋』の作者王冀青も「スタインが去る時、文物を携帯せず出境したことは、現在基本的に肯定出来る⁽¹⁴³⁾」と微妙な表現で記している。

C1931.05.16省政府金主席から行政院への電文「強制的に出国させる」。C1931.05.11への返信である。この中に「スタインはケリヤからカシュガルへ連れ戻され」と省政府側の立場を強調した表現になっている。さらに「スタインがカシュガルへもどってから強制的に出国させようとした時、彼は怒りが積もって病を発した…度々電報を発して、ビザは取り消されていないと滞在を企んだ…18日に出発する予定」とあるが、スタイン日記にはカ

シユガル帰着後に身体不調の記載はない。中央への言い訳のためスタインを病気にしたものと思われる。

S1931.05.16カシユガル滞在「数通手紙書く。アンドリュースへは覚書同封。川辺を最後の散策」。カシユガル帰還以降、関係先や友人たちへ中国側への反駁書の写しを同封しているところに、スタインの苦悩が読み取れる。中国側の主張が3月30日の「タイムズ」を通じて、イギリス（を通じてヨーロッパ各国）の関係者に伝わり、彼の「輝かしい栄光」に傷がついたからである。いわれなき被差別民族の孤独が再び強くなってきたのであろう。S1931.05.17滞在「マカートニー前総領事らへ手紙書く。英総領事と馬長官へ挨拶に行く。バッテリーや水タンクなどを預ける。英総領事による送別宴、馬長官はじめ潘県長・郵政局長・無線台長・税関幹部多くの官吏や張鴻升が出席、総領事は『スタインは中国の一番良い友人』と乾杯挨拶、自分は『私たちの新疆の平和と秩序を守っている官吏たちへ敬意を表す』と答礼挨拶。経緯度観察」。傷心スタインを英中出席者が慮るかのよう
に4時間の大宴会であった。

23. さらば中国

S1931.05.18ギルギットへ出発「荷駄は新しい馬21頭で。職員に別れ、『さらば』。英総領事と出発、ハッサンらが途中まで見送り。手紙書く。チョンテレク泊」、S1931.05.19前進「英総領事への礼状など書く。タシマリク泊」、S1931.05.20前進「総領事館から転送された手紙類受け取る。キシラク泊」。

E1931.05.21・CE32/24/47/3上述（S1931.05.17）の活動内容にふれた英総領事から英国公使への親展「報告済みスタイン卿5月18日インドに向けて出発を参照されよ。17日卿とカシユガル長官を訪ね、（インドへの）辺境行程への配慮要請。新疆省主席から卿のビザがまだ有効との連絡があったかを長官に再度訊ねた。長官はビザを王外交部長が取り消したのか、取り消されていないのかを南京から受け取ったのかと、省主席に2回訊ねたがそのような情報は受け取っていないとの返信が2回あったと長官は述べた。王部長がビザ取り消しを新疆省主席に連絡出来なかったのか、スタイン卿が

去ることを期待して、主席か長官が偽りの情報を私に伝えたのか。その日夕食を伴にした際、張（監視人）を（帰路も）同行させるというので、スタイン卿は去ろうとしているから、その必要はない、もしそうするなら私に対する侮辱とを感じるだろうと言い、同行させないことに最終的に同意した。当書簡の写しはインド政府へ送付される」。

述べてきたように、ビザは取り消され出国命令が発出され、カシュガル行政長官に伝達されているにも関わらず、「再確認するイギリス側」と「受けていないとする新疆側」。「外交戦」のひとつまでである。署名肩書はCaptain R.A.（英国陸軍砲兵隊大尉）につづき英総領事とあり、イギリス側のグレイトゲームへの布陣が読み取れる。

S1931.05.21前進「オイチュト牧場先泊」、S1931.05.22前進「3時15分起床。5時45分荷駄隊を出発させる。アルパベル関所通過。夜8時15分ゲズ・カラール（峠の歩哨所）着。同所泊」。5月の朝6時前、荷駄隊出発。特段に急ぐ理由はないのに。S1931.05.23前進「廃棄された中国哨舎あたり泊」、S1931.05.24前進「ムスターグ峰がバラ色に染まる。夜1時就寝。スバシ泊」。

C1931.05.25国民政府文官処から中央研究院への函「ビザ取り消し出国を命じた」。文官処から中央研究院へは「出境を命令し取得文物を没収する」と連絡済み（C1931.05.15）なのに、10日後のこの連絡は何を意味するのか。

S1931.05.25ギルギットへ前進「馬のかいば提供を拒否される」、S1931.05.26前進「カラスカラール近くの11,800フィート（3,596m）泊」、S1931.05.27前進「タガルマ泊」、S1931.05.28前進「タシュクルガンとシンディ峡谷撮影。アクサカルが歓迎。県長の出迎え受ける。タシュクルガン泊」、S1931.05.29タシュクルガン滞在「老いぼれた融通の利かない税関吏の杓子定規な検査をうける。荷物箱をひとつずつ開けて“ku-tung-hsi”（古東西・古物）がないか確かめるため覗き込む。薬を求めるという形で検査にケリをつける。アクサカルと県長の宴会に出席。帰路に石頭城を通る」。「薬を与えて税関吏の検査にケリをつけた」スタイン。なぜ「ケリをつける」必要があったのか。疑問も残る。当時ヨーロッパ人の多くは医者と思われており、スタインも交渉道具として大量の薬品などの土産類を持ちこんでいた。

S1931.05.30ギルギットへ前進「ぶつかった困難などの手紙書く。ジュールガル・グムバズ泊」、S1931.05.31前進「雪降る。ザンカン・ジルガ入口近く泊」、S1931.06.01前進「パイク (payik) 歩哨所でビザ検閲受ける⁽¹⁴⁴⁾。午後3時30分中国最西端の歩哨所を立ち去る。手紙書く。シャガラテック岸下泊」、S1931.06.02前進「寒い朝。ルプガズ泊」。

24. 失意の出国

S1931.06.03ギルギットへ前進「4時起床。8時30分に峠（中国とフンザを分ける国境）へ到着。高度13,400フィート⁽¹⁴⁵⁾ (4,084m)。ムルクシに下り、護送するために派遣された人の出迎えを受ける。ムルクシ三角州泊」。

屈辱的失敗に終わったスタインの第四次新疆探検。彼が中国から出国したこの日は、その巧みな交渉により敦煌莫高窟仏典類を大量譲渡し、スタインに“Sir”の栄光をもたらした王圓籙道士が逝去した日（民国20年旧暦4月18日）であった。スタインの出国日はごく一部の研究者には知られている。また王道士逝去日もごく一部の研究者には知られている。二人の物語は敦煌文献持ち出しの場面に限って語られている。スタイン失意正味出国日と王道士逝去日が同一日という「二人の奇妙な恩讐」に本論執筆中に気づかされた。王道士は「中国の至宝」を売り渡し、「売国奴・敦煌石窟の罪人・無知・愚鈍⁽¹⁴⁶⁾」と冷たい視線にさらされながら生き生涯をとじた。

S1931.06.04前進「日焼けで顔と唇に痛み。休養。電話でイギリス駐ギルギット政治代表のインド人補佐役と話す。ミスガル泊」、S1931.06.05滞在「よく眠れず。ルコック夫人らへ手紙15通書く。手紙や新聞など届く。中に『大唐西域記』の日本語版あり。アレンとサックスへ電報起案。修理」、S1931.06.06ギルギットへ前進「ポーター 44人と駄馬10頭の荷駄隊8時先行。電話局で昨年9月以降の勘定精算。手紙と電報出す。交換手2人から心こもった送別挨拶。9時出発。ギチャ泊」。

記載されている大規模な荷駄隊、その荷駄重量は約1,580kg (S1931.05.12) という。豊富な資金と完全主義者ぶりが表れている。電話（郵便）局で勘定精算とある、探検中各地で受け取り、また発送した郵便物はインド側の

この電話局を経由したものと推測できる。当時の駅伝制度は意外なほど発達していた。スタインは探検開始への希望に燃えて、前年9月19日にこの電話局で同じ交換手と話している。

S1931.06.07前進「灼熱の太陽ふりそそぐ。手紙書く。ケヒバル泊」、S1931.06.08前進「パスのリンゴ樹の下泊」、S1931.06.09前進「通過地の地勢が延々と（この日もまた）。手紙書く。蠅などにいらつく」、S1931.06.10前進「親友アレンへ誕生日祝いの手紙書く。ガレス下方泊」、S1931.06.11前進「タシ・マハル泊」、S1931.06.12滞在「休息。溪谷撮影。親友エルンストらに手紙書く。フンザの青年25人の身体測定。部落長来訪。ポロ見物」、S1931.06.13前進「ヒンディー高地泊」、S1931.06.14前進「チャルト宿屋泊」。

C1931.06.15省政府金主席から外交弁事処への訓令「スタインが獲得した文物の処理について」。この史料は長さ285cm（縦25cm）にもおよぶ。「英総領事の書簡によればスタインが1930年12月から1931年2月に獲得した物は次のとおりである。購入した物は仏頭三件・立仏九尊・小座仏二十九尊…、ニヤ（遺跡）と周辺地の地表で探したもの、ニヤ（遺跡）地方カローシュティー木簡十九件・同二十七件…漢字木片二十七件…タリクドテ地方…エンデレ地方…」。わざわざ「地表で探したもの」と記している点は官吏らしい。北京の学术界や中央政府に対して「発掘禁止は守らせた」と自分たちの立場を示す文言である。

S1931.06.15ギルギットへ前進「手紙書く。ルヒド・ジチ伯爵へはハンガリー政府の勲章はロンドンに戻り次第受けると。なんら後ろめたいことはない。ノマル宿屋泊」。

ハンガリー政府の勲章受章を「なんら後ろめたいことはない」と記しているのは、国籍を捨てた事を指すのか、第四次探検での面目失墜を指すのか。あるいは両方か。

S1931.06.16前進ギルギット着「ギルギット郵便局で郵便袋受け取る。ギルギット駐在の英国政治代表一家の歓迎を受ける。この先の行程を話し合う。英国風大庭園を散策。お別れのティーパーティーにはカシミール歩兵第三連隊大佐も参加。ギルギット泊」、S1931.06.17ギルギット滞在「最近写本が発見された建物跡を観察。住民が殺到し2日間掘り続けたという。地元

長の事務室で多数の写本を観察。カシミール駐在官へ電報」。

C1931.06.18省政府から外交弁事処への訓令「すでに出境した」。

S1931.06.18ギルギット滞在「ノーブル村など探訪。写本発見に関する「タイムズ」あて短文起草。歩兵第三連隊大佐らとテニス。グルガ人士官らと陽気に話す。ピベル少佐宅で愉快地に食事」、S1931.06.19滞在「ハーエル英領インド帝国外務長官にペルシア視察について手紙書く。仏塔址を観察」、S1931.06.20滞在「手紙書く」、S1931.06.21滞在「手紙書く。墓地を見物、多くのイギリス人軍人の墓も。31頭の駄馬で運ぶ荷駄を整理」、S1931.06.22スリナガルへ出発「馬の到着を待ち、深夜3時45分になって『やっと』出発。サフト・パッリ・バンガローに午前10時着。同所泊」、S1931.06.23前進「深夜1時45分荷駄隊出発。胃腸の調子悪い。ナンガバルバット撮影。ブンジのインド政府公共工務部バンガローに午前8時30分着。郵便物処理。同所泊」、S1931.06.24前進「深夜1時出発。午前10時ムシュキン着。3日間の睡眠不足を取り戻そうと試みる。内臓不調。落石が浴室にぶつかりそう。ムシュキン泊」。

この3日間「深夜3時45分出発、午前10時着。深夜1時45分出発、午前8時30分着。深夜1時出発、午前10時着」。夜中の悪路進行は危険がともなう。少々異常と言える。荷駄隊は困った雇い主と思ったに違いない。

S1931.06.25前進「5時出発。メッカ巡礼からヤルカンドなどへ帰る一行に遭遇。数えるほどもない荷物を羨む。アストル・タシール先の公共工務部バンガロー泊」。さすがに今日は5時出発である。自身の荷駄の多さに比して巡礼団の荷物の少なさを羨んでいる。S1931.06.26前進「アレンや図書館などへ手紙起草。ゴドイのバンガロー泊」、S1931.06.27前進「シルダルコティ先泊」、S1931.06.28前進「身にしむ寒さ。積雪。通過した郵便配達員用バラックは高度13,000フィート（約3,962m）。ベシワリ旅館泊」、S1931.06.29前進「兵站通過。教え子に会う。郵便局で為替手形を受け取る、もはや必要のない補給だ。手紙書く。夜通し大雨。ルドワンの公共公務部バンガロー泊」、S1931.06.30前進「5月21日の“週刊タイムズ”掲載の風説による記事を読み、“タイムズ”へ今回遭遇した難儀についての投稿原稿6頁を書く。10時30分迄清書。クラガバル宿屋泊」、S1931.07.01前進「F・H・ブラウン（タ

イムズ紙副編集長) への手紙に“タイムズ”への投稿同封。トラガバルの公共公務部バンガロー泊。この投稿はスタインが自らの活動の正統性を主張する一環である。新聞記事にわざわざ反論せざるをえない苦渋が察しられる。スタインの「弁明投稿」は「タイムズ紙副編集長への手紙に同封」され、「タイムズ」に7月16日「中国トルキスタンへ・スタイン卿の探検・南京からの妨害」と題して掲載された。投稿には「中国政府と学界の反対は不当な非難である」との部分が見られ、漢訳され中国側が読み、騒ぎとなった。

25. スリナガル帰着

S1931.07.02前進スリナガル帰着「朝6時出発。部隊将校アーウィン少佐の歓迎の朝食を受ける。英領インド軍の最前線での丁重なもてなしで（数日前に読んだ新聞記事で悪くなっていた）機嫌が直った。基地の倉庫や医院も英国風だ。ハッキン来訪、来春に日仏会館に加入する。午後3時バンディブル出航、荷物類整理、船旅を楽しむ」。

ここに約11 ヶ月前「スリナガルより出発」したスタインの第四次新疆探検は終わった。326日間にわたる苦しい探検旅行であった。いやあえて言えば、1887年11月インドへ旅立ち、1898年9月第一次新疆探検申請書を出して以来の「異郷での生涯探検人生」の区切りでもあった。

26. 文物は何処に

中国側にとっては、スタインが収集した文物の回収問題が残っていた。

C1931.07.23省政府金主席から外交弁事処への訓令「文物未携帯出境について」。

E1931.07.27・CE32/24/50/5英総領事よりカシュガル馬紹武行政長官へのスタインが収集し残した文物の処理に関する書簡「スタイン卿が収集した物品は歴史研究のため引き渡すべきと新疆省主席が要求されているとの貴殿7月20日付書簡への返信。再度申し上げるがこれらの物品は正確に何処

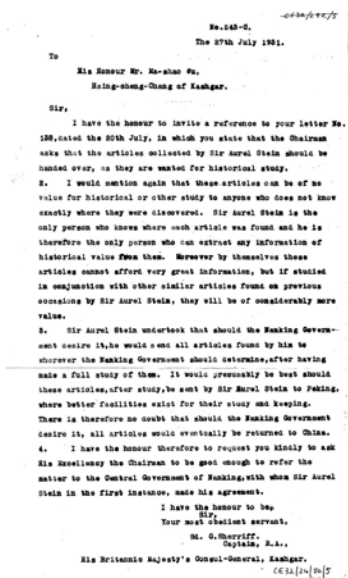


図62. 英総領事からの「文物持ち出し要請」 1931年7月27日付公文書



図63. 教育部からの「英側はロンドンで研究を希望」 民国20年（1931）8月1日付公函（部分）

で発見されたかを知らない人にとっては何の価値もない。スタイン卿はそれを知る唯一の人で、それ故にそれらから価値ある情報を引き出せるのは彼だけである。スタイン卿はかつて発見した同様の物品と関連させて研究することによりはるかに重要な価値を持つものとなる。スタイン卿はその研究を完了したのちに南京政府が望むなら、南京政府が決定した何処へでもすべてを発送すると約束した。研究後にスタイン卿により研究と保管の良い施設のある北京に発送されるのが最良と拝察する。南京政府が望むなら全ての物品は最終的に中国に返還されることに疑いの余地はない。スタイン卿が最初に合

意した南京中央政府に省主席が本件を照合されるよう謹んでお願いする」。

英総領事が遺物持ち出しを執拗に要請したのは、スタインの希望ではあるが、同時に大英帝国の中華民国との外交戦で敗北（たとえ小さくても）を避けたいとの思いもある。

スタインが「発掘」や

購入などで収集した遺物持ち出しを要請（S1931.05.04）し続けたのは「輝かしい栄光」が傷つくのを少しでも防ぐとともに、スポンサー（ハーバー

ド大学・大英博物館）への収集品提供という約定をたとえ僅かでも果たすためでもあった。本史料でも署名肩書は英国陸軍砲兵隊大尉につづき英総領事となっている。

C1931.08.01教育部から中央研究院への公函「英公使代表のスタインが文物をロンドンへ持ち帰り研究する申請」、C1931.08.04外交部から中央研究院への公函「獲得した文物をロンドンへ持っていくことへの許可否の態度」。

E1931.08.11・CE32/24/47/2英ランブソン公使から英国外務省への報告「英総領事5月18日報告スタイン卿5月18日インドへ向け出発に関しての英総領事代行からの報告の写し送付」で始まり②より箇条書きされている。

②中国当局の態度は満足には程遠く、スタイン卿の遠征に早期終了をもたらし、下劣な扱いに対して憂慮に堪えない。当公使館による再三の抗議の結果、中国外交部が当方へ覚書で脅したような、スタイン卿のビザ取り消しは行わないと通知し、科学者団体の批判を鎮静化させるためにスタイン卿の遠征目的と詳細旅程計画の覚書提出を要請してきた。しかしながら、卿は立ち塞がった度重ねる障害に苦しみられており、妨害が収まるといふ保証がなければ、継続する意味があるとは思えないと述べた。4月25日カシュガル到着後、考古学活動を実施するために数ヵ月滞在できるようにして欲しいと提示した。これに対して確定した許可が出れば詳細な旅程計画をするが、許可が出なければ山道が（氷雪が融け）開通しだいインドに戻るつもり。5月王外交部長に再度問題提起したがいつものように検討すると約束するのみで反応は鈍く、科学界の反対は手に負えず、新疆省へ満足する指示がされる望みは殆ど無いと推察している。総領事も調査継続許可を得ることは出来なかった。③スタイン卿は断念し5月18日にインドへ帰還する準備を開始。過去数回要請を受けていた省主席との私的会談するためウルムチへ行くことは価値がないと彼は考えたが、もし絶対に諦めない執着心を持っていたら、新疆での活動継続を可能にするような取り決めが、もしかしたら出来たのではと、私は今でも思っている。彼が研究地をペルシアかインド北西へ移すことを、私は承知していたし、使える限られた時間と資金を考えると中国当局から受けた陰陽組み合わせさった敵意と格闘を続けるより、この選択肢を優先することは十分に理解できる。④スタ

イン卿に対する嫌疑への彼の反論はすべて彼しだいであるが、私の考えは中国人と論争しても通常ほとんど得るものではなく、私個人としては、将来中国で研究活動したいと希望する外国人科学者が得るかもしれない利益のため、辛抱するのが最良だと思う。⑤スタイン卿は、中国政府の許可を得ない発見物は持ち出さないという彼の約束どおりに、カシュガルの英総領事館に預けて出発した。現在それらの処分について中国政府と協議中である。スタイン卿の要望どおりに大英博物館にこれらを移す許可を得る目的で、アバリング氏が先日、王部長と接触した。その面談録写しを同封。王部長は出来る限りのことを取り計らうとしているが、スタイン卿の計画を頓挫させた科学団体の考え方が中国政府の決定を左右するであろう。タイクマン氏が外交部の欧米部局長と掛け合ったが成功していない。王外交部長からの明確な回答を待っている。

この史料では三点を記したい。発信地が「北戴河」である点と写しがDipl. (外交使節団)へ送付されている点、そして「下劣な扱い・脅したような・陰陽組み合わせさった敵意・中国人と論争しても通常ほとんど得るものではなく」表現である。第一点は当時から多くの外国人が滞在した夏の保養地であり、現在でも中国中央の基本方針が根回しされる「北戴河会議」開催地からの発信である。第二点はスタイン探検「外交戦」に敗れたイギリスが各国外交官へ情報提供し、敗北汚点を若干なりとも薄める効果を期待したものと考えられる。第三点は陣営内文献とはいえ、これらの激しい表記に勝ちえなかった苦衷が表れている。三点とも今昔の「グレートゲーム」の視点で捉えることができる。

C1931.08.22教育部から中央研究院への公函「獲得した文物を国外へ持ち出す許可否の態度」。この時点まではイギリスで研究の可否について、外交面での検討がなされたのであろう。それが下記の中央研究院の意見表明で北京へ移すことに傾いていく。

C1931.08.26中央研究院から教育部への公函「獲得した文物を北京へ移動し鑑定を待つべき」、C1931.08.31教育部から中央研究院への公函「獲得文物の北京への移動に同意する」、C1931.08.31省政府から外交弁事処への訓令「獲得文物すべてを我が方へ」、C1931.09.08外交部から中央研究院への公

函「獲得した文物を新疆で審査する」、C1931.09.16中央研究院・教育部から外交部への公函「獲得した文物すべてを北京へ移動し審査を行うべき」、C1931.10.13省政府金主席から行政院と外交部への電文「英国駐北京大使館の申請を拒絶し、獲得文物を没収する」、C1931.10.17省政府金主席から外交弁事処への訓令「英国駐北京大使館の申請を拒絶し、獲得文物を没収」、C1931.11.03省政府金主席から外交弁事処への訓令「カシュガル行署にスタインが獲得した文物没収を続けて交渉する命令」。

E1931.11.24・CE32/24/58/2 英国駐カシュガル総領事ニコラス・フィッツモーリス（ジョージ・シェリフ大尉の後任）よりランブソン公使への機密扱い報告⁽¹⁴⁷⁾「オーレル・スタイン卿の探検」には「…11月21日、カシュガル馬長官を訪ね、スタイン卿によって本総領事館に預けられた古物を彼に手渡した。指定期間内に返却するから研究用にスタイン卿に貸して欲しいと提案した。馬長官から拒否され、文物は必ずウルムチへ送らねばならない、ヘディン考察団の収集品もすでにウルムチへ届けられている。4、5日前に金主席か

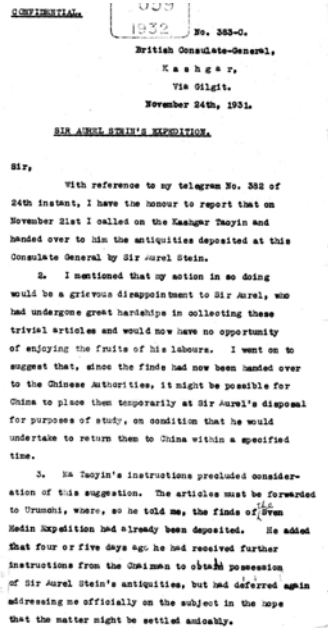


図64. 英総領事の「文物は中国側へ引き渡した」 1931年11月24日付報告（部分）

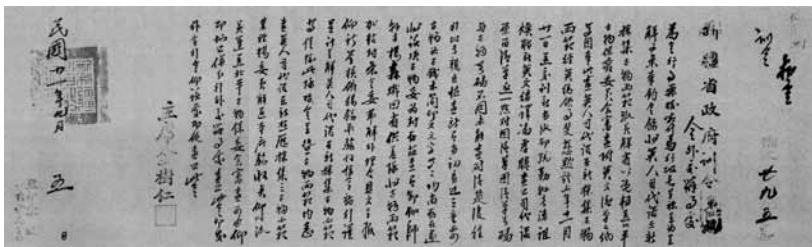


図65. 金主席の「文物は政府が受け取った」 民国21年（1932）9月5日付訓令

ら早期解決の指示を受けていると言われた…。馬長官は、もはや文物が争いの種にならないことになりとても安堵したが、それにしても派遣監視員の知らない内にどうしてあんなに沢山の文物をスタイン卿は収集できたのか、余りにも不思議だと興味を募らせた。これまでに新疆から大量文物の持ち出しがあったことは、今や中国当局者の心に深く刻まれてしまい、その結果、中国領トルキスタンでの考古学活動は、これから何年にもわたって厳しい規制を受けることになるだろう」と記されている。

C1931.12.03外交部から中央研究院への公函「省政府に關係者を派遣しスタイン獲得文物を回収し北京へ移動させることをすでに申請した」、C1931.12.11省政府金主席から外交弁事処への訓令「カシュガル行署にスタイン獲得文物を接収するなど」、C1932.01.11省政府金主席から外交弁事処への訓令「スタイン獲得文物を接収した後、ウルムチへ移動させてから北京へ移動させる」、C1932.09.05省政府金主席から外交弁事処への訓令「スタイン収集古物をウルムチへ移動させた、北京へ送付も可」。行政文書独特の繰り返しがつづく文中は「…カシュガル馬行政長（官）によると…英人スタインが新疆で収集した古物2箱は新疆政府に着き、北京古物保護愛護委員会（古物保管委員会）に送り、審査を受ける。英文リスト2枚が添付され…英人スタインが収集した古物2箱は英総領事フィッツモーリスが昨年11月21日に手渡し政府へ届いた。疏勒県長潘祖煥と英文通訳馮孝贍がスタインのリストと対照し確認した。一点ずつ確認したが、リストの番号と古物の番号が同じでなく、正確な確認は出来なかった。行政長が自ら確認したところ、当初見た（S1931.05.04）全ての重要古物、例えば古銭・木簡・印文文字（簡）などは存在していて保管した。伽師県長楊森熾は省政府へ戻るため、古物箱に封印紙を貼り、関連文書を同時に提供する。…英人スタインが新疆で収集した古物2箱は楊委員が輸送し本政府が受け取ったので、北京古物保護委員会（古物保管委員会）へ運び審査を受けることも可…」とあるが、「北京へ送った」との記述はない。

英国側から新疆側へ文物が渡されてから、9ヵ月余り経っての連絡である。北京側があれほど提出を求めたのに、この9ヵ月後の連絡は妙とも言える。先に述べたように、1931年から32年にかけては中国そして新疆にとっ

て大事が連続している。国共内戦中であり、31年9月には満州事変がはじまり、10月には新疆省金主席が南京政府を通さずロシア（ソ連邦）と密約を結び、32年1月には上海事変がはじまり、2月にはムスリム農民蜂起が起き、3月には満州国が建国されている。人々の注目はスタインからこれら歴史的出来事へ移っていたのであろう。

上記史料集刊行は2007年9月である。上記史料に示したように「スタイン収集文物は新疆省政府が受けとった」までは確認できる。新疆ウイグル自治区档案馆は大量に保管されている公文書をその後も調査しているが、現時点では新発見史料はないと、2013年12月4日、同館で新疆ウイグル自治区档案局（館）呉志強局長より説明を受けた。

ここで、拙論「I.はじめに」で述べた疑問のひとつ、スタインが残した文物は今どこにあるのかに触れる。筆者は永年にわたり中国側と共同調査を展開してきた。新疆ウイグル自治区政府顧問でもある。新疆はじめ北京などに友人・知人は多い。本論に取り掛かる以前から今日に至るまで度々質問した。文書での調査依頼もした。しかし、残念ながら現時点では、その所在は不明である⁽¹⁴⁸⁾。「風説」としては、北京にある、英国にある、インドにある、中国で売られたなどと聞く。文物とともに持ち出しを禁止された写真は大使館・ハンガリー科学アカデミー図書館に所蔵されている。

V. カブールに死す

1. 新天地をもとめて

失意のスタインは切り替えも早く、彼が終生愛したカシミールのモHAND・マルグでハーバード大学に招かれての講演（三次にわたる新疆をふくむ中央アジア探検などの「輝かしい栄光」体験）を『中央アジア踏査記』にまとめた。この成功体験をまとめることで第四次の屈辱体験を癒した。

1932年から36年にかけてイラン新政府から許可をえて四次にわたりイラン考古学調査を実施した。調査をおえた1936年12月スタインは74歳の老人

であったが、1939年にはヨルダンで飛行機による調査を開始するもすぐに禁止され、徒歩とラクダによる調査を継続した。79歳の誕生日もインダス・コスヒタン地方への調査旅行中に迎え、1943年80歳時はラスベラ（現カラチ西方）などを調査している。

2. カブールに死す

1943年4月、スタインはハーバード大学の友人からアフガニスタンの首都カブールへの招待を受けた。アフガニスタンは彼が永年調査したいと願っていた地である。友人はアメリカ国使としてカブール滞在中であった。調査費用はインド政府から支援を取り付けた。10月19日、スタインはアメリカ公使館の車で英領インド帝国ペシャワールからカブールへ到着。宿舎はアメリカ公使館である。研究心いまだ衰えぬ彼はすぐに博物館で研究に着手した。風邪をひき療養するも悪化。26日午後5時30分に旅立った。81歳になる1ヵ月前であった。ここに「異郷での生涯探検人生」は終わった。

葬儀には、アフガニスタン国王代理や英・ロシア・米・ペルシア・イラクなどの公使らが参列し、ペシャワールの教会から牧師が急ぎ駆けつけ、イギリス国教会により埋葬された。本人の強い希望という。墓はカブールの外国人墓地にあり、親友アレンの夫人による墓碑銘は次のように刻まれている。

マーク・オーレル・スタイン

インド考古学調査局員

学者、探検家にして作家

インド、中国領トルキスタン、ペルシア、それにイラクの

困難を極めた旅行により知見の領域を拡大せる人

1862年11月26日ブダペストに生まれ

1904年イギリス市民となり

1943年10月26日カブールに死す

心から愛された偉大な人

VI. おわりに

1. それぞれのグレイトゲーム

スタイン第四次新疆探検は彼自身の人生との戦いであつたと同時に、帝国主義が終焉にむかう時代激変期における中国・イギリスの国益をかけた武器なき戦いでもあつた。中国内部では南京政府・北京を主とした学术界・新疆省政府・新疆各地政府の静かな戦いでもあつた。民族間にも隠れた戦いがあつた。

スタインにとっては「探検人生」をより華やかにするつもりが、屈辱的敗北に終わった戦いであつた。中国にとってはスタインを追放に近いかたちで追い出し、それまでの外国探検家による文化財収奪を阻止する姿勢を国内と列強に示す勝利の戦いであつた。

イギリスにとってはガンディー主導が始まつた(1919)英領インド独立運動からインド独立(1946)を認めざるを得ない大英帝国崩壊の過程で起きた国力低下を内外に知らせた一幕であつた。アメリカにとってはハーバード大学への応援団の立場であり、自国民ブラムレット病氣撤退もあり戦いというほどの位置づけではなかつた。

激動期の中国内部では中央政府の命令が実質的に末端まで届かず実行されず、その混乱ぶりは見てきたとおりで、静かな争いであつた。一部の官吏からスタインが厚遇されたのもその表れである。彼に應對した新疆各地政府の役人たちが漢族であつたことは紹介してきた日記で示されている。しかし当時漢族は少数民族であつた。例えば第四次探検数年後(1935)の新疆省の人口257.58万のうち漢族は17.98万人(7%)で大多数(93%)はウイグル族などであつた⁽¹⁴⁹⁾。そこに軋轢が生じるのは当然のことで、「二重構造の社会⁽¹⁵⁰⁾」とも言われている。スタインが荷駄隊やアクサカルなどから友人のよう扱われたことにも注目する必要がある。被差別民族と被支配民族の間の友情のような交流であつた。

スタインは主役ではあつたが、脚本家はハーバード大学であり、監督は大英帝国であつたともいえる第四次新疆探検であつた。

国益をかけた諜報戦はスタインやヘディン・ペリオ・ルコック・大谷隊などの新疆探検時代だけに限らない。それ以前にも行われていたし今現在も秘かにあるいは公然と行われている。世界中のいたるところで。中国方面からではと報道されるサイバー攻撃、アメリカによる各国首脳などの通話盗聴。そして英露も日本も。

グレートゲームは一般的に19世紀中葉から20世紀初頭までの中央アジアでの勢力争いを指して使われるが、それ以外の世界中に当てはめることもできる。例えば、第二次世界大戦後の米ソ冷戦は第二のグレートゲームとも呼ばれる。グレートゲームは21世紀も続いている。諜報戦にとどまらず武力紛争や合従連衡も続いている。中央アジア・新疆周辺でいえば、図4に示した英露中3ヵ国間のアフガニスタンの細い領土（ワハン回廊）は英露間の軍事衝突をさけるための緩衝地帯として1895年確定したものであり、その後もソ連はアフガニスタン紛争に介入（1979～89）するかたちで領土拡大を目指した。中国・インド・パキスタン間の領土紛争も続いている。1996年に中国・ロシア・カザフスタン・キルギスタン・タジキスタン5ヵ国で始められた上海ファイブが発展した上海協力機構はその後、ウズベキスタンが加わり、オブザーバーとしてアフガニスタン・モンゴル・インド・パキスタン・イランも参加し、対話パートナーなどとして数ヵ国が名を連ね、共同軍事演習も実施されている。少し範囲を広げると、ベトナム戦争・中東戦争・アフガニスタン紛争なども挙げられる。また世界各地で民族・宗教・人権・領土問題も多発している。これらもある意味でグレートゲームと言えよう。

2. スタインの評価

スタインの探検と幅広い分野の研究は高く評価されている。超人的ともいえる幅であり深さであり、量である。中央アジアの歴史を語る時、さけては通れない巨大山脈である。それらを大部の著書で公開したことも特筆される。

第一次新疆探検で*PRELIMINARY REPORT OF A JOURNEY OF ARCHAEOLOGICAL AND TOPOGRAPHICAL EXPLORATION IN CHINESE TURKESTAN*（考古学と地勢学からの中国領トルキスタン探検旅行予備報告書）、*SAND-BURIED RUINS OF KHOTAN*（砂に埋もれたホータン遺跡）、*ANCIENT KHOTAN*（古代ホータン・全3巻）があり、第二次新疆（を含む中央アジア）探検では*RUINS OF DESERT CATHAY*（沙漠地カセイの廃墟）、*SERINDIA*（セリンディア・全5巻）、第三次新疆（を含む中央アジア）探検では*INNERMOST ASIA*（内陸アジア・全5巻）があげられる（書名は略表記）。1892年の*KALHANA'S RAJATARANGINI, OR THE CHRONICLE OF THE KINGS OF KASHMIR*に始まり、1940年の*OLD ROUTES OF WESTERN IRAN*まで28点も刊行している。しかもいずれも大部なものである。これらは歴史的業績といえよう。

その一方で大量の—あまりにもと形容詞をつけられる—文化財持ち出しが中国などから批判されるのも当然であろう。先に紹介したようにスタインは『中央アジア踏査記』で吐露している。

敦煌の善男善女は、現に今日でもなお、異様な情熱でこの礼拝を続けている。…わたしは、これらの洞窟寺院が依然として真の《生きている》礼拝所であることに気づいた。…したがって、この遺跡での考古学上の活動も慎重な配慮をして制限を加えておくのが望ましい、と見てとった。仏教美術の研究にも、完全に出入り自由な廃墟で与えられる機会だけにとどめておくのだ。…信仰心による、またその他の理由による、王道士の反対に対して、いかに戦ったか。…蔣四爺が、用心深く真夜中近くになってわたしのテントを訪れ、第一日目の《精選品》を入れた大きな包みを運び込んで来たときには、さすがにその満足は大きかった。道士は、わたしが漢土にいるあいだ、われわれ3人以外には、何人にも、この《出土品》の出所をいっさい秘匿しておくことを、条件として要求したのだ。…彼が気弱になるのを中和させるためには、慎重な処置と、銀貨という薬の適切な投与が必要だった…何といっても心から安堵の胸をなで下ろしたのは、それからおよそ16ヵ

月後、古文書をぎっしり詰めた24箱、絵画、刺繍、その他同様の美術品遺物を入念に梱包した5箱が、無事、ロンドンの大英博物館に搬入されたときだった⁽¹⁵¹⁾。

スタイン自身、これら文化財の持ち出しが公認のものではなく、秘密の裏取引であることを承知していたことは、自ら綴った『踏査記』上記部分で明らかである。

「スタインは結論を下した。フレスコ（壁画）と彫像は民衆の宗教儀式のためのものである。しかし、文書は当然、研究のためのものである⁽¹⁵²⁾」と自分なりに納得している。

ではこの論理をキリスト教の教会に置き換えたらどうであろう。「ステンドグラスやキリスト像は民衆の宗教儀式のためのものである。しかし、教会に収蔵されたキリスト教関係の文書は当然、研究のためのものである」から「半秘密裏に購入して持ち出しても良い」と言えるのだろうか。

文化財持ち出しはスタインに限らない。ルコックもペリオもヘディンもウォーナーも大谷隊も…。当時彼らは暴力で奪ったわけではなく、半ば同意のもとであり、現地の人々を雇い発掘し、或いは購入して持ち出している（密輸でなく）。当時の帝国主義的収奪文化のなかでの行為である。と言って許される行為ではないが…。

しかしスタインの第四次探検時は全く異なる。猛反対のなか隠れてのニヤ遺跡「発掘」での文物収集。非難されて当然である。彼らの時代に限らない。盗掘は今も行われている。中国人自身による盗掘も少なくないと聞く。筆者らが調査したダンダンウイリクへも非公式に入り文物を持ち出した欧米人もいる。何を勘違いしたのかレポートさえ出版している⁽¹⁵³⁾。その名も「中国—スイス探検隊」、この中国側とは旅行社とラクダ使いである。研究機関はどこも参加していない⁽¹⁵⁴⁾。北京大学の栄新江教授は中国側を代弁して非難の発表をしている⁽¹⁵⁵⁾。日本人でも文物局の正式許可なく旅行社レベルで入ったグループもいる⁽¹⁵⁶⁾。あるいは無許可測量などを行い拘束された邦人教授もいる⁽¹⁵⁷⁾。それぞれに言い分はあろうが残念なことである。

現地に残された文化財が破壊され盗掘され散逸した例は世界中にある。

バーミヤン石仏が爆破されたことは記憶に新しい。現地に残された文化財がいつの間にか散逸し、持ち出された文化財が保護され研究に公開されているという皮肉な矛盾もある⁽¹⁵⁸⁾。当然ながら現地で保存されるのが最善であるが現実には困難な一面もある。2010年4月カイロで中国・エジプト・ギリシャ・イタリアなど約20カ国により「古代遺跡の文化財を返せ」と国際会議が開かれた。4月8日付「読売新聞」は会議を「…我々は文化財返還を求めて各国個別に闘ってきたが、これからは協力しあうことが重要…持ち出された文化財のリストを作成し欧米など博物館へ協調して返還を求めていくことを提案…エジプトは近年、大英博物館やベルリン新博物館ヘロゼッタ・ストーンや王妃胸像などの返還を要求したが、英独とも拒否している」などと報じている。

2012年11月、大英図書館とロンドン大学で開催された「南タクラマカンの考古学－ヘディン・スタインの遺産と新しい探検－国際会議」（主催：大英図書館・ロンドン大学東洋アフリカ研究学院・新疆文物考古研究所）が開催された⁽¹⁵⁹⁾。イギリス・スウェーデン・アメリカ・フランス・ドイツ・フィンランド・日本・香港などから約100名の研究者が参加し発表が行われた。欧米におけるスタインやヘディンの高い評価を示す好例である。筆者も招聘をうけ「日中共同ニヤ&ダングンウイリク遺跡調査－世界的文化遺産保護研究を使命として」を発表した。

主催団体のひとつは新疆文物考古研究所であり、その名誉所長伊弟利斯・阿不都熱蘇勒（ニヤ調査隊員）ら5名が発表するとの案内をうけていたが、直前に参加は取り消された。新疆内の事情によるものと思われるが、スタインらを高く評価したタイトル中の“Legacy”（遺産）が影響しているのかもしれない。伊弟利斯・阿不都熱蘇勒のPPTが代理発表された。彼らの不参加によりタイトル中の「新しい探検」発表は筆者だけとなり喜ばれた。

筆者は発表の中で、その直前の10月（9月尖閣国有化問題直後）新疆ウルムチでのシンポジウム発表時に参観したティムサル博物館のスタイン像の「不法調査」とした説明版も映像で紹介した。会場は一瞬静まり返った。中国側を代弁したわけではなく、このような見方もあると。

『スタイン伝』の筆者ミルスキー女史は、スタインについて書いている。

スタインが存命中は、伝記など必要ではなかった。一般の人々は、彼の出版物や論文や講演によって、その非凡な調査研究についてよく知っていた。そしてほとんど未知にひとしい、異国での、広範囲にわたる旅行やそのはなばなしい「発見物」についての新聞の報道を通して、スタインの踏査旅行にはおくれずについて行けた。しかし彼の死は戦争中だったので知られることもなく、彼の死後、その名声は、スポットライトから退いた人の常として光彩を失ってしまった。ただ、脚注や参考文献、同時代の書物の献辞など、学問的な努力にふさわしい場に、いまだに彼の名が認められる。実際、ペルシア湾から太平洋域にいたる広大な大陸のどの場所でも、新石器時代から中世までの千年の間に生起した事柄をあつかう学問領域、すなわち－社会学、政治学、工学、宗教学、経済学、生態学、美術史等々－にしたがっている者が、スタインのパイオニア的努力にふれずにいることは困難であろう。⁽¹⁶⁰⁾

一方でミルスキーは第三次探検の部分で手厳しく批判している。

スタインが『他国の利己的利用』の責めを受けるような態度をとったことも看過しがたい。彼は自らの考古学活動を正当化するために、『中央アジアおよび極東への仏教ならびに仏教文化の伝播により、過去にインドがアジアの歴史に少なからぬ影響を与えたことは、インドの偉大な業績であり』、このゆえに『インドは当然、他国を凌ぐ利益を要求する権利を』中国領トルキスタンに持つと主張したのであった。彼の主張内容は真実である。しかしそれは彼の学者としての合理主義的思考法であり、そもそもの動機はもっと深層部に、そして完全に個人的なところにある。ダンダンウイリク、ニヤ、ミーランにおける発掘、特に漢代の長城（中国自身に非常に近いにもかかわらず中国人に知られておらず、また内陸部の通商に重要でありながら公式の記録には無視されている長城）の廃棄物の山から回収された文書類は、彼に、あ

たかも自らが中国領トルキスタンに権利を獲得したかのように思わせた。また、広大で危険に満ちた地勢が強いる条件を成功裏に克服したことは、自らをまさにその地域の主であるかのような錯覚に陥らせた。彼は古代西洋、インド、ペルシア、中国およびトルコ語族の文化の要素がみごとに織りなす過去の文化を明らかにする作業にのみ自らの姿を見、同時に、中国領トルキスタンが彼の私有物であるかのような錯覚を抱いたのであった。この錯覚は彼の傲慢である。第三次探検で免れえた現実、不幸な第四次探検で明らかにされる。⁽¹⁶¹⁾

新疆の歴史書を多数出版している新疆社会科学院歴史研究所の田衛疆所長は『近代新疆探検百年』で評している。

国学の権威である陳寅恪先生は1930年代初めに、悲しみと憤りで『敦煌は我が国の学問の悲しい歴史だ』と書いた。スタインという名は気骨ある中国人なら誰も忘れてはいけないものだ。彼は中国の西北地方の誰も気づかない敦煌莫高窟で、初めて詐欺の方法で無知の王道士から大量の写本をだまし取った。それから敦煌の文物は西方の探検家が争って略奪の対象とし、中国の文化遺産は前例のない強奪に遭った。中国でスタインの評価がたいへん悪いのはこれが主因である。しかし、筆者は数年前に友人達とミルスキーの『考古学探検家スタイン伝』を翻訳した時、もうひとつの全く違う見方を知ることが出来た。この本はスタインを『東方学者・考古学者・地理学者・地形学者であり、数少ない開拓精神を持つ中央アジアと東洋学の学者だ』としている。…アメリカのオーウェン・ラティモアは『スタインはその時代で学者・探検家・考古学者・地理学者を一体化した最も奇妙な人間だ』と述べている。…イギリスのピーター・ホップカー^{ママ}クは『シルクロードの外国悪魔』で『16年（第一次から三次）も長く旅した結果、中国と中央アジアの大量な芸術文物を持ち出した。量の多さはひとつの博物館が出来るほどだ。だから中国人に悪態をつかれ、軽蔑される。今日まで、中国人は彼を中国文化の精髓を盗んだヨーロッパ人の主犯と見ている』。

…中国の専門家と外国の専門家でスタインに対する評価が違うのは明らかだ。双方の意見が縮小するには、相互理解が必要だ。ある中国の考古学者は正しいことを言っている。『スタインの生涯を見たら、さすが事業に献身する偉大な科学探検家であるといえる。生涯かけて闘ってきた事業、そしてこの事業のために献身する精神は深刻な啓示を残した』。当然、スタインは時代の制限も受けている。彼の最大の悲劇は『自分の事業に忠実であるが、死ぬまで自分が中国で行ったことが中国人の利益を侵したことに気づいていない』ことだ。⁽¹⁶²⁾

スタインを永年にわたり研究し、先行研究『スタイン第四次中国考古日記校注』の筆者でもある王冀青は次のように評している。

スタインは我が国で永年にわたり『強盗』呼ばわりされてきた。…スタインは我が国の新疆・甘粛・寧夏などで発掘し大量の珍貴な文物を強奪した。しかも彼のむやみやたらな発掘により本来流沙に保存されるべき文物が毀損された。彼のこれらの行為は中華民族の感情を著しく傷つけた。しかし我々はスタインを評価する時、他の歴史上人物と同様にマルクス主義の二分法で評価すべきである。一面は歴史条件と植民地主義の影響を受け、東方人民の望みに反することを行った。一面は確かに一人の革新的大学者であり、多くの発見と学説の特別な価値を有することは間違いない。例えば彼の新疆や甘粛での発見と発見物の初歩的研究で中国文化が中央アジアに影響を及ぼし、中国と西方が漢唐時代にシルクロードを通じて政治・経済・文化の交流が頻繁に行われていたことを証明した。この一点を我々は無視してはならない。⁽¹⁶³⁾

ウズベキスタンの遺跡調査を永年にわたり単身つづけている加藤九祚は『シルクロードの大旅行家たち』で評している。

ユーラシア中央部の乾燥地帯における探検と発掘調査を通じて、ア

ジアとヨーロッパとの間の、はるか昔からの密接な文化的つながり、古代ギリシャ・イラン・インド・中国の間の文化交流を証明した、偉大な学者・探検家である。彼はこの事業を自らの使命と考え、結婚することも自分の家を持つこともなく、人類文化の相互理解のために『一所不住』の生涯を捧げたのである。⁽¹⁶⁴⁾

中央アジア史研究の泰斗金子民雄は「考古学的芸術破壊―スタイン第四次中央アジア探検失敗の背景」で次のように第四次探検を評している。

いかに著名な探検家であろうとも、たかが旅行が中止になったくらい、たいしたことではないと思われるであろう。しかし、このスタイン第四次探検中止の背景は、けっして単純なものではなかったし、きわめて重要な真実が隠されていた。もしこれが中止にならず実行されていたとしたら、あるいは現在の西側諸国と中国との関係は悪化し、国家間のスキャンダルにまで発展していたかもしれなかったからである。⁽¹⁶⁵⁾

ではスタイン自身はどう評価しているのであろうか。彼が第四次新疆探検後の1931～36年にかけて行ったインドとイランでの調査の報告書 *ARCHAEOLOGICAL RECONNAISSANCES IN NORTH-WESTERN INDIA AND SOUTH-EASTERN IRAN* (西北インドと南東イランにおける考古学調査・1937) に記した序の一部(第四次新疆探検の総括であり、遭遇した反対への弁明)と親友への書簡を紹介し、本論(着手以来数年で染まってしまったスタイン流の長々記述)をおえる。

この出版の目的は、考古学中心であるが地理学的関心をも意図した探検を記録することであり、1931～33年の探検はハーバード大学基金からの手厚い支援と大英博物館^{ママ}の助成金で可能になったものである。この基金は主にフォッグ美術館副館長のポール・J・サックス教授の尽力により1930年初めから集められた。私がインド政府の指令により

1900～16年にかけて行った3回の中央アジア探検についての連続講義を友人C・T・ケラー氏の提案により、ローウェル研究所で行うことになりハーバード大学総長からの招待のあとに基金づくりが開始された。目的は中国トルキスタンで探検を再開し東方へ広げることであった。アジアの他の地域でも基金は使用できると規定されていた。サックス教授がハーバード大学を代表して基金の管理を引き受けてくれた。その配慮と助力、私の労苦へ尽きることのない励ましと心温まる関心に、衷心からの感謝を書き留めておきたい。フレデリック・ケニヨン卿の推薦で大英博物館からハーバードの約七分の一に当たる寄付の申し出があった後に、私は中国政府の許可取得のため1930年春南京へ向かった。探検目的を詳述した文書を（公使へ）提出した後、英国ランプソン公使の的確な助力で中国政府外交部より新疆と内モンゴルの古代遺跡の探索と調査を認可するビザを得た。1930年8月カシミールから出発したが、パミールで中国国境に達する前に（學術団体による）悪辣な民族主義的扇動により南京政府は（探検に）妨害的姿勢を取ることを余儀なくされた。ランプソン公使の働きで中国トルキスタンへの入国異議は取り下げられた。しかし、その後も地方政府の引き延ばし策や南京政府の回避の手續きといった手段により妨害は続いた。有益な活動（探検調査）に立ちはだかった困難は私の手紙により1931年7月16日の“タイムズ”に掲載された。本書付録Bに記載し、ここでは最後の部分を引用することで我慢する。

中央アジアの歴史上、古代中国が果たした偉大で有益な役割に光を当てる功績をおさめた研究者（スタイン自身を指す）の継続活動に対する根拠なき扇動という障害によって、自分たちの国の過去の文化に関係する研究が損害を被った事を、多分近い将来、優秀な中国人研究者は認識するであろう。

1931年3月まではタリム盆地の周りを進んだが、これ以上組織的妨害に費やされることの時間的・業務的損失の深刻さを考えて、最初から考慮に入れていたもう一つの計画の実現を目指して、第一歩を踏み出した。これが、東南イランでの考古学的探査であった。⁽¹⁶⁶⁾

ニヤ遺跡「発掘」を終えた1931年2月3日に親友アレンへ書いた手紙。

かなり残酷な中国人スパイの存在は、私のアフガニスタン人たちや古い何人かの従者の献身的な努力で、やっと確保された12人の人夫たちをおびえさせるものでしたが、以前から望んでいた場所を調べることが出来ました。このようにしてわれわれは西暦3世紀の文献蒐集に、有益な追加品が確保されました。…私は、他のどこよりも死んだ過去と接して生活することできたお気に入りの古代の遺跡に最後の別れを告げました。⁽¹⁶⁷⁾

同年6月25日（スリナガル帰着直前）アレンへの手紙「私にとっては苦しい経験でした。でも危険を冒して発掘したことに対して、自らを責める必要はないと思います。⁽¹⁶⁸⁾」

親友への手紙で苦しい心中を吐露しながらも得た成果で自分を納得させ、インドとイランでの調査報告書に直接関係のない第四次新疆探検で遭遇した反対を紹介し、「タイムズへの弁明投稿」を付録として記載し、あくまで自分の行動は正しかったと主張している。

真実に多くの側面があるように、スタインにも多くの側面がある。歴史は強者によって書かれる。スタインの評価は今後も変化することであろう。激しい時代の流れの中、「いわれなき差別への劣等感と反骨心」に生きた「考古学探検家」⁽¹⁶⁹⁾マーク・オーレル・スタイン卿であった。

<注>

- (1) 新疆ウイグル自治区政府主催「小島康誉先生新疆来訪20周年記念活動」記念誌『外国友人中国情—小島康誉与新疆』新疆人民出版社2001、同政府主催「小島康誉先生新疆来訪30周年記念活動」記念誌『紀念日本友人小島康誉先生奉献新疆30周年—大愛無疆—小島精神与新疆30年』新疆美術摄影出版社2011、同日本語版『大きな愛に境界はない—小島精神と新疆30年』日本僑報社2013、『ありがとう人生燃えつき店じまい』東方出版2013など。

- (2) 文部科学省助成は、国際学術研究「西域南道仏教遺跡及び仏教文献の総合的研究－特にホータン・ニヤ地区の調査－」・研究代表者・真田康道、課題番号04041095 (1992・93年度)、07041027・09041027 (95・96・97年度)、09041035 (98・99年度) でいただいた。
- (3) 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会「キジル千仏洞修復保存募金最終報告」1989、日中共同ニヤ遺跡学術調査隊『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第一巻)法蔵館1996、(第二巻)中村印刷1999、(第三巻)真陽社2007、佛教大学・新疆文物局・佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構『日中共同ニヤ遺跡学術研究国際シンポジウム発表要旨』同実行委員会1997、佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構『シルクロード・ニヤ遺跡の謎』東方出版2002、佛教大学アジア宗教文化情報研究所・佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構・新疆文物局・新疆文物考古研究所『日中共同ダンゲンウイリク遺跡学術研究の成果をめぐって』2005、日中共同ダンゲンウイリク遺跡学術調査隊『日中共同ダンゲンウイリク遺跡学術調査報告書』真陽社2007、新疆文物考古研究所・佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構『丹丹烏里克遺址－中日共同考察研究報告』文物出版社2009、佛教大学・北京大学考古文博学院・新疆文物局・中国社会科学院考古研究所『漢唐西域考古：尼雅・丹丹烏里克国際学術研究会會議論文提要』2009、拙論『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』佛教大学宗教文化ミュージアム2013、佛教大学宗教文化ミュージアム・佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構『シルクロード新疆での世界的文化遺産保護研究と国際協力－国際シンポジウム発表要旨&写真パネル展図録』2013など。
- (4) 申請正式名は「シルクロードの始点－天山回廊の道路網」、新疆内ではキジル千仏洞のほかに、高昌故城・交河故城・北庭故城・スバシ故城・クズルガハ烽火台がふくまれ、全体では33遺跡で構成されている。世界遺産が増えすぎ、申請を抑制するため一国家は一年に自然遺産と文化遺産それぞれ一ヵ所(群)しか申請できない。中国は2014年分文化遺産では「京杭大運河」を申請しているため、本申請はキルギスタン枠で2013年1月に申請され、すでにイコモスによる調査も終了している。新疆内遺跡の調査はイコモス派遣の日本人研究者数名によって行われ、新疆文物局が接遇した。第38回世界遺産委員会は2014年6月にドーハ(カタール)で開催される。以上は2013年12月、新疆文物考古研究所での打合せ時に新疆ウイグル自治区文物局盛春寿局長より説明をうけた。
- (5) 新疆ウイグル自治区文物局電子版「關於開展絲綢之路申遺準備工作的情況介紹」(2007.4.29)・「絲綢之路申報世界遺産国内遺産選点推荐名单及其評議意見」(2008.2.15)
- (6) (7) M. Aurel Stein, *ANCIENT KHOTAN* (I～Ⅲ・Cosmo Publications1981・

- 初版Oxford University 1907)、*SERINDIA* (I ~ V・Motilal Banarsidass 1980・初版Oxford University 1921)、*INNERMOST ASIA* (I ~ V・Cosmo Publications 1981・初版Oxford University 1928)、*ON ANCIENT CENTRAL-ASIAN TRACKS* (Macmillan And Co 1933) など。
- (8) ミルスキーも『考古学探検家スタイン伝』(全2巻) 六興出版1984・(上巻) p.2で「スタインの名を名高いものとした中央アジアは、この四大文明(地中海西文明・インダス文明・イラン文明・中国文明)が出会い、たがいに作用しあう地域であった」としている。
- (9) 中央アジア一帯での英露両国などによる領土争奪諜報戦を「ザ・グレート・ゲーム」と称したのは、英国陸軍アーサー・コノリー大尉が友人ヘンリー・ローリンソン大佐へ出した書簡(1840)が最初とされ、ラドヤード・キプリングの冒険小説『キム』(1901・邦訳は『少年キム』)で流布し歴史用語化した。
- (10) 杉山二郎「スタインとその時代」前掲8『考古学探検家スタイン伝』(下巻) pp.354・356
- (11) 金子民雄『西域探検の世紀』岩波書店2002,p.iii
- (12) 金子民雄「タクラマカン、ロプ沙漠へ入った日本人たち」『新シルクロード』(第5巻) 日本放送出版協会2005,pp.112・113。白須浄眞氏の好意によると記されている。大谷探検隊への英側からのスパイ容疑については白須浄眞「野村栄三郎による第三次大谷探検隊の消滅と新・三次隊の編成－英国インド政庁のカラコルム・パス通過拒否とその余波」『大谷光瑞と国際政治社会－チベット、探検隊、辛亥革命』勉誠出版2011,pp.039-110に詳述されている。筆者はNHKの要請に応じて「新シルクロード」・「新シルクロード展」の新疆政府・新疆文物局などとの取材・出陳許可を仲介した。
- (13) 李張「ソ連の新疆省渗透工作－ヴェールをはがれた帝政以来の政策」『コムニズムの諸問題』国際文化協会1954.12,p.23。「本稿は最初『フォーリン・アフェアーズ』1954年4月号に掲載されたもので、筆者は中国人学者の匿名である」と該当書編者による説明が付されている。新疆の独走に触れにくい当時の中国の複雑な事情を反映している。その45年後に別人による実名での研究が登場している。新疆大学教授呉福環「1931年〈新蘇臨時通商協定〉評述」『東欧中亜研究』1999年第2期,pp.75-80である。また注15満州日報(1934.1.6)でも報じられている。
- (14) 本文「IV. 第四次新疆探検」で取り上げる中国側史料(C1931.05.06)などにも記されている。注15満州日報(1934.1.6)でも報じられている。新疆ウイグル自治区档案馆などの協力をえて調査したが詳細不明。
- (15) 例えば、満州日報「回教国が赤化境が英露新疆争奪戦－中央南京政府の無力に

乗じ侵略の黒手は動く」と題した記事では「露国は金樹仁（新疆省主席）と密約締結…英国は馬仲英を支持して大回教国建設に突進…スタインは英人中の新疆通で（第四次探検）で支那側は極力反対したが約半年同方面に費やして大いに得るところあり…1931年春ロンドンを出発した英国将校指揮する一隊は自動車・飛行機で大規模探検…空中視察は5万平方マイルに及んだ…英国の計画する回教国の首都は新疆西南部の亜爾甘保（アズガンサル）に建設…」(1934.1.6)、大阪毎日新聞「崩れ立つ支那の西、南辺境－新疆は露国の手中に帰し雲南は英、仏に脅かさる」(1934.4.21)、満州日日新聞「新疆省の支那離脱は全く時日の問題－ソ連の支那辺境赤化策進む」(1935.10.2)、神戸又新日報「新疆省を狙う赤露の魔手－北支一帯を“清郷”わが帝国の重責－極東大陸の特殊權益擁護、重大時局に直面す」(1935.12.26) などである。これら記事は「神戸大学電子図書館システム・一次情報表示」によった。

- (16) 謝彬『新疆事情』外務省調査部1934,pp.395・416・448-449・492・496・506
- (17) 前掲16『新疆事情』 p. 630
- (18) 藤田佳久『東亜同文書院－中国大調査旅行の研究』大明堂2000,p.13
- (19) 前掲18『東亜同文書院－中国大調査旅行の研究』 p.83
- (20) 前掲18『東亜同文書院－中国大調査旅行の研究』 p.12
- (21) 前掲18『東亜同文書院－中国大調査旅行の研究』 p.91
- (22) 前掲18『東亜同文書院－中国大調査旅行の研究』 p.334
- (23) 日野強『伊犁紀行』（復刻版）芙蓉書房 1973
- (24) 前掲23『伊犁紀行』 p.207
- (25) 前掲23『伊犁紀行』 pp.221・224・225
- (26) (27) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻） p.16
- (28) Annabel Walker., *AUREL STEIN-PIONEER OF THE SILK ROAD* (University of Washington Press1998) p.10
- (29) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻） p.50
- (30) (31) (32) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻） p.51
- (33) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻） p.78
- (34) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻） p.86
- (35) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻） p.89
- (36) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻） p.24
- (37) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻） pp.26-27
- (38) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻） p.97
- (39) ヘディン『探検家としてのわが生涯』山口四郎訳・白水社1966,p.179

スタイン第四次新疆探検とその顛末

ダンダンウイリク（丹丹烏里克）遺跡はタクラマカン沙漠南道（現在の国道315号線）の小都市ユテン（于田・旧名ケリヤ）北北西約120km（北緯37度46分・東経81度04分一帯・海拔1,250m前後）に残存する西域南道の「仏教聖地」と思われる古代都市遺跡である。ヘディンによる発見情報に触発されたスタインが1900年12月に大規模発掘を行い壁画など大量の文物を収集した。寺院址・住居址など約70ヵ所の遺構が東西約2km・南北約10km（周辺をふくむ）に分布し、スタインは収集遺物から8世紀に廃棄されたと推測している。なお、本遺跡の東方に位置するニヤ遺跡とは約145km隔てている。スタインはその足で東へとりニヤ遺跡を発見し大規模発掘を行い大量の文物を収集した。ロンドンへ帰った彼は予備報告書などで概要を発表し、これが大谷探検隊実施のひとつの契機になったとも考えられる。このようにダンダンウイリクは「シルクロード学」の原点ともなった著名な遺跡である。1905年に米国の地理学者ハンティントンが踏査し、1928年にはドイツのトリンクル隊隊員でスイスの植物学者ボスハートが踏査した。それ以来その所在が定かでなくなったが1996・97年、石油探査隊に同行した新疆文物考古研究所隊が再発見し遺跡の位置が明確となった。その情報をもとに翌年にはスイスのバウマーが未許可調査をおこなった。このように世界中の探検家や考古学者の興味をひいてきたが、大沙漠の奥深く位置することと、未開放地域に位置することなどから、本格的調査はおこなわれていなかった。なお名称については日中英文とも各種表記がある。

日中共同隊が2002年～06年、本格調査を実施、分布調査・測量とともに「西域のモノリザ」とも称される如来像壁画などを発見し発掘後に保護処理を行うなど、同遺跡の基礎研究を完了した。研究成果は報告書・シンポジウムなどで発表し続けている。なお現代の考古学では発掘は破壊につながると捉えられていて、ダンダンウイリク調査隊もニヤ調査隊（注67参照）も発掘は最小限にとどめた。

- (40) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）p.99
- (41) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）pp.100-101
- (42) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）p.102
- (43) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）p.107
- (44) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）p.28
- (45) 「英領インド軍が多種のパーティーや集いを催したが、出席者の顔ぶれから、出た方が得策と思われる時には出席した。昔からの親友の讃嘆と愛情をこめた言葉を借りれば、彼は『あの摩訶不思議な官僚界の面々』を操るのが実にうまかった」との記述がある。前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）p.29
- (46) (47) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）p.110

- (48) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』(上巻) pp.113-114
- (49) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』(上巻) p.111
- (50) 前掲16『新疆事情』 pp.538-539
- (51) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』(上巻) p.112
- (52) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』(上巻) p.115
- (53) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』(上巻) p.117
- (54) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』(上巻) p.119
- (55) スタイン『中央アジア踏査記』澤崎順之助訳・白水社1984,p.80
- (56) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』(上巻) p.172
- (57) ヘディン『アジアの砂漠をこえて』(上巻) 横川文雄訳・白水社1964,p.147
- (58) ジョージ・マカートニー (George Halliday Macartney・漢字名は馬継業・1867-1945): 父親は第二次アヘン戦争に参戦した英軍医師、母親は中国人。幼少期南京で過ごし10歳で英国へ帰国、12歳で母は他界した。英語・中国語のほかドイツ語・ロシア語・ペルシア語・フランス語(父親がフランス人と再婚したこともあり)などに精通。1890年パミール高原情勢視察を命じられたヤングハズバンド陸軍中尉の通訳としてカシュガルで活動、91年ヤングハズバンドがパミール経由(この時、ロシアのヨノフ大佐から退去を迫られたことが、アフガニスタンのパミールと現パキスタン間の細長い領土を生むことになる)インドへ帰った以降もカシュガルで英国民の保護などに努めた。スタインが探検を開始した1900年以降、「孤独的人生」といった共通項に結ばれ積極的協力をした。1909年英国駐カシュガル領事となり、11年総領事に昇任、18年退官し帰国した。マカートニーもスタインと同じ名誉称号「K.C.I.E.」(インド帝国ナイト爵位)を得ている。
- (59) (60) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』(上巻) p.185
- (61) 栄新江「傑謝(ダンダンウイリク)・唐代于闐国境の町」『日中共同ダンダンウイリク遺跡学術研究の成果をめぐって』佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構2005,p.45。スタインも前掲6 *ANCIENT KHOTAN* (I) p.267で「傑謝Li-hsieh」と取り上げている。
- (62) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』(上巻) p.204
- (63) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』(上巻) p.212
- (64) 日中共同ダンダンウイリク調査2005年隊はスタインの記録から推測した経緯度付近(BCより約12km北方)を探索したが仏塔は発見できなかった。一帯は大きな砂丘地帯であった。翌日、帰路途中に寺院址を発見したが仏塔は発見できなかった。2006年隊も探索したが発見できなかった。前掲3『日中共同ダンダンウイリク遺跡学術調査報告書』pp.64-65・67。なおこのラワック仏塔とホータン近くのラ

ワック遺跡は別の遺構である。

(65) 前掲55『中央アジア踏査記』 pp.74-75

(66) 前掲55『中央アジア踏査記』 p.76

(67) 前掲6 *ANCIENT KHOTAN* (I～II) pp.314-416

ニヤ遺跡を発見したのはスタインと記した。「発見」とは「まだ知られていなかった物事をはじめ見つけ出す」ことを指すが、ニヤ遺跡は地元の一部では廃墟として知られていた所で、スタインが広く外部に知らせたという意味で、彼が「発見」したとされている。スタイン自身も本書に「木簡の最初の発見者がイブラヒムという人物であることをつきとめた。…《古都の家》を捜し回ったときに掘り出したのだ。…わたしは即刻イブラヒムを一行の案内者に雇うことにした」と記している。中国側記述では「イブラヒム先導のもとスタインが発見」とか「イブラヒムとスタインが発見」などと記されていることも多い。同様に楼蘭の発見はヘディンであるが、新疆文物考古研究所の穆舜英名誉所長は「ヘディンの従者でウイグル人のエルデックが真の発見者だ」と著書で主張しているという（朝日新聞1992.11.25）。

ニヤ遺跡はタクラマカン沙漠南道（現在の国道315号線）の小都市民豊（ミンフン・旧名ニヤ）から約100km北上した一帯（北緯37度58分・東経82度43分一帯・海拔1,200m前後）に残る紀元前1世紀頃から紀元5世紀頃まで栄えた古代都市の遺跡であり、『漢書』などに記載の「精絶国」に比定されている。東西約7km・南北約25km（周辺を含む）という広大な範囲にわたり、仏塔を中心に、寺院・住居・生産工房・墓地・果樹園・貯水池・家畜小屋・橋状遺構・建築部材散布地・垣根・城壁・並木など約220ヵ所の遺構と数10ヵ所の遺物散布地、さらには河床・大量の枯樹林などが残存している。「西域36国」の中では中規模の都市国家であったが、ほかの都市はそのうえに新しい都市が建設されたりして殆ど消滅し、残存するなかではいまや最大の都市国家遺跡であり、古代西域研究に欠くことのできない重要な位置をしめている。ニヤ遺跡はこうに世界的文化遺産ともいえる規模と価値を有し、「シルクロードのポンペイ」・「幻の古代都市」とも称されている。

この遺跡を「ニヤ遺跡」と命名したスタインは1901年から31年にわたって四次の調査をおこない、700余点のカローシュティー文書、50余点の漢文文書など大量の文物を持ち出し、当時としては卓越した研究をおこない、詳細な報告書などで発表した。第二次大谷探検隊の橘瑞超も1909年に進入を試みたが、途中の聖人サデックを祀る墓「イマーム・サデック・マザール」までは至っているが、ニヤ遺跡には暑さのためか日程上か到達していないようである。1959年には新疆博物

館の李遇春らが調査をおこない、遺跡北部で男女合葬墓などの発掘をおこなった。これ以外にも参観程度の調査や取材がおこなわれた。これらの調査により、楼蘭（鄯善）王国の西端のオアシスとして、納税・契約・駅伝制度などの整った中央集権国家の一部であったことが判明した。二千年を経て今日まで住居の柱などがそのまま残存するタクラマカン沙漠で最大かつ重要な遺跡として注目を集め、一躍有名になったが、大沙漠の奥深くに位置するなどの理由から体系的に調査されることはなく、本格的調査が待たれていた。

日中共同隊は1988年から97年に全面的調査研究を実施、遺跡分布図作成・測量・発掘などを展開し、文字木簡200点近くを含む1,900点余りの遺物を検出、「五星出東方利中国」錦は「国宝中の国宝」に選ばれるなど歴史的成果を上げた。研究成果は報告書・シンポジウムなどで発表し続けている。調査許可取得時はスタイン最後の探検から50年余しか経過しておらず、外国との共同調査への拒否反応は、今では想像できないほど強烈であった。本文で取り上げたフィッツモーリス総領事からランプソン公使への機密扱い報告「…これまでに新疆から大量文物の持ち出しがあったことは、今や中国当局者の心に深く刻まれてしまい、その結果、中国領トルキスタンでの考古学活動は、これから何年にもわたって厳しい規制を受けることになるだろう」（E1931.11.24・CE32/24/58/2）の予測通りであった。新疆政府と解放軍に対して、新疆文化庁あげての説得と筆者のキジル千仏洞へ貢献により日中共同調査が認められた。

- (68) スタイン『砂に埋もれたホータンの廃墟』山口静一・五代徹訳・白水社1999, pp.316-317
- (69) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）p.204。筆者もスタインから86年後にクチャの路上理髪屋で頭髮と髭を剃ってもらったことがある。錆びた剃刀でガリガリと削り取られた。隣で歯を抜いてもらっている男性の悲痛な顔は忘れられない。
- (70) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）p.255
- (71) 前掲12「タクラマカン、ロプ沙漠へ入った日本人たち」pp.114-115
- (72) (73) (74) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）p.247
- (75) 前掲55『中央アジア踏査記』p.196
- (76) 加藤九祚『シルクロードの大旅行家たち』岩波書店1999, p.195。本書は加藤九祚教授をホータンのラワック遺跡へ案内した際に頂いた。王道士がスタインに「まるめこまれた」背景には経典類「仮収納」（異説あり）窟を偶然にも発見したのが王道士自身であったことと、字が読めずそれらの価値が判断できなかったことも挙げられる。彼の家は貧しく栄養失調で矮小であった。

- (77) 前掲55『中央アジア踏査記』 pp.182・187・189-190
- (78) 前掲6 *ON ANCIENT CENTRAL-ASIAN TRACKS* p.202
- (79) 前掲55『中央アジア踏査記』 pp.191・194
- (80) 前掲55『中央アジア踏査記』 pp.194-196
- (81) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻） p.358
- (82) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻） p.361
- (83) 前掲55『中央アジア踏査記』 p.196
- (84) 前掲55『中央アジア踏査記』 pp.196-197
- (85) (86) (87) 前掲55『中央アジア踏査記』 p.197
- (88) 前掲55『中央アジア踏査記』 p.198
- (89) (90) (91) (92) 佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構・新疆ウイグル自治区档案馆
『近代外国探検家新疆考古档案史料』新疆美術摄影出版社2001.p.134
- (93) 図版でお分かりいただければ、起床から通過地点の地勢や活動が殆どの頁ではみ出るほどに詳述されている。一部には略称や記号が用いられている（注132参照）など判読は容易ではない。日付・曜日など一部に誤りや当該日以外に記入などもある。沙漠化の進展などで放棄された集落や呼称変更された集落もある、またスタインの聴きとった英語表記を現地名にもどすのも難しく、本論での地名表記などには誤りもありえる。
- (94) 新疆ウイグル自治区档案局（館）とのこれら史料集共編では、新疆側が主に編集し日本側が資金負担するかたちですすめた。頁表示などに若干の誤植が認められる。『斯坦因第四次新疆探検档案史料』では研究しやすいように紙のシミなど汚れを処理している。
- (95) 各史料日付に下線を付す方式は、大谷探検隊の緻密な研究で知られる東海大学片山章雄教授の論文に示唆をえた。
- (96) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（下巻） p.174
- (97) 周樹堯「一月来之科学界」『時事月報』時事月報社1931第4巻第1期p.9。この記事の前には「スタイン新疆でまた自由活動」が掲載されている。南京で発行されていた『時事月報』は1929年12月「田中上奏文」（偽書とも言われている）を初めて報じたことで知られている。
- (98) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（下巻） p.171
- (99) 外国探検隊などにより剥ぎ取られた痛ましい壁画や崩壊すむキジル千仏洞を参観した筆者は世界的文化遺産として保存する必要があると直感し、1986年から修復保存協力を開始した。当初は個人的寄付であったが、より多くの方々の善意を結集すべく87年「協力会」を結成し、殆ど知られていないために苦勞しながら

も役員諸氏の尽力もいただき、88・89年に1億円余を新疆ウイグル自治区文化庁へ寄贈した。

当時の中国の物価から換算すると現在で言えば1億元にも相当する巨費で、中国政府の努力と相まって、キジル千仏洞はよみがえった。前掲3「キジル千仏洞修復保存募金最終報告」・『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』に詳細が記載されている。なおキジル千仏洞はクチャ西方約70kmに位置している（北緯41度47分・東経82度31分一帯・海拔1,110m前後）。3～10世紀にかけて造営された石窟寺院で、約3 kmにわたり約300窟と約10,000㎡の壁画が残存している。敦煌・雲崗・龍門と並ぶ中国四大石窟のひとつに数えられている。悠久の歴史・壁画金箔剥がし・異教徒による破壊・外国探検隊による文化財持ち出しなどにより荒廃する中、新疆文化庁により細々と保護活動が行われていた。

- (100) Susan Chan Egan., *A LATTERDAY CONFUCIAN : Reminiscences of William Hung* (Harvard University1987) pp.112-113
- (101) 前掲89『近代外国探検家新疆考古档案史料』 pp.145-146
- (102) (103) Shareen Blair Brysac., *Last of the Foreign Devils* (ARCHAEOLOGY, Archaeological Institute of America1997.11～12) p.56
- (104) 前掲100 *A LATTERDAY CONFUCIAN : Reminiscences of William Hung*, p.122
- (105) 前掲102 *Last of the Foreign Devils*, p.56
- (106) 金子民雄「考古学的芸術破壊－スタイン第四次中央アジア探検失敗の背景」『學鏡』丸善1998,p.23。金子民雄氏より贈呈いただいた。
- (107) 佛教大学ニヤ遺跡學術研究機構・新疆ウイグル自治区档案馆『中瑞西北科学考察档案史料』新疆美術摄影出版社2006,pp.3-5
- (108) ヘディン『戦乱の西域を行く』（ヘディン中央アジア探検紀行全集8・宮原朗訳）白水社1965,p.162
- (109) 前掲10「スタインとその時代」p.365
- (110) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）口絵6・（下巻）p.29
- (111) 小田部英勝「中国史における『文物』－その受容と展開」『佛教大学大学院紀要』第36号2008,pp.23-24。これらの文物保護関係法の進化したものの一部が「中華人民共和国考古涉外工作管理弁法」（通称：国家文物局令第1号、1990年12月31日國務院批准・91年2月22日施行）であり、筆者らは熟読遵守しながら共同調査を実施してきた。施行以前の1988年7月、ニヤ遺跡やダンダンウイリク遺跡などを含む西域南道の遺跡群調査に関する覚書を新疆文化庁と交わし、10月より「日中共同ニヤ遺跡學術調査」を開始し、以降も年度ごと（あるいは数年ごと）に協議書を締結し、調査を実施してきた。発掘許可は1994年1月に中国国家文物局（文化庁

に相当)より取得した。国家文物局令による外国隊への発掘許可第1号と聞かされた。この発掘許可証は前掲89『近代外国探検家新疆考古档案史料』p.036、前掲3『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』p.56などにも掲載されている。これらの手順は「日中共同ダンダンウイリク遺跡学術調査」でも同様である。スタインなどの探検家が活躍した時代とは文化財保護研究意識は様変わりしており、法規遵守は当然のことである。中国語法規には微妙な言い回しがあり注意を要した。

筆者らが実践してきた国際共同事業がどう評価されているかの一例を付記する。2010年3月19日付中国国家文物局機関紙「中国文物報」は一頁特集をくみ、ニヤ・ダンダンウイリク両遺跡の調査保護研究事業を「中国外国間共同事業と学問交流の模範例」、「多領域学問で西域考古の合作研究と保護を行った」、「中国外国学者の共同努力の傑出事業」などと最大級の評価で報道した。同報は同年6月16日にも「小島康誉:新疆に全人生を投入する感動的日本人」と一頁ちかい大型記事、光栄なことである。日中双方専門家がチームを組み、調査研究保護を展開し、成果を陸續出版した報告書や佛教大学・ウルムチ・北京大学で開催したシンポジウムで公開し、研究保護した遺物の一部が東京・京都・大阪・神戸・岡山やウルムチ・北京・上海・杭州・香港・台北をはじめとしてイタリア(ローマ)・アメリカ(ボワーズ・ヒューストン)・韓国(ソウル)での文物展へ出陳されるほどの水準であった、ことなどへの評価であろう。前掲3『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』や前掲3各種報告書・発表要旨などに詳細が記録されている。以上及び注39・注67・注99はスタイン時代との時代変化を具体的に示すため記述した。

- (112) 王冀青『斯坦因第四次中国考古日記考釋』甘肅教育出版社2004, pp.220-221、大津忠彦「スタイン滞日日記資料にみるシルクロード研究(Ⅰ・Ⅱ) - Bodleian Library (Oxford) 所蔵資料 Mss. Stein 250より -」電子版(Ⅰ) pp.99-109・(Ⅱ) pp.63-72にも発表されている。
- (113) これらの公文書には「パスポート」と記されている。中国側公文書にもパスポート・旅行許可証を意味する「護照」あるいは「護票」と記されている。現代では旅券パスポートと入国査証ビザとは異なるので、本論では「ビザ」と記述する。
- (114) 前掲112『斯坦因第四次中国考古日記考釋』p.53
- (115) スタイン日記1930年5月7日。スタインが取得したビザは現在オックスフォード大学ボドリアン図書館に収蔵されている。筆者が同図書館で調査した際は実見出来なかった、前掲102 *Last of the Foreign Devils* p.55に掲載されたビザおよび

そのキャプションを紹介した。

(116) 前掲112『斯坦因第四次中国考古日記考釋』p.53-54

(117) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（下巻）p.182に「自ら作り上げた神話をまとった人間が発したたわいのないとは言え勇ましい言葉、すなわち中国領トルキスタンの、過去も民族も奥地の秘密の場所も自分のものであるという言葉は空ろに剥がれていった。初心者のウォーナーのように彼も追放されてしまった」とミルスキーは書いている。

(118) 本船は1943年11月台湾海峡で米軍機の電撃により沈没した。スタインが横浜に上陸したアジア女帝号も軍用輸送船に改造され1942年1月シンガポール沖で日本軍機の爆撃をうけ炎上、座礁放棄された。拡大する「グレイトゲーム」の一部とも言えよう。

(119) 前掲106「考古学的芸術破壊－スタイン第四次中央アジア探検失敗の背景」p.24

(120) 中国の行政機関間連絡の文書種類は複雑である。ここに前掲89『近代外国探検家新疆考古档案史料』p.057日本語説明部分を記しておく。

電文＝上級機関に呈上する文書、現代の報告書に類似。札文＝上級機関からの文書で指示を出す際に使用。令＝法令の発布や官吏の任免および上級機関が所属機関に訓令や指示を出す際に使用。訓令＝上級機関が所属機関に指示を出す場合に使用。指令＝所属機関から呈上してきた文書についての指示。呈＝所属機関が上級機関に呈上する報告書あるいはその他の文書。咨＝並行機関や同級官署の間を行き来する文書。移文＝所属していない官署間の文書。詳文＝上級機関に呈上して指示を伺う詳しい文書。護票＝旅行あるいは出張の際に使用する通行証明書、現代のパスポートに類似。申文＝上級機関に呈上する文書、現代の報告書に類似。批文＝上級機関が所属機関に出す指示の文書。快郵代電（代電）＝短期間に送る文書。印収＝受け取り方が出す受け取った証拠に出す文書、現代の受領書に類似。溜単＝リスト。課文＝一種の並行機関間を行き来する文書。

(121) スタイン日記第四次探検中14日間の一部はハンガリー語で記されている。前掲112『斯坦因第四次中国考古日記考釋』pp.前言14-15に王冀青は「自分は分からないし専門家を探せなかった、人に知られたくないことが記録されているだろうから、プライバシー保護のため翻訳は省略した」と記している。筆者は翻訳会社に依頼し翻訳してみた。特段のプライバシー部分はなかったので、当該日に紹介したが、日記は煩雑であるので、ここに一部を再録しておく。「政府が受信した電文の内容にはがっかりした。古物の輸出規制に関するものだ。品目に例外はあるようだが(S1930.08.14)。どのような進展がえられるのか。北に帰るべきなのか(S1930.09.28)。今は亡き母の思い出(S1930.09.30)。私の帰還は祝福されるだろう

か (S1930.10.04)。銃4,000丁と家畜500頭 (?)。S (?) からの電報は悪い知らせに違いない。重要な任務を遂行するに足る時間は確保できそうにない。帰還ルートと日時を検討すべきだ (S1930.10.11)。今後の移動には様々な困難が伴う。U (?) からの回答と暗号電報の解読を待っているが来る気配はない (S1930.10.14)。実験 (活動?) の成功について疑問を抱いている。どうしたら無駄なことに時間かけずに済むのか。恐らく、冬の間に以前と同じ方法 (日程?) に戻していけば有用な仕事ができるだろう。厳しい決断が迫られている (S1930.10.16)。不言実行 (S1930.10.30)。時間を無駄にしてしまった。極度の疲れを感じる (S1931.05.07)。集約してみると、苦悩する部分が母語で表現されていることが分かる。

(122) 前掲102 *Last of the Foreign Devils*, pp.57-58

(123) 前掲112『斯坦因第四次中国考古日記考釋』p.128に「スタインのビザの裏面右下角に『民国十九年 (1930) 九月二十七日パイク関所より入境。駐タシュクルガン陸軍騎兵第一連運部検査』と記されている、スタイン日記の9月23日とは一致しない」とある。注144の出国日も同様で一致しない。9月27日はタシュクルガン駐屯部隊2人がビザと荷物検査に来訪した日であるので、パイク峠関所で23日にビザを検査され、上記の記入は、27日にこの部隊により再度検査された時の記入の可能性もある。あるいはスタインがこの部隊の間違いの可能性も否定できない。なお関所は実際の国境から隔てた地点にあり、スタイン日記の記載日が正しければ地理上の入国日は9月21日である。

(124)『新シルクロード』(第5巻)日本放送出版協会2005,p.94

(125) ジョージ・シェリフ (Major George Sherriff・1898-1967): 英国ローヤル軍事学院から1918年陸軍砲兵隊入隊、19年インド西北辺境で砲兵連隊長、27年大尉に昇任し英国駐カシュガル副領事。30年10月スタインがカシュガルに到着する直前より総領事、スタイン第四次新疆探検で各種尽力した。スタインが発源地スリナガルへ帰着した約2ヵ月後の31年8月任を解かれた。シェリフは写真が趣味で、スタイン収集文物の撮影も行った。第二次大戦中は英国チベット担当代表を務め、1949年退官。

(126) この9月27日はスタインがタシュクルガン駐屯部隊2人からビザと荷物を検査された日であり、その報告に基づいての記載と思われる。

(127) 前掲112『斯坦因第四次中国考古日記考釋』p.568

(128) 前掲112『斯坦因第四次中国考古日記考釋』pp.234-235

(129) ドモコ (達瑪溝・ダマゴウ) 遺跡はダンダンウイリク遺跡の南方約90kmに所在し、2000年羊飼いに より発見され、2002年から中国社会科学院考古研究所新疆隊の巫新華教授が発掘を続けている。筆者ら日中共同ダンダンウイリク遺跡調査隊

- も視察し、仏寺全体をおおう小博物館建設に協力した。発掘詳細は前掲3『日中共同ダナンウイリク遺跡学術調査報告書』pp.281-338に、その後の新発見については前掲3『シルクロード新疆での世界的文化遺産保護研究と国際協力－国際シンポジウム発表要旨&写真パネル展図録』pp.07-10にダナンウイリク遺跡調査張玉忠中国側隊長が、仏教美術面は同書pp.21-24に安藤佳香隊員が発表している。
- (130) 筆者へも中国や日本で度々売り込みがあったが、一切取り合わなかった。たとえ研究用であっても購入は盗掘を招くと考えるからである。
- (131) 沙漠では水の確保は困難である。スタインが調査に冬季を選んだ理由のひとつは水で運び込むためであった。日中共同ニヤ調査1988年隊は、このイマーム・サデック・マザール南の小集落カバクアスカン（大馬扎）で「羊や牛の糞の浮いた汚水」をタンクに詰めて沙漠に運び込み、煮沸して使用した。
- (132) スタイン日記ではキャンプ地は△で表記されている。イマーム・サデック・マザールからニヤ遺跡までの沙漠地帯にはタマリスク（紅柳）推が進路を遮る。タマリスクが根を張ることにより、小山を形成する。スタインはその形から𐰽𐰺𐰽𐰾・𐰽𐰾などと表記している。また人名も略語で表記、例えば親友アレンは𐰽𐰾、アンドリュースは男爵、英総領事はSh.と記すなどである。調査関係はすぐ判読できたが、人名など不明な略表記は前掲112『斯坦因第四次中国考古日記考釋』を参考にした。
- (133) スタインは「N13以北に遺構はない」と記しているが、日中共同隊は1997年次調査でN13西北約700mに小規模墓地2ヵ所を発見している。前掲3『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』（第二巻）付表・付図に表示されている。
- (134) 林梅村「漢代精絶国与尼雅遗址」『文物』文物出版社1996第12期pp.55-56
 本論は浅岡俊夫の邦訳により真田康道「尼雅川々床と尼雅遺跡の関連性について」『佛教大学文学部論集』（第85号）2001にも紹介されている。両氏とも日中共同ニヤ遺跡学術調査隊員である。林梅村は『絲綢之路散記』人民美術出版社2004, pp.65-66で同様の発表をしているが、「その中の一点の漢文木簡が人目を引いた…この漢簡の発見はニヤ遺跡が漢代の精絶国の所在地であると初めて示した」として、写真での確認とはしていない。スタイン第四次新疆探検での収集遺物が持ち出されたとの「噂」はこのあたりから生じているかもしれない。林もニヤ遺跡「発掘」としているが、王冀青「奥莱尔・斯坦因の第四次中央亞細亞考察」『敦煌学輯刊』敦煌学輯刊雜誌社1993第1期p.108にも「比較的大規模は発掘を行った」と記述されている。
- (135) エンデレ遺跡は国道315号の小オアシス安迪尔（エンデレ）北北西エンデレ牧場の東南約27kmの沙漠地帯に残存するBC1～AD8C頃の仏教遺跡で、スタインは

1901・06年に発掘し文物を収集している。

- (136) 西安測繪信息技術総站編『中国旅行交通地図冊』星球地圖出版社1996,pp.133-134。スタイン第四次探検時の道はこの地図帳時より部分的曲折があり、本文に記した距離（約1,069km・約1,542km）より多いであろうが、その比率（7割弱）は大きく異なっていないと思われる。
- (137) 前掲112『斯坦因第四次中国考古日記考釋』p.424で「この日は旧暦の大晦日（漢民族にとって一家団欒を過ごす日）にあたり、監視のため帰宅できないので機嫌が悪いのでは」と注記している。
- (138) 本文で通過地帯の地形や植生が延々と記されているとしたが、実感いただくために当日分を紹介する。この2倍ほどの日も多い。

1931年3月1日（日。土と誤記入されている）奇麗な沙漠で一晩安眠した後、朝5時起床。午前8時にラクダ隊と一緒に出発した。最初の4マイルは極めて平坦、見渡す限りの洪水氾濫の痕跡と稀にしか生えていないカウラック（？）灌木の茂みがある。続いてアシ床と枯れた低湿地が現れた。7マイル地点まで着いた時、小さな湖があった、水は塩からい。アシが生えて地を固めている。凹凸ある地帯を越えた後、二筋の狭い人工水路付近に差し掛かる。水はチェルチェン川から流れてくる。この二筋の用水路には、両方とも橋（それぞれの長さが33ヤードと11ヤード）があり、ロプ・オータン（？）との位置関係は1907年に測量した数値と完全に一致している。用水路の中を淡水が流れている。しかし、ふたつの橋の位置は地図上にマークされた位置に比べては、どうやら更に南へ1マイル寄っているようだ。

続いて、もう一つの干上がった湖を越えて先へ進んだが、つくづく味気なさを感じた。湖床の周りには少し灌木がある。1907年頃はクムコル湖にまだ水があったが、この10年の間にはとくに干あがってしまった。2マイル進み、漠々たる砂の小山地帯に入り、砂丘の上はアシととげのある低木に覆われており、その大半は枯れている。ここでしばらく休んだ。

更に先へ行き、地面上には目立つ特徴が現われ、タリム川の流れがもうここを經由しないようになり植生が途絶えつつあることが立証された。アシ床の中に見えるのは、太くて短い残り株または幾重にもからみあって把になったアシばかりで、チャイストコル湖以北で見かけた様子と同じだ。唯一の生き残った植物はうず高く積んだものの上に生えているタマリスクだ。これらすべては川が楼蘭のヤルダン地形以南地域に流れ込まれないようになってから表れる光景に相似しているようだ。しかし、ここでは風食の痕跡はいまだ発見していないし、地面にもまだ岩塩層の殻は生成されていない。ここの土壤は黄土に類似

した微小な粉末からなる。

午後4時、クルガンランガルに着いた、見るも惨めなありさまだ。ここは前回も通ったが、今やその家屋はボロボロになり、ゴミが山積みになっている。その東側のすぐ近くにタリム川の枯れた河床があり、幅は75ヤードで、深さ10～12フィートだ。河床東岸の下方では、地下水が地表にやや浅い。枯れた河床には、植生がまだ現れていない。河床外側にある小さな溜め池の中から水と氷を取った。風景は人々に強烈な印象を与えたが、クルクダリヤ河床は、河水が流れ込まないようになった後、きつとこのありさまと同じだろう。今日は一日中単調な運びで、心がくじけて気抜けしたようになった。夜8時から緯度の観測を行うが、地図に基づいて距離を測って得た数値には間違いがあることを示してくれるかもしれない、地図によって計算しておいたロブランガルとクルガンの間隔はどうやらあまりにも近すぎた。追記：計算の結果はクルガンの緯度を北へ51秒動かすべきと示している。

(139) この日登場するPrince Oyamaとは日本訪問時に会った考古学者大山柏公爵（陸軍少佐・大山巖陸軍大将次男）とも推測できる。

(140) 筆者もアクス近くの新和で地方視察中の当時の新疆ウイグル自治区主席鉄木尔・達瓦買提と出会ったことがあった。主席が地元政府幹部に筆者のことを「自分の弟のようだ。小鉄木尔と称している」などと紹介した後に地元政府の対応が様変わりしたことがある。スタインのこの体験より57年後のことである。張鴻升のスタインへの対応も変化したことだろう。

(141) スタインは著名な探検家であり考古学者であった。“The Times”は大量に報道している。Helen Wang, *Sir Aurel Stein in The Times* (Saffron Books2002) には、1901年3月30日「中国トルキスタンでの発見」から1943年11月4日「オーレル・スタイン卿」まで107点の記事が収録されている。

(142) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）p.179

「若い行政官たちは国家としての優越感を吹き込まれ、自己の能力に対する誇りとそれから生じる、支配することの正当性に対する確信を持って、東方へ就いた。ビクトリア朝の上流階層の産物である、彼らの社会的、文化的優越性に関する確信は、人種の優越感となり、あたかもイギリス人が有色人種を支配する権利を神から与えられてでもいるかのような錯覚すら起こさしめた」とある。これは植民地インドへ就く官吏を評した言葉であるが、ハンガリー国籍を捨て大英帝国の国民となったスタインにも通じるかもしれない。彼が被差別民族であるだけに、その反動としての優越感はあるものであろう。

(143) 王冀青「中英関于斯坦因第四次中亚考察所獲文物的交渉内幕」『近代史研究』近

代史研究雑誌社1994第4期p.244。同p.243には「文物撮影と目録作成…はスタインとシェリフ側が英国駐カシュガル総領事館内で行い、中国側はその場にいなかった」とスタインから親友アンドリュースへの1931年5月16日付手紙を引用し記している。

- (144) 前掲112『斯坦因第四次中国考古日記考釋』p.617に「スタインのビザの裏面右下角に『民国二十年（1931）六月三日バイク峠より出境』と記されているので、スタイン日記の6月1日とは一致しない」とある。6月1日バイク峠関所で検査を受けた際、6月3日に峠から出国予定と答え、それが記入された可能性も否定できない。注123入国日に関する裏書きには「駐タシュクルガン陸軍騎兵第一連連部検査」と組織名も記されているとあるが、出境日に関する上記裏書きには組織名記入とはされていない。関所は実際の国境から隔てた地点にあり、地理上の出国日はスタイン記載日が正しいとすれば「峠」（中国とフンザを分ける国境の峠）を越えた6月3日である。
- (145) この日の「峠（中国とフンザを分ける）に到着。海拔13,400フィート」記述と1930年9月21日の「海拔15,000フィートのキリク関を越える。30年前、初めて到達したここ中央アジア（新疆）の目的地」とは海拔が大きく異なる。別の峠であろうか。新疆ウイグル自治区測絵局編『新疆维吾尔自治区地図冊』pp.206-207タシュクルガン一帯の詳細地図にはキリク峠とミンタカ峠（15,449フィート・4,709m）のほかは記されていない。ちなみに前掲112『斯坦因第四次中国考古日記考釋』p.632には「この峠は明鉄蓋（ミンタカ）峠の南の峠、清末の地図に“山口（峠）”と記され、中国とフンザを分け、峠を越えればフンザに入る」とあるが、具体的名称は記されていない。2013年12月「新疆文化文物優秀賞」受賞者の一人でこの一帯を担当範囲とするタシュクルガン文物管理所地力薩地克・依布拉音所長（カザフ族）に訊ね略図をえたが、詳細は判明しなかった。今後検討したい。
- (146) 榮新江『敦煌学十八講』北京大学出版社2001.p.64に「彼は敦煌石經藏窟の流出責任者として、中国歴史の恥辱上、一般人は『売国奴』と罵り、文人は『敦煌石窟の罪人』と指差し、学者も『無知・愚鈍』と責めた。近年は人々の見方が寛容になりつつあり、資料も多くなったことから、一部の人は『再評価』し始めた、多くの不満をスタインやペリオなどにぶつけた。歴史は複雑だ…」と記されている。
- (147) 前掲143「中英関于斯坦因第四次中亜考察所獲文物的交渉内幕」pp.255-256にも本史料は紹介されている。
- (148) 前掲143「中英関于斯坦因第四次中亜考察所獲文物的交渉内幕」p.257にも「我々は、スタインが第四次中央アジア探検で獲得し没収された文物はウルムチにある

- はずと推測する。遠くない将来に情報が得られることを希望する」とある。
- (149) 周崇経『中国人口』（新疆分冊）中国財政経済出版社1990,p.57。2010年10月末では総人口2,181.33万、漢族874.61万人で40%を占めている（第6次全国人口調査・2011.5.5新疆ウイグル自治区統計局発表）。入植政策などによる漢民族の急増によるものである。
- (150) 王柯『東トルキスタン共和国研究－中国のイスラムと民族問題』東京大学出版会1995,p.18
- (151) 前掲55『中央アジア踏査記』 pp.187・189-194・195・196
- (152) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻） p.341
- (153) Christoph Baumer., *Dandan Oilik Revisited: New Findings a Century Later* (Oriental Art, XLV.2,1999)、*Die Südliche Seidenstraße* (Mainz am Rhein: von Zabern 2002)。当人は許可をえて発掘をおこなったとの認識で報告書もこのように出版している。新疆側の抗議で持ち出した文物の一部は返却したと聞く。「調査」で当局と各種トラブルがあったとも聞いている。
- (154) “Sino-Swiss Expedition 1998”と称する調査隊はスイス側（バウマー・テレビ局プロデューサー・新聞カメラマン・製図員）4名とウイグル族ラクダ使い・漢族旅行社員5名の計9名により構成された。榮新江「ダンダンウイリクの考古学的調査と研究（1896～2002年）」前掲3『日中共同ダンダンウイリク遺跡学術調査報告書』 p.59
- (155) 前掲154「ダンダンウイリクの考古学的調査と研究（1896～2002年）」 pp.50-51に「勝手にその中の3ヵ所を発掘し、石膏の仏像、于闐語の経典、陶罐、石皿などを掘り出したのである。…それらはすべて貴重な考古資料である。…我々は、このような勝手に発掘することは違法な行為であり、シルクロードに位置する重要な埋蔵文化財の保護からも深刻な問題をもたらした事を指摘しなければならない」などと記述している。
- (156) 新疆ウイグル自治区文物局の許可を取得せずに2001年にダンダンウイリク遺跡へ入った邦人研究者・旅行者がいるようで、「スタイン以後初めてここを訪れたのは、2001年に踏査したわれわれのグループである」との記述がある。長澤和俊編『シルクロードを知る事典』東京堂出版2002,pp.180-181
- (157) 読売新聞・京都新聞（2007.5.10）に「無許可でGPS測量、中国当局から罰金」・「中国で違法測量、行政処罰受ける」と題された記事には「総合地球環境学研究所准教授・奈良女子大学教授ら4人が新疆のカザフスタン国境近くで、GPSを用いて位置を確認し、中国の測量製図法などに違反したとして機器や調査ノートなどを押収され、各1万円の罰金処分を4月24日に受けた、と総合地球環境学研究所が

発表した」などとある。中国の新疆日報（2007.4.28）には「我が（新疆ウイグル自治）区は再び日本国民の非法測量製図事案を取り調べた」とある。また筆者が総合地球環境学研究所教授の依頼に応じて、教授と新疆を訪れ、遺憾表明に立ち会ったことも記されている。記事には2006年4月日本人研究者がホータンで同様な事案で取り調べられたことも記されている。これらの記事では実名入りで報じられているが、ここでは略した。

- (158) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）p.329につぎのような記述がある。
「スタインは『盗人』あるいは『強盗』と、中国人に呼ばれてきた。今日では、貴重な経巻や書画を、ヨーロッパに搬出したことにより、中国側の歴史学上の権利を侵害したとの見方もある。しかし、スタインが彼の時代に受けた評価は、そのようなものではなかった。当時の考古学は、それら文物の搬出を、科学的見地から合法と考えたのである。異論もあろう。しかし非難が、砂中深く埋没していたニヤ、ダンダンウイリク、あるいはミーランからの発見物にまでおよばぬことは明記されるべきである。さらに、彼の行為について、いかに議論が尽くされようとも、常に残る疑問点がある。すなわち、もしスタインがそれら宝物の搬出を行わなければ、果たして蒐集品として残り得たであろうか。あるいは残り得たとしても、北京に運ばれた一万にもおよぶ古文書の、多くのものがそうであったように、結局は小分けにして商人の手に渡され、迂回の挙句に西洋の蒐集品に加えられるという運命をたどったのではなかろうかという点である。言うまでもなくスタインが大英博物館に運び込んだものの中には、その後、個人の手に渡されたり、あるいは切り刻まれたり紛失されたりしたものは皆無である」。
- (159) BRITISH LIBRARY・SOAS University of London・XINJIANG INSTITUTE OF ARCHAEOLOGY., *International Conference-Archaeology of the Southern Taklamakan: Hedin and Stein's Legacy and New Explorations 8th-10th November 2012*
- (160) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（上巻）p.1
- (161) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（下巻）pp.36-37
- (162) 田衛疆『近代新疆探検百年』新疆青少年出版社2006, pp.178-180
- (163) 王冀青「馬爾克・奧萊爾・斯坦因」『中外敦煌学家評伝』甘肅教育出版社2002, p.302
- (164) 前掲76『シルクロードの大旅行家たち』p.174
- (165) 前掲106「考古学的芸術破壊－スタイン第四次中央アジア探検失敗の背景」p.20
- (166) ス タ イ ン *ARCHAEOLOGICAL RECONNAISSANCES IN NORTH-WESTERN INDIA AND SOUTH-EASTERN IRAN* (Oxford University 1937) pp.PREFACE
- (167) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』（下巻）pp.181-182

(168) 前掲8『考古学探検家スタイン伝』(下巻) p.182

(169) 「考古学探検家」、それはスタインが英領インド帝国考古学局長へ強く要求し、「あまりにも大げさすぎ、探検が辺境に偏る印象を与え、政治的に得策でない」として、許可されなかった肩書である。局長は「特別探検家」を提案したが、それも官僚たちから華やかすぎるとされた。前掲8『考古学探検家スタイン伝』(下巻) pp.12-13

<付記>

人名や地名などは一般的日本語表記によった、文献によっては異なる場合もある。例えば本論で採用したマークがマルク、スウェンがスヴェン、ハーバードがハーヴァード、カシュガルがカシュガール、ペルシアがベルシャ、グレートゲームがグレート・ゲーム…とされている文献もある。中国の地名・書名・漢族名は相当する日本漢字を使用した。またウイグル族の氏名表記はスタインの報告書などによった、中国文献表記の邦訳とは異なることもある。特に必要と思われる人物などについてはその母国語でも記した。敬称は略した。

地名は現在名を主としたが、一部に当時の地名も採用した。

写真の大半は筆者撮影、ほかの撮影者名は写真下に記した。なおスタインの探検をより具体的に紹介するため、その報告書掲載の写真も転載している。

<謝辞>

拙論執筆にあたりご指導ご協力いただいた方々の芳名を記し感謝としたい。

オックスフォード大学ボドリアン図書館と大英博物館での特別調査には所属研究機関の推薦が必要であり、浄土宗教育資団(現佛教教育学園)水谷幸正理事長(故人)の推薦をいただいた。拙論完成に当たっては国宝『法然上人絵伝』の研究で知られる中井真孝佛教教育学園理事長に種々教示いただいた。大英博物館での調査ではClarissa Von Spee(大英図書館Susan Whitfield氏の紹介)・Stephanie Clarke各氏、オックスフォード大学ボドリアン図書館での調査ではIan Wilde・Helen Wilton Godberforde・Ben Arnold 各氏らに温かい特別配慮をいただいた。大英博物館での調査や大英図書館での発表時通訳では竹内伸幸氏(在ロンドン30年)、大英博物館とボドリアン図書館での調査では田畑浩一郎・矢口千代美両氏にお世話になった。

独特の筆致のスタインの日記と書簡類は「假定法過去完了・二重三重否定文」でその「解説」と関係史料の翻訳そして英文サマリー作成では辞書片手水準の筆者に対してダンダンウイリク遺跡へ一緒に英語熟達者高田和行・洋子夫妻(サウスカロライナ大学大学院国際関係学修士)から格別のご助勢をいただいた。スタインのいう完

全なクリーニングと発掘との考古学上の微妙な差については京都市埋蔵文化財研究所吉崎伸調査課長（ニヤ調査隊員）に教えて頂いた。一部資料入手では六甲山麓遺跡調査会浅岡俊夫代表（ニヤ&ダングンウイリク調査隊員）・佛教大学安藤佳香教授（ダングンウイリク調査隊員）・同大学本多廣賢参与（佛大ニヤ機構事務局）と石出英樹・美佐夫妻（在デトロイト15年）の協力を得た。

新疆ウイグル自治区档案局許新江局長（当時）と呉志强局長および局幹部の方々には前掲書の共同出版と継続調査での史料提供でお世話になった。1986年キジル千仏洞参観・1988年ニヤ調査開始・2002年ダングンウイリク調査開始も一緒という不思議な縁に結ばれた「老朋友」新疆ウイグル自治区文物局盛春寿局長には度々激励いただくとともにキジル千仏洞の世界遺産登録進展状況を教示いただいた。新疆文物考古研究所于志勇所長（ニヤ調査中国側二代目学術隊長）にはスタインが残した文物に関する情報などを提供いただいた。また同研究所張玉忠前副所長（ニヤ調査隊員・ダングンウイリク調査中国側隊長）には「発掘と清理（スタインのいう完全なクリーニングに近い中国語）」は「掘る作業自体は同じ」と中国での区分について教示いただいた。

約80年前の中国行政文書の表現は現在とはかなり異なる。前述史料出版時の日本語目次作成では孫宗清氏（残留孤児としての苦勞をへて新疆大学日本語講師として活躍）に尽力いただき、拙論執筆時には胡平氏（ウルムチ市外事弁公室元処長）に行程調査など各種特段助力をいただいた。中国語の一部解釈では永野浩史・何祖傑両氏（アジアドキュメンタリーセンター）に手伝っていただいた。中国語新聞・雑誌の入手では趙新利氏（早稲田大学政治学博士・中国伝媒大学講師）と孫躍新（佛大ニヤ機構研究員・京都大学建築学博士）・周培彦（佛大ニヤ機構研究員）夫妻の協力をえた。佛教大学宗教文化ミュージアム小野田俊蔵館長には拙論を『研究紀要』に採用いただいた。地図の清書はアイアド・プラス社にお願いした。ハンガリー語翻訳は高田夫妻紹介の翻訳センターにお願いした。事前調査段階には加藤九祚・金子民雄・白須淨眞・片山章雄各氏から貴重な研究書を署名入りで贈呈いただいた。新疆日報楊新才主任記者からも関係書を提供いただいた。そして資料収集や校正を手伝ってくれた国際貢献手弁当長期実践の同志小島聡子。

皆々様ありがとうございました。（スタイン流の長々とした謝辞となった）

大谷隊やドイツ隊などが文化財を持ち出したキジル千仏洞の修復保存協力から、スタインが発見し大規模発掘を行ったニヤ遺跡の共同調査研究、ヘディンが発見しスタインが大規模発掘を行ったダングンウイリク遺跡の共同調査研究とその壁画保護研究、各種国際協力へと発展した過程で、スタインの生き様に興味を持ち浅々をかえりみず、門外漢ながらに史料や先行研究を紹介しただけの拙論、誤りも多いと思われる。賢学諸氏の叱正教示を賜れば望外の幸せである。今後スタイン研究を目指す方々

の一参考になればと強く願い、ここに稿を成した次第である。敦煌王圓籙道士の「功績（經典秘藏窟発見）は百代に伝えられる…」と刻まれた墓に近日詣でたい。拙稿が刊行される2014年3月の3ヵ月後、28年前に修復保存協力を開始した「キジル千仏洞」が「世界文化遺産」に登録されることと文化財保護研究方面でも各国間の国際協力が一層進展することを、さらにはアフガニスタンへの「退避勧告・渡航延期勧告」が引き下げられ、スタインの墓に詣でられる日が来ることを念じつつ筆を擱く。

<参考文献>

日本語

- 李張「ソ連の新疆省滲透工作－ヴェールをはがれた帝政以来の政策」『コムニズムの諸問題』国際文化協会1954
- 日野強『伊犂紀行』（復刻版）芙蓉書房1973（初版1909）
- 前嶋信次・加藤九祚編『シルクロード事典』芙蓉書房1975
- 榎一雄『シルクロードの歴史から』研文出版1979
- 長澤和俊『シルク・ロード史研究』国書刊行会1979
- 塩英哲編訳『精選・中国地名辞典』凌雲出版1983
- 金子民雄『秘められたベルリン使節－ヘディンのナチ・ドイツ日記』胡桃書房1986
- 小島康誉『シルクロードの点と線』プラス1988
- 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会「キジル千仏洞修復保存募金中間報告」1988
- 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会「キジル千仏洞修復保存募金最終報告」1989
- 西徳二郎・福島安正『シルクロード紀行Ⅰ』（海外渡航記叢書3・金子民雄現代語化）雄松堂出版1990
- 東京国立博物館ほか編『ドイツ・トゥルファン探検隊・西域美術展』朝日新聞社1991
- 金子民雄『中央アジアに入った日本人』中央公論社1992
- 王柯『東トルキスタン共和国研究－中国のイスラムと民族問題』東京大学出版会1995
- 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』（第一巻・日中両文）法蔵館 1996
- 広瀬崇子編『イスラーム諸国の民主化と民族問題』（21世紀の民族と国家第3巻）未来社1998
- 金子民雄『文明の中の辺境』北宋社1998
- 金子民雄「考古学的芸術破壊－スタイン第四次中央アジア探検失敗の背景」『學鐙』丸善1998
- 加藤九祚『シルクロードの大旅行家たち』岩波書店1999
- 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』（第二巻・日中両文）

スタイン第四次新疆探検とその顛末

中村印刷 1999

藤田佳久『東亜同文書院－中国大調査旅行の研究』大明堂2000

片山章雄「1902年8月、大谷探検隊のロンドン出発」『東海大学紀要文学部』2001

片山章雄「大谷光瑞の欧州留学」『東海大学紀要文学部』2002

長澤和俊『シルクロードを知る事典』東京堂出版2002

金子民雄『西域探検の世紀』岩波書店2002

佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構編『シルクロード・ニヤ遺跡の謎』東方出版2002

白須浄眞『大谷探検隊とその時代』勉誠出版2002

片山章雄編『予曾々英国倫敦に在り』大谷記念館2004

津金幹彦『シルクロードの民族と文化』文芸社2004

NHK「新シルクロード」プロジェクト編『新シルクロード』（第2・5巻）日本放送出版協会2005

佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構編『日中共同ダンダンウイリク遺跡学術研究プロジェクト国際シンポジウム発表要旨』2005

日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』（第三巻）真陽社2007

日中共同ダンダンウイリク遺跡学術調査隊編『日中共同ダンダンウイリク遺跡学術調査報告書』真陽社2007

岡田英弘編『清朝とは何か』（別冊環16）藤原書店2009

白須浄眞編『大谷光瑞と国際政治社会－チベット、探検隊、辛亥革命』勉誠出版2011

小島康誉『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』佛教大学宗教文化ミュージアム2013

謝彬『新疆事情』（調第14号・外務省調査部訳）外務省調査部1934

ヘディン『アジアの砂漠をこえて』（上下・ヘディン中央アジア探検紀行全集1・2・横川文雄訳）白水社1964

ヘディン『戦乱の西域を行く』（ヘディン中央アジア探検紀行全集8・宮原朗訳）白水社1965

ヘディン『探検家としてのわが生涯』（山口四郎訳・ヘディン中央アジア探検紀行全集11）白水社1966

ブルジュワルスキー『中央アジアの探検』（全2巻・田村俊介訳）白水社1982

ミルスキー『考古学探検家スタイン伝』（全2巻・杉山二郎・伊吹寛子・瀧梢訳）六興出版1984

スタイン『中央アジア踏査記』（澤崎順之助訳）白水社1984

スタイン『アレクサンダーの道－ガンダーラ・スワート』（谷口陸男・澤田和夫訳）白水

社1984

ピーター・ホップカーク『ザ・グレート・ゲーム－内陸アジアをめぐる英露のスパイ合戦』
(京谷公雄訳) 中央公論社1992

スタイン『砂に埋もれたホータンの廃墟』(山口静・五代徹訳) 白水社1999

イアン・バーンズほか『アジア大陸歴史地図』(大陸別歴史地図2・増田えりか訳) 東洋書
林2001

ブルジェワルスキー『黄河源流からロブ湖へ』(西域探検紀行選集・加藤九祚・中野好之
訳) 白水社2004

コズロフ『蒙古と青海』(西域探検紀行選集・西義之訳) 白水社2004

ヤングハズバンド『カラコルムを越えて』(西域探検紀行選集・石一郎訳) 白水社2004

マカートニー夫人『カシュガル滞在記』(金子民雄訳) 連合出版2007

林漢濟編『中国歴史地図』(吉田光男訳) 平凡社2009

ラドヤード・キプリング『少年キム』(齊藤兆史訳) 筑摩書房2010

中国語

周樹堯「一月来之科学界」『時事月報』時事月報社1931第4巻第1期

新疆社会科学院民族研究所編『新疆簡史』(第一巻) 新疆人民出版社1980

蘆燕『絲路文物被盜記』新華出版社1984

張在普編『中国近現代政区沿革表』福建省地図出版社1987

周崇経『中国人口』(新疆分冊) 中国財政經濟出版社1990

譚其驥編『簡明中国歴史地図集』中国地図出版社1991

王冀青「奥萊尔・斯坦因の第四次中央亞細亞考察」『敦煌學輯刊』敦煌學輯刊雜誌社1993
第1期

王冀青「中英関于斯坦因第四次中亞考察所獲文物的交渉内幕」『近代史研究』近代史研究
雜誌社1994第4期

林梅村「漢代精絶国与尼雅遺址」『文物』文物出版社1996第12期

西安測繪信息技術總站編『中国旅行交通地圖冊』星球地圖出版社1996

新疆文物考古研究所・新疆博物館編『新疆文物考古新収獲』(続) 新疆美術攝影出版社
1997

新疆维吾尔自治区文物局・新疆文物考古研究所・新疆博物館ほか編『新疆文物古迹大観』
新疆美術攝影出版社1999

新疆维吾尔自治区档案馆・佛教大学ニヤ遺跡學術研究機構編『近代外国探検家新疆考古
档案史料』新疆美術攝影出版社2001 (目次など日・英文)

栄新江『敦煌学十八講』北京大学出版社2001

- 陸慶夫・王冀青編『中外敦煌学家評伝』甘肅教育出版社2002
王冀青『斯坦因第四次中国考古日記考釋』甘肅教育出版社2004
林梅村『絲綢之路散記』人民美術出版社2004
新疆維吾尔自治区档案馆・佛教大学ニヤ遺跡學術研究機構編『中瑞西北科学考察档案史料』新疆美術摄影出版社2006（目次など日・英文）
田衛疆『近代新疆探検百年』新疆青少年出版社2006
新疆維吾尔自治区档案馆・佛教大学ニヤ遺跡學術研究機構編『斯坦因第四次新疆探検档案史料』新疆美術摄影出版社2007（目次など日・英文）
新疆維吾尔自治区測繪局編『新疆維吾尔自治区地圖冊』山東省地圖出版社2007
新疆文物考古研究所・佛教大学ニヤ遺跡學術研究機構編『丹丹烏里克遺址－中日共同考察研究報告』文物出版社2009
乾隆帝序『乾隆得勝図－平定西域戦図』（複製版）臨川書店2009（初版フランス1774）
陳自仁『斯坦因在絲綢之路上的探検与盗宝活動－敦煌之痛』甘肅人民美術出版社2011
国家文物局編『中国文物地圖集－新疆維吾尔自治区分冊』（上・下）文物出版社2012

英語

- M. Aurel Stein., *ANCIENT KHOTAN*（Ⅰ～Ⅲ・Cosmo Publications1981・初版Oxford University1907）
M. Aurel Stein., *SERINDIA*（Ⅰ～Ⅴ・Motilal Banarsidass1980・初版Oxford University 1921）
M. Aurel Stein., *INNERMOST ASIA*（Ⅰ～Ⅴ・Cosmo Publications 1981・初版Oxford University 1928）
M. Aurel Stein., *ON ANCIENT CENTRAL-ASIAN TRACKS*（Macmillan And Co1933）
M. Aurel Stein., *ARCHAEOLOGICAL RECONNAISSANCES IN NORTH-WESTERN INDIA AND SOUTH-EASTERN IRAN*（Oxford University1937）
Annabel Walker., *AUREL STEIN-PIONEER OF THE SILK ROAD*（University of Washington Press1998・初版London1995）
Susan Chan Egan., *A LATTERDAY CONFUCIAN : Reminiscences of William Hung*（Harvard College1987）
Shareen Blair Brysac., *Last of the Foreign Devils ARCHAEOLOGY*（Archaeological Institute of America 1997.11～12）
Christoph Baumer., *DandanOilik Revisited: New Findings a Century Later*（*Oriental Art*, XLV.2,1999）
Helen Wang., *Sir Aurel Stein in The Times*（Saffron Books 2002）

＜図版出典一覧＞

中国側档案史料は新疆ウイグル自治区档案馆（一部は他の中国内档案馆）蔵、スタイン日記はオックスフォード大学ボドリアン図書館蔵、スタイン日記以外のスタイン関係史料は大英博物館蔵である。それ以外についてはそれぞれに記載した。行末記載年は筆者撮影年度。

- 1 マーク・オーレル・スタイン卿（右下に署名と1929）、スタイン*SERINDIA*（復刻版）カバーより
- 2 スタインがニヤ遺跡に残した「鍋蓋」（部分）、新疆文物考古研究所蔵、2013
- 3 ユーラシア大陸での中国新疆の地理的概念図、筆者作図
- 4 1930年頃の中・英印・露の勢力略図、イアン・バーンズほか『アジア大陸歴史地図』などより筆者作図
- 5 旧英国駐カシュガル領事館、2009
- 6 旧ロシア駐カシュガル領事館、2009
- 7 スタインがダングンウイリク遺跡から収集した板絵、スタイン*ON ANCIENT CENTRAL-ASIAN TRACKS*, p.62附写真31
- 8 スタイン*ANCIENT KHOTAN*（Ⅰ）p.267（部分）
- 9 スタインがダングンウイリク遺跡から収集した板絵、大英博物館（特別収蔵庫）蔵、2012
- 10 スタインが大規模発掘したダングンウイリク遺跡、スタイン番号D15・日中共同隊CD-1、2002
- 11 スタインがニヤ遺跡から収集した椅子、大英博物館蔵、2009
- 12 スタインが大規模発掘したニヤ遺跡、スタイン番号N12・日中共同隊92A10、1992
- 13 敦煌莫高窟での王圓籙道士、スタイン*SERINDIA*（Ⅱ）p.804附写真198
- 14 敦煌莫高窟第17窟（経蔵窟）入口と古写本類、スタイン*SERINDIA*（Ⅱ）p.804附写真200
- 15 スタインがニヤ遺跡から収集したカラーシュティー木簡、スタイン*SERINDIA*（Ⅳ）p.XX I
- 16 スタインが王道士から購入した大般涅槃経など、スタイン*SERINDIA*（Ⅳ）p.CLX V II
- 17 大英博物館、大英図書館は1973年分離、2009
- 18 スタインのサイン、第四次探検で協力をえたケニヨンへの書簡（E1930.02.20・CE32/24/13/1）より
- 19 ハーバード大学サックスからスタインへの書簡（部分・E1930.01.04・CE32/24/10/1）

スタイン第四次新疆探検とその顛末

- 20 スタインからサックスへの返信（部分・E1930.01.09・CE32/24/11）
- 21 ハーバード大学フォッグ美術館スタイン卿費用見積（E1930.01.04・CE32/24/10/3）
- 22 中国－ヘディン西北科学考察協議書（部分）、『中瑞西北科学考察档案史料』図版p.8
- 23 ヘディン側作成による新疆考察团予定表、『中瑞西北科学考察档案史料』図版p.30
- 24 ヘディン一行に出された中国鉄道部護照、『中瑞西北科学考察档案史料』図版p.7
- 25 桃山陵・知恩院・西本願寺・博物館…スタイン日記1930年4月16日
- 26 薬師寺・日光月光・唐招提寺・ダンドンウイリク…スタイン日記1930年4月18日
- 27 ランプソン公使・スタインと王正廷外交部長との面談録（E1930.05.01・CE32/24/19/5）
- 28 スタイン日記1930年5月1日
- 29 スタインに発給されたビザ（遊歴護照・部分）、オックスフォード大学ボドリアン図書館蔵、ブライザック*Last of the Foreign Devils*, p.55
- 30 中華民国外交部から新疆省への1930年5月6日発信電文、『斯坦因第四次新疆探検档案史料』p.1
- 31 スタイン第四次新疆探検はスリナガル出発前から注視されていた、「大公報」1930年7月17日
- 32 スタイン日記1930年8月14日（部分）
- 33 スタイン日記1930年8月23日（部分）
- 34 スタイン日記1930年9月26日（部分）
- 35 張紹伯外交連絡官から觀察使への1913年8月28日付公函、『近代外国探検家新疆考古档案史料』p.113の原件
- 36 スタイン第四次新疆探検行程表、筆者作成
- 37 スタイン第四次新疆探検行程略図、胡平・筆者作図
- 38 英シェリフ総領事から新疆省金樹仁主席への1930年11月11日付公函、『斯坦因第四次新疆探検档案史料』p.25
- 39 ニヤ遺跡から離れる新疆省把握ルートとニヤ遺跡に近づくスタイン希望ルート、筆者作図
- 40 国民政府文官処から中央研究院への1930年12月3日付公函（部分）、『斯坦因第四次新疆探検档案史料』p.37
- 41 スタイン日記1930年12月5日（部分）
- 42 スタイン日記1930年12月19～31日（部分）
- 43 新疆省金主席から行政院蒋介石院長への1930年12月26日付密電、『斯坦因第四次新疆探検档案史料』p.40
- 44 中華民国行政院から新疆省金主席への1930年12月31日付密電、『斯坦因第四次新疆探

- 検档案史料』 p.46
- 45 スタインの測量図、ホータン周辺（部分）、スタイン*SERINDIA*（V）MAPS.20
- 46 スタイン日記1931年1月20日（部分）
- 47 スタイン日記1931年1月24日（部分）
- 48 ミーラン遺跡発掘状況、スタイン*SERINDIA*（I） p.460附写真116
- 49 スタイン*INNERMOST ASIA*（I） p.147（部分）
- 50 監視委員らから新疆省金主席への1931年2月15日付報告（部分）、『斯坦因第四次新疆探検档案史料』 p.62
- 51 スタイン「戻るのは絶対困る」は何故か、参考ルート図、筆者作図
- 52 外国探検隊などにより剥ぎ取られたキジル千仏洞第224窟壁画、2010
- 53 キジル千仏洞谷西区の一角、上るのも危険な梯子、1986
- 54 スタイン日記1931年4月26日
- 55 新疆省金主席からカシュガル馬長官への1931年5月4日付電文、『斯坦因第四次新疆探検档案史料』 p.70
- 56 スタインが収集文物に添付した覚書中の一覧表、『斯坦因第四次新疆探検档案史料』 p.105
- 57 スタインが収集文物に添付した覚書（部分）、『斯坦因第四次新疆探検档案史料』 p.105
- 58 国民政府から行政院への1931年5月6日付訓令（部分）、『斯坦因第四次新疆探検档案史料』 p.74
- 59 蔣中正（介石）名の中央研究院への1931年5月6日付国民政府指令、『斯坦因第四次新疆探検档案史料』 p.75
- 60 “The Times”1931年3月30日（部分・E1931.03.30・CE32/24/37）
- 61 「中央日報」1931年4月25日
- 62 英国陸軍砲兵隊大尉・英総領事からカシュガル馬長官への公文書（E1931.07.27・CE32/24/50/5）
- 63 国民政府教育部から中央研究院への1931年8月1日付公函（部分）、『斯坦因第四次新疆探検档案史料』 p.88
- 64 英フィッツモーリス総領事からランブソン公使への報告（部分・E1931.11.24・CE32/24/58/2）
- 65 新疆省金主席より外交弁事処への1932年9月5日付訓令、『斯坦因第四次新疆探検档案史料』 pp.108-109

The Whole Story of Sir Marc Aurel Stein's 4th Expedition To Xinjiang in Central Asia

Yasutaka Kojima

The purpose of this thesis is to clarify some questionable points in regard to the 4th expedition to Central Asia, specifically China Xinjiang, by Sir Marc Aurel Stein (1862-1943), the archaeological explorer born in Hungary and naturalized later in England. He spent 326 days for the expedition, leaving Srinagar in Kashmir on Aug. 11, 1930, and arriving back there July 2, 1931. During this period, even though Sir Aurel Stein encountered such troubles as “the cancellation of the visa and an immediate deportation” directed by the Government of the Republic of China, he struggled to reach the Niya ruins where he had established “glorious achievements” through three previous expeditions. He managed to excavate and collect 130 or so antiquities in the Niya ruins and others, all the while avoiding the Government's observers.

I have visited Xinjiang more than 140 times since 1982 and worked on numerous Japan-China joint activities, including the restoration and preservation of the Kizil grottoes, archaeological research of the Niya ruins, archaeological research of the DandanOilik ruins along with the conservation of its wall paintings, a network to raise awareness of cultural property protection (www.wenbao.net), and a provision of a grant for researchers engaged in conserving cultural relics. The results of this research and these studies were disclosed via reports and symposiums, and the efforts of Chinese as well as Japanese researchers are still being made. I also had an opportunity to present much of the research about the Niya and DandanOilik ruins at the “International Conference-Archaeology of the Southern Taklamakan: Hedin and Stein's Legacy and New Explorations,” which was held in November 2012 at the British Library.

Stein's reports helped me greatly as useful references in the course of researching in the Taklamakan Desert, which led me to become interested in his way of life and to write this thesis. As I have been fortunate to know Xinjiang very well along with the desert research noted above, I am in a somewhat better position to come to grips with Stein's undertakings than the academic scholars of Central Asia and the so-called "Silk Road enthusiasts."

While Stein's first (1900-1901), second (1906-1908), and third (1913-1916) expeditions were well known because a massive volume of his reports on those expeditions was published due to the great success of them, the report of his fourth expedition (1930-1931) was not issued due to a humiliating failure. Thus his expeditions to Central Asia were thought to be only three until recently and the fourth expedition was not well-known. As information of this expedition has gradually spread in recent years, the archival records of the fourth expedition were beginning to be disclosed. Yet there remain a number of unclear points.

As references for my research, I have mainly used the following materials. The *Xinjiang Archaeological Archives of Modern Foreign Explorers*, *Archives of Stein's Fourth Expedition to Xinjiang*, and *Historical Archival Documents of Sino-Sweden Scientific Expedition to North-West China*, all of which were published jointly with Xinjiang Uygur Autonomous Region Archives. "Stein's Diary" was acquired from the Bodleian Libraries of Oxford University, and the "Stein-related Archives" was acquired from the British Museum – both of which deserve deep thanks and support. I also refer to Jeannette Mirsky, *SIR AUREL STEIN : ARCHAEOLOGICAL EXPLORER* published by University of Chicago Press in 1977; Susan Chan Egan, *A LATTERDAY CONFUCIAN: Reminiscences of William Hung* published by Harvard University in 1987; Shareen Blair Brysac, *Last of the Foreign Devils, Archaeology* published by the Archaeological Institute of America in 1997; Annabel Walker, *AUREL STEIN-PIONEER OF*

THE SILK ROAD published by University of Washington Press in 1998; Helen Wang, *Sir Aurel Stein in The Times* published by Saffron Books in 2002; and Wang Ji Qing, *Deliberations on Stein's Diary of the Fourth Archaeological Expedition to China* published by Gansu Educational Publisher in 2004. I would like to express my sincere appreciation to all parties mentioned above, as they provided me with important information and inspiration.

Why did people like Professor Paul J. Sachs at the Fogg Art Museum of Harvard University, who understood how the views on cultural heritage were drastically changing among the Chinese (specifically scholars in Beijing), propose the Xinjiang expedition to Stein with a \$100,000 grant? Especially considering that the funds were proposed following the Great Crash at the New York Stock Exchange (Oct. 24, 1929), which triggered the Great Depression? Harvard University envisioned filling the Fogg Art Museum with relics excavated in Central Asia. Langdon Warner at the Fogg Art Museum was not allowed to remove some parts of a wall surface on his second visit to Dunhuang. To make their wish come true they hired Stein as a “professional” explorer. America, a country with a short history, was longing for ancient cultural heritage. During the “Museum Era,” when museums were being built one after another, people satisfied their desires with a variety of art pieces and antiques.

Why did England, including its Indian Empire, continue to support Stein's Xinjiang expedition? Stein had brought a large volume of Central Asia's relics, including those from Niya, DandanOilik, Loulan, and Dunhuang, to the British Empire while championing the norms of the Imperialism Age. He was considered a great hero in terms of culture, similar to a general winning a war. To seize those relics by endorsing him was one of the best ways to show how great this imperial power was.

I am wondering why a person such as Stein, who was superb in collecting information and familiar with Chinese affairs, misread the

situation in those days. Harvard University invited Stein to deliver a series of lectures at the Lowell Institute at the age of 67 just one year after he retired from the Archaeological Bureau of the Indian Empire. We can sense the desire of both Stein and Sachs for relics through their correspondences. Mirsky referred to Stein's attempt to climb Mount Mustagh Ata on his first Central Asia expedition in a rivalry with Hedin. While Hedin was proceeding with comprehensive research of the Chinese northwestern area jointly with China, Stein thought he could single-handedly manage this expedition with British diplomatic power as well as his own exploring capabilities overriding objections from John Leighton Stuart and William Hung from the Harvard side.

In the end of April the next year, he arrived in Nanjing to discuss acquisition of a visa with British Minister Miles Lampson on the 28th. The following day, the minister visited the director of the Nanjing Government's Foreign Affairs, Wang Zheng Ting, to submit memorandums regarding both Stein's expedition and arms exports requested by the Xinjiang Province. He pressed for the issuance of Stein's visa. On May 1, Stein, along with Minister Lampson, visited the Director of Foreign Affairs, Wang, to explain the expedition plan and request the visa. The visa was issued on May 6th and received 7th. The reason Stein asked the British Museum to subsidize the Harvard proposal was that he focused more on Great Britain's diplomatic power rather than on financial assistance. The visa could not have been issued without British involvement.

The interpretation of this visa was widely different between the Chinese side and Stein, which led to the subsequent turmoil. The visa was described as “遊歷護照”, meaning “a travel passport.” Minister Lampson also cited in his telegram of June 12, 1930, to the Secretary of Foreign Affairs of the Indian Empire, “Stein has merely been furnished with a passport for ordinary travel in Hsinchiang and Inner Mongolia, and, if he intends to collect antiquities and remove them from the country, he should

submit to the Institute a statement of the object, scope and plans of his proposed research and obtain their approval.”

However, according to Stein's counterstatement (dated May 10, 1931) sent from Kashgar during his exploration to address reproaches from both the Chinese Foreign Affairs and the National Commission for the Preservation of Antiquities, “I received a passport authorizing me to travel in Hsin-chiang and Inner Mongolia for archaeological purposes, this permission being understood to include needful surveys.... It was on a definite understanding that I was to be allowed to examine and, where necessary, to clear any ancient ruins traced.” He stated in “The Times” on July 16, 1931 on his way back to Srinagar: “Passport was understood to provide also permission for such survey work.” And in the preface of the research report conducted in India and Iran, *Archaeological Reconnaissance's in North-Western India and South Iran* (1937), he stated, “...to obtain the issue by the Chinese Ministry of Foreign Affairs of a passport authorizing me to trace and closely investigate ancient remains in Hsing-chiang and Inner Mongol.”

Thus, both parties argued on different planes, and Stein was thwarted from entering China. Minister Lampson worked hard to successfully let him enter the country, but he was stuck in Kashgar. Finally, thanks to the tremendous efforts made by Consul General George Sherriff and others, Stein could proceed eastward on the South Road of the Taklamakan Desert on November 11, 1930. Observers dispatched by the Government accompanied him. Every trick came into play on the Stein side, wishing to reach neighboring Keriya without letting them know their true destination -- the Niya ruins. The Xinjiang side wanted to summon Stein to Urumqi to check on his intention. The scene was described in lurid detail in the Xinjiang archives, Stein's diary, and in the British Government's archives. Developing bronchitis, Stein had to stay in Keriya for treatment for 20 days or so. Soon afterward he advanced to the Niya ruins to research there for

about a week and collected a number of relics.

In spite of being summoned to come to Urumqi by Jin Shu Ren, the Chairman of Xinjiang Province, Stein ignored it because he may have anticipated that it was risky to return to Kashgar via Keriya carrying the relics. Thus he took a detour by circling the Taklamakan Desert and stopping at Cherchen, Charkliq, Korla, Kucha and Aksu. He finally returned to Kashgar on April 25, 1931. Stein negotiated through the Consul General to bring back the relics he had collected from the Niya ruins for research and then return them to China. But as his request ended in rejection, Stein had no choice but to leave Kashgar for home on May 18.

Why did Stein “dig up” the Niya ruins despite the fact that research and excavations were forbidden? The collections of the ruins in Niya and other places rewarded him with the title of “Sir” as well as being naturalized in Britain. He needed to secure that honor first of all. He also had to perform “the relics providing agreements” with Harvard University and the British Museum. Stein also put the words “complete cleaning” in his diary in place of “excavation” and let his Indian and Uygurian subordinates work ahead of him. Meanwhile, he kept records in a tent to keep the observers off guard. He also made investigations while the observers were sleeping.

And what kinds of actions were taken domestically in China, including by the Central Government, Xinjiang and local regions? Social turmoil was prevailing there soon after the establishment of the Republic of China, intensive intrusion by foreign powers, and rivalry between the local warlords. In fact, the Xinjiang Province took a different tack from the Central Government. Concerning local treatment for Stein, a welcoming response was recorded thanks to the issue of an arms import in some quarters. Within Xinjiang, conflicting ideas were observed among local governments of Urumqi and other regions. Even among ethnic groups, different views were expressed. Stein received a big welcome from old friends, but some local supporters from the first expedition were arrested

and cast into prison.

Where are the relics collected by Stein now, as they were forbidden from being removed by the Chinese Government? Is the rumor true that some parts of the banned relics are stored at the British Museum? Though we can verify by Chinese archives that the relics Stein left at the British counsel in Kashgar were actually transported to Urumqi, no one knows their current whereabouts. That is because rumors have been spread that they are at the British Museum, in Beijing or were sold within China. The pictures that were banned from leaving along with relics are now stored at the British Library and at the Library of the Hungarian Academy of Sciences.

In addition, how should we come to grips with the activities of bringing out cultural materials by explorers from abroad, including Stein's Britain, Germany, Japan, the U.S., and France? From the end of the 19th century through the beginning of the 20th century, when the "exploration boom" was being exploited by the major powers, excavations and removal of artifacts were partly allowed for research purposes. That is why every explorer from any country could hire people at the site and work together with them. However, that way of thinking had changed by the time of Stein's fourth expedition. We have to recognize that the activities conducted up until the third expedition should be clearly distinguished from those of the fourth expedition. It is no wonder that the fourth expedition to Xinjiang is denounced. While ideally cultural materials should be stored where they actually were, we often see examples where removed relics have been preserved, yet those left at sites were destroyed or scattered.

England and Russia (the Soviet Union) waged an intelligence-gathering battle to expand territory across the entire Central Asia including Xinjiang after the middle of the 19th century. The explorers of each nation could be called vanguards in the intelligence-gathering battle to acquire territory. Because so many people from England and Russia lived in Xinjiang, some

records show that it is similar to a settlement, which is the so-called “Great Game.” Though we can see an old example of “The Great Game” in the area of the Wakhan Corridor in Afghanistan, it continues now not only in Central Asia but across the world.

While the protagonist of Stein’s fourth expedition was nobody but Stein himself, the “scriptwriter” and director were Harvard University and the British Empire, respectively. Stein’s expeditions and research, which extended over a wide variety of fields, have been highly valued. Their spectrum, depth and volume are almost superhuman. We cannot discuss the history of Central Asia without referring to him just as we cannot easily pass over a huge mountain. It is also noteworthy that he offered what he had done to the public through a massive volume of books. Whereas Stein has been highly regarded in Europe as well as in Japan, the Chinese people consider him to be the epitome of a looter.

“The lifetime explorer wandering around strange lands” who turned “his inferiority complex and defiant spirit against an irrelevant discrimination” into his own energy source is sleeping in Kabul.